

第6回
全国史料ネット
研究交流集会
in神戸 報告書

2020年
2月8日(土)～9日(日)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

第6回
全国史料ネット
研究交流集会
in神戸 報告書

2020年
2月8日(土)～9日(日)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

開催趣旨



阪神・淡路大震災を機に始まった災害時の歴史資料や文化財の保全活動は、現在に至るまで各地の被災地を中心に広がってきました。こうした広がりを受け、2015年から開催してきた研究交流集会を、今回は再び神戸で開催します。

2019年は、台風の上陸による被害が日本列島各地で相次ぎました。これに対して、各地の資料ネットは、それぞれの地域のネットワークを活かした活動を展開するとともに、新たに資料ネットを立ち上げた地域も出てきました。同時に資料ネット活動の継続と、それを支えるための広域的なネットワークづくりの課題や可能性があらわれています。

一方、このような動きを支援する取り組みとして2018年度より始まった、人間文化研究機構の「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を通じて各地の資料ネットを支える大学間のネットワーク構築や、災害時における相互支援体制や資料の保存研究・活用に向けた体制づくりが進みつつあります。

こうした動向を踏まえつつ、阪神・淡路大震災から25年の節目にあたる2020年において、当時の取り組みを振り返るとともに、各地の資料ネット関係者が集うことで、これからも予想されるさまざまな災害から地域の歴史文化を守るための課題と展望を考える場とします。

目次

開催趣旨 3

第1日 2月8日

- 開会挨拶 平川 南（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長） 5
第1セッション 「大規模災害時の全国連携・支援 ― 台風19号をめぐる ―」 7
会場紹介 「御影公会堂と神戸空襲、阪神・淡路大震災」 25
第2セッション 「史料ネットの25年と資料保全・地域史のあゆみ」 27
ポスターセッション 49

第2日 2月9日

- 第3セッション 「史料ネットと震災資料の25年」 55
第4セッション 「資料保全の担い手の広がりと未来」 71
閉会挨拶 奥村 弘（歴史資料ネットワーク代表） 85
オプション企画 「被災歴史資料保全ワークショップの考え方」 87

講演者・報告者紹介 89

開会の挨拶

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 機構長

平川 南



阪神・淡路大震災から25年の時を迎え、資料ネットも新たな段階に入ったとあってよいかと思います。また、そうせねばならないと日本全体の状況を見ても思います。それは皆さん共通した認識だと思います。

人間文化研究機構は、関西では大阪の国立民族学博物館、京都の国際日本文化研究センターと総合地球環境学研究所、関東では、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館、東京都立川市の国文学研究資料館と国立国語研究所の6つの機関で構成されている組織です。当機構は人文学の総合化を目指す研究機構ですが、頻発する自然災害という課題についても十分に対応する事業を考えていく必要性を痛感しておりました。そうしたなか、神戸大学の奥村弘さんより、全国で活動する資料ネットを強化するための連携を図りたいとのご相談をいただき、その後人間文化研究機構は、阪神・淡路大震災以来中核的役割を果たした神戸大学、東日本大震災の復興の核となった東北大学と協定を締結し、2018年度より「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を立ち上げることになりました。これまでに、既に多くの資料ネットがそれぞれの地域で非常に活発に活動をされていましたが、今後は日本列島、すべての都道府県に1つずつ拠点を設けないと対応しきれないのではないかと考え、各地のネットワーク構築を支援すべく、5つの重点事業ということを決めました。1番目が「資料の所在調査・資料保存の研究」、2番目が「データの記録化」です。全国各地にある重要な歴史文化資料をデータ化して、それを皆で活用できるようにするということが目指したものです。3番目として「相互レスキュー支援体制の構築」です。また、我々はこの考え方を若い世代に伝えていかなければいけない。後継者を育成しなければいけないということから「教育プログラムの開発、人材育成」ということを4番目の大きな柱に致しました。5番目にこのわが国で行われている資料ネット事業というものは恐らく世界各地で同様の状況におかれているわけですので、積極的に「国内外に向けた情報の発信」をするということに力を傾けていこうと考えています。この5つの重点事業は、それぞれ達成されるまでに非常に長い時間を

要しますので、引き続き継続していきたいと考えています。

そして事業の最終目標を、「地域社会における歴史文化の継承と創成」と定めました。全国の各地域にある歴史文化資料をきちんと調査し、その中から何を継承していかなければならないかということを検討し、この神戸の取り組みに象徴されるように、各地で調査、研究した成果が、やがてその地域の文化遺産、我々の継承すべきものとなり、それぞれの地域の豊かな歴史文化をつくっていくこと。これを事業の最終目標と私達は考えています。

人間文化研究機構では、日本研究の国際的発展を目指し、「人間文化研究機構日本研究国際賞」を創設しました。先日、その第1回目の受賞者の、コロンビア大学の日本文学研究者ハルオ・シラネ先生が、授賞式のご挨拶で「今アメリカにおいても人文学は非常に危機的な状況だ。そのために一人一人の研究者がパブリック・ヒューマニティーズという「開かれた人文学」を心がけて、多くの社会へ発信し、人文学研究が私達の社会にとっていかに必要かということ、やさしい語りで大勢の方に理解していただく」ことの必要性を提唱されました。それがおそらく資料ネットで皆さまが常に市民の側に目を向けて、まさに共同で作業されている経験が大きな意味を持つものだと思います。パブリック・ヒューマニティーズ「開かれた人文学」ということを、皆さんと一緒に資料ネットの充実を図っていく今後の指標として是非加えていただき頑張りたいと思います。これからもよろしく願いいたします。

第1セッション

大規模災害時の全国連携・支援 — 台風19号をめぐって —



登壇者

原田 和彦
(信州資料ネット)

蝦名 裕一
(NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク)

阿部 浩一
(ふくしま歴史資料保存ネットワーク)

佐藤 和明・有馬 花苗
(茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク)

司会

天野 真志
(国立歴史民俗博物館)

吉原 大志
(歴史資料ネットワーク)

大規模災害時の被災歴史資料保全活動への全国的な連携や支援は、東日本大震災以後大きな広がりを見せています。特に、毎年のように発生する自然災害に対し、被災地の救済活動を支援する取り組みが広く展開し、広域災害に備えるネットワークのあり方が議論されています。

2019年も多くの自然災害が日本列島を襲いましたが、台風19号は列島各地に甚大な被害を及ぼしました。この災害に対し、被災地においては積み重ねを活かした保全活動が展開するとともに、災害を契機に新たな資料ネットが設立されるなど、地域における活動の広がりもみられました。台風19号被災地におけるこうした動向を踏まえ、資料保全のための全国的なつながりを、これからどのように支え、続けていくのかを、各地からの活動報告をもとに考えます。

台風 19 号災害における長野市での取り組み



信州資料ネット／長野市立博物館

原田 和彦

1. 罹災した地域の歴史的な特質

まず、昨年の 10 月の被災に関しまして、皆さまから多大なご支援をいただきましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございますでした。

台風 19 号の災害ですが、まず起きることはないだろうという前提で生活をしていましたので、とても困ったところがあります。今回大きな被害が起こったのは穂保というところで、長野市では長沼という地名が一般的に使われております。千曲川の堤防が決壊して洪水になったところが豊野町、松代町、若穂、篠ノ井塩崎の 4 ヶ所あります。これらの地域は、長野市にとって歴史的に非常に重要な場所になります。

特に長沼というところはお城があって、また小林一茶の資料が一番ある地域でもあります。古くから長沼という地名が確認されていまして、浄土真宗の初期の重要な拠点でもあります。豊野町についても、島津家文書に太田荘関係の資料が多く残っています。松代町は城下町でして、城下町の少し東側には尾飾城があり、この地域にとっては非常に重要な場所でした。

今回文化財レスキューを実施したところは、お寺や公民館、公会堂が数ヶ所ですが、あとは個人宅です。これらの資料は長野市立博物館にて保存しています。

2. 活動開始からこれまでの経緯

10 月 16 日に被災地を見て回りましたが、その過程で新潟歴史資料救援ネットワークの原直史先生から「長

野を支援できるよ」とお話をいただき、18 日に長野市の中で協議し、全国の資料ネットに今回の活動を支援してもらおうということを庁内で決めました。その後 19 日には対策本部会議にこのことを報告しまして、活動に参加しますということを周知しました。21 日に現地入りしましたが、その際に新潟や神戸の皆さんにお越しいただき、いろんなことをご援助、ご指導をいただきました。非常にありがたかったです。その後、22 日に信州大学を代表として信州資料ネットを立ち上げました。

3. これまでの救済文化財の種類

今回の災害では、博物館資料には影響がありませんでしたが、民間に所在する歴史資料、美術品約 18 件の被害が確認されました。そのうち区有文書が 3 件ありますので、総数がどの程度になるか、まだわかりませんが、おおよその資料数としては数千点にのぼるだろうと思います。

4. ご支援とご指導

こちら全国の資料ネットから人的、物質的支援をいただき、また日本博物館協会からも全面的ご支援をいただいております。あとは県内の大学関係に加え、首都圏の大学の皆さんにも来ていただいております。

国文学研究資料館の皆さんも来ていただいております。私達はノウハウが全くないので、新潟県立歴史博物館さんや歴史資料ネットワーク等から多大なご協力をいただいております。さらに、京都造形芸術大学（京都芸術大学）の大林賢太郎先生も新潟大学の矢田俊文先生からご

紹介いただいて、非常に今もご協力いただいております。

5. 1月までの参加者と延べ人数

昨年の10月から1月まで、総計564人の方にお越しいただいて活動が続いております。12月から週3回の作業としていますが、現在も大勢の方に来ていただいております。

以下では、活動の経過についてご紹介します。10月21日には松代町の2つのお寺に入りました。F寺に入ると平安時代、鎌倉時代の仏像がありました。仏像は大丈夫だったのですが、水に浸かった経典が561点ありました。なお、平安時代の仏像は無事でしたが、30体の仏像をひとまずすべてお預かりしました。仏像1体は庫裡にあったもので、完全に水に浸かって泥がついています。鎌倉時代の仏像で、全部泥をとって年末にお返しいたしました。

となりのT寺からも救出いたしました。庫裡の中で散在しているような状況でしたから、掛け軸等を積み込んできました。経蔵も床下まで水につかったようですが、大丈夫でした。

長沼支所ですが、中も水圧で倒れています。この中に掛け軸があるから出してくれと相談され、10分くらい格闘していろいろと出てきました。

こちらは長沼にあります浄土真宗で非常に重要なお寺でして、ここからも救出しました。泥がすごい状況でして、掛け軸300本水に浸かっています。これとは別に、区有文書があるよという情報が入りまして、行ってみた



長沼支所の内部

ら、重たくて筆筒の引き出しが開かないんです。中にいっぱい古文書が入っており、運び出しました。

赤沼というところにも区有文書がありまして、これはもう地元の方が中から出して干していた状況です。干して1週間から2週間ぐらい経っていましたので、かなり固まってしまっていました。

災害ゴミについてですが、被災したものが全部ゴミとして出されていました。この中に文書もあるのではないかとも思いましたが、探すことはできませんでした。

乾燥作業については、今まで全くやったことがないので、いろんなことを調べてやってみました。最初掛け軸は、クリーニングしながら開けていましたが、これではとても間に合わないということで、とりあえず全部開けてみることにしました。その後、水損した掛け軸を1点ずつ撮影して調書を取り、所有者の方に今後どうするかご意向を聞いている途中です。

先程申し上げた通り大般若経が大量に入ってきたものですから、この処理に2、3週間奮闘しました。最初は1点1点开けていましたが、全部開けたほうがいと神戸の史料ネットから言われ、一気に開けてみたらすぐに乾きました。学生さんがきた時には、一日に何十巻と開けて、本当に早い時期に乾燥が終わりました。

文書も最初は試行錯誤で、水で洗ったりしてみました。がばらばらになってしまい、これはだめだという事になり、国立歴史民俗博物館の天野真志さんに来ていただきワークショップをやりました。そこで新聞に巻いて上から抑えて、水を抜くことを知りました。こういうことなんだと初めて知りました。みんなで新聞を代えながら



長沼の寺院の様子

やりました。また、収納用の資材もいただきまして、感謝しかありません。

何週間も経って、泥水に浸かって固まった文書が結構運びこまれています。これについては水で洗って乾燥させるようなことをやっています。また、郷土にとっては非常に貴重な絵画資料が大量に入ってきています。これは扱ったことがないので、水につかって、泥が付着してカビが発生し、どうしたらいいのかわからなくて、試行錯誤しながら綿棒とかでカビをとったり、泥をとったりするような作業をしています。水害から1か月経ってから屏風をお預かりしたんですけれども、開けたら両方くっついて壊れちゃう状況で、どうしたらいいかと困っていたら、尾立和則さんにお越しいただきワークショップをみんなで見ながらやってみました。下張りをはがしながら、本紙のほうまではがすという作業を2

日くらいやりました。くっついて泥が入ってしまったりとくっついているような状況でした。

6. 課題

最初に申しあげた通り、文書だけではなく仏像や絵画などいろいろなものが救出されてきています。これからの活動の形としては、掛け軸が一番の問題でして、これをどうしようかというところです。本紙をはずしていくことが一番いいのですが、劣化が進んできていますので、このあたりをどうやっていこうというのが来年度の課題かなと思っています。

また、古文書を冷凍庫の中に置いていますが、少しずつ乾燥させながら、目録を同時にとっていきながら、形を残していきたいなと思っています。



屏風の解体作業

令和元年台風における宮城資料ネットの対応 — 文化財マップの作成と活用 —



NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

蝦名 裕一



今日は、令和元年台風における宮城資料ネットの対応について報告します。

今回の台風 19 号は、10 月 11 日から 13 日にかけて日本列島を縦断、宮城県は 12 日の深夜から 13 日未明にかけて台風が通過しました。これにより各地で甚大な被害が発生しており、宮城資料ネットでは web サイト、SNS、メールニュースなどを通じて災害情報の収集と資料の廃棄防止についての呼びかけをおこないました。また、宮城県文化財課や東北歴史博物館をはじめ、被災自治体の担当者と連絡をとり、10 月 16 日から 11 月 2 日にかけて被災資料への対応を実施しました。

さて、今回の対応における特徴的な取り組みとして、文化財マップの作成とこれを活用した文化財・歴史資料

の被災状況調査があります。文化財マップの作成については、数年前から試行錯誤を重ねていましたが、今回の台風 19 号への対応に際し、この文化財マップを活用して被災地を巡回し、文化財や民間所在資料の状況調査をおこないましたので、これを事例に紹介いたします。

ここでいう文化財マップとは、国や自治体が公開している文化財の位置情報をエクセルデータに入力し、グーグルマップやグーグルアースの地図上に落とし込んでいったものです。この地図に、災害時に国土地理院が出している河川氾濫の浸水段彩図など被災状況に関する各種情報を、グーグルアース上で文化財の位置情報と重ね合わせます。これにより、どの地域で文化財や歴史資料に被害が生じているかを予測することができます。

被災状況調査(大郷町)



図 1 大郷町の文化財マップと被災状況

我々の方では、昨年度までの段階で、全国の国指定文化財の位置情報はおよそデータベース化できていました。今年度は県指定のデータベースを作成しているところに、今回の台風被害が発生しました。台風が宮城県を通過した13日夕方頃になると、報道でも河川氾濫の情報が発信され、各地の被害状況が明らかになってきました。そこで、私の研究室で実施している古文書の勉強会に参加している学生達に呼びかけて、被災地域の文化財について位置情報のデータベース作成を手伝ってもらいました。具体的には、被災地域に所在する文化財、おもに市町村の文化財について、役所が公開している情報や観光情報から文化財の位置情報を抽出して、データ入力してもらいました。14日から15日頃には宮城県をはじめ、被害の報道が出ていた福島県、茨城県、長野県などの文化財の位置情報がまとまり、被害状況と重ね合わせた所見をまとめ、各地の関係者に情報を共有することができました。

宮城県については、指定文化財のほか、宮城資料ネットが2003年の宮城県北部地震以降に実施した自治体史などから抽出した民間所在史料の情報や、各地で実施した訪問調査のデータを文化財マップに取り込みました。すると吉田川が氾濫した大郷町などで、多くの民間所在

史料が被災している可能性が高いことが分かりました(図1)。そこで、グーグルマップで作成した文化財の位置情報をスマートフォンに共有し、川内淳史さんに運転してもらいながら文化財マップを活用した被災状況の巡回調査をおこないました。

宮城県内の巡回調査は、10月18日の大郷町の調査から始まり、1か月くらいかけて宮城県の主な被災地を概ね巡回しました。実際にこのマップをもとに現地へ行ってみますと、大郷町では吉田川のほとりに位置するお寺が被災し、同寺が所有していたマリア観音が流されていたなどの被害が確認されました。次に、丸森町では随所で土砂災害が発生し、道路が寸断されていたため、現場に赴くにはかなり危険な状態でした。そこで、交通情報と文化財マップを見比べながら、どこが通れるかを判断しつつ、現地を巡回しました。また、丸森町の資料館で仏像が被災したという情報があり、仏像修復の松岡誠一さんに電話して対処法をうかがいながら、現場で処置をしました。さらに、丸森町の大内地区では宮城資料ネットのメンバーによる地域一帯の巡回調査を実施しました。

もうひとつの課題となったのが、被災ごみとして廃棄される被災資料です。今回、自治体の広報からごみ集積

被災状況調査(丸森町)



図2 丸森町の文化財マップと被災状況

場についても位置情報を登録して巡回しましたが、現場では積み重ねられ災害ごみの中から、襖の下張りとなされている古文書などがいくつも確認されました。また、10月22日涌谷町から被災資料レスキューの依頼があり、被災した資料をお預かりしてきましたが、所蔵者宅の周辺に行ってみると、附近の小さな川が原因であることが分かりました。今回の台風被害では、大規模河川ではなく、こうした中小河川の内水氾濫で資料に被害が出ているところが多かったといえます。

この文化財マップの活用における課題ですが、今回は河川氾濫の情報にもとづいて巡回しましたが、実はそれ以外にも被災した資料が多く存在していたと考えられます。例えばレーダー衛星による浸水図をみると、宮城県内では国土地理院の情報よりも、さらに広範囲の地域で浸水被害がおこっていたことがわかります。河川氾濫の情報のみならず、様々な被害情報を重ね合わせていくことで、文化財マップをもっと有効に活用できたのではないかと反省している所です。

今回の台風被害で被災した資料は、現在、宮城資料ネットの事務局がある東北大学災害科学国際研究所で処置しております。宮城資料ネットでは、東日本大震災以降の様々な資料保全のノウハウを活用するとともに、東日

本大震災以来、被災資料処置のボランティア作業に参加されている皆様のご協力を得て、今回の被災資料についても処置を進めているところであります。

今回の対応では、資料レスキューの初動時に文化財マップを活用した巡回調査をおこないました。東日本大震災時は津波被害のあった沿岸部を中心に活動しましたが、台風被害は内陸にも広範囲にわたって被害が発生するので、今後の災害に備えて文化財マップの効果的な活用方法を確立できればと考えています。また、台風被害について関係各所から多くの情報提供をいただきましたが、被災者対応に追われている被災地の自治体の文化財担当者などとは連絡がつかないこともあり、改めて災害に備えた公的機関との連携も深めていく必要があると認識した次第です。

最後に、今回紹介した文化財マップをどう活用するかについて、神戸の周辺を事例に考えてみたいと思います。こちらが神戸市・西宮市周辺の国宝および国・県指定文化財マップになります。この情報に、兵庫県が出しているハザードマップを重ねて合わせてみると、神戸よりも西宮や尼崎のほうでかなり浸水被害が出るという危険性が読み取れます（図3）。浸水想定範囲内には有岡城跡などの国指定の史跡も多数含まれております。また、

神戸市・西宮市の文化財マップと 兵庫県CGハザードマップとの重ねあわせ

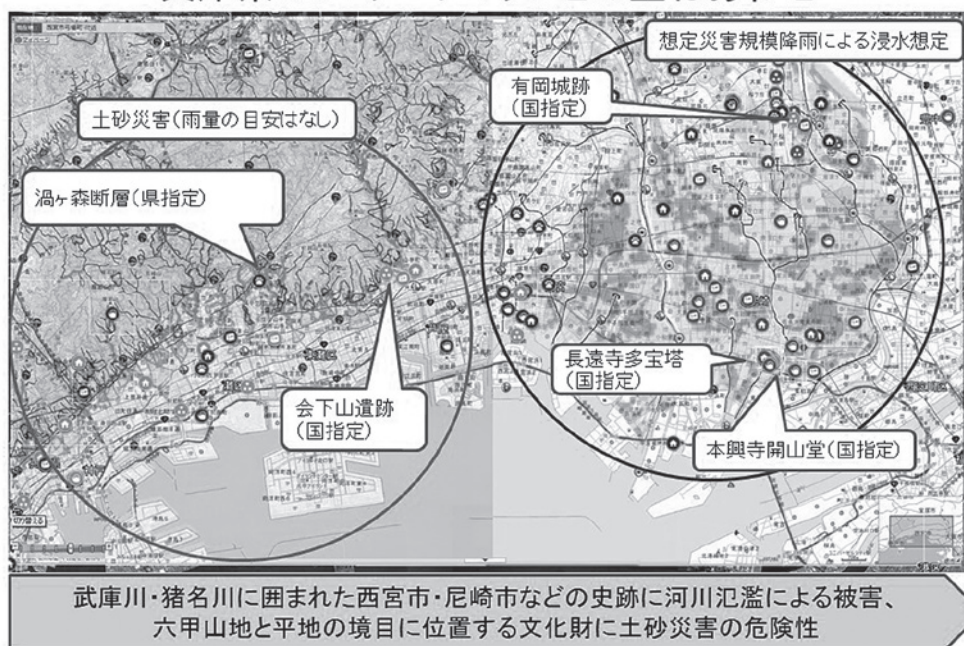


図3 神戸市・西宮市の文化財マップとハザードマップ

土砂災害については六甲山の山際に危険性の高い所があり、その範囲には伯母野山の遺跡や、渦が森の断層といった国が指定する文化財が含まれています。それぞれの文化財にどのような災害リスクが迫っているかということが、文化財マップを活用することでみえてきます。

今後の課題ですが、現在作成している文化財マップは、グーグルの機能に依拠していますが、個人情報の保護や、文化財や歴史資料の所在情報を不特定多数に公開してしまうことでの盗難や破壊の危険性など、いくつかの課題が残されています。これについて、現在「e コミマップ」をプラットフォームとした文化財マップの試作版を作っ

ているところです。これはアカウントで閲覧者を管理できますので、文化財の位置情報や個人情報の漏洩を抑止することができるかと思えます。

文化財マップの可能性は、災害前に文化財の所在マップを作り、ハザードマップなどと重ね合わせることで、どの文化財にどのような危険が迫っているかということ把握できること、また災害発生時には、文化財の所在マップに各種被災情報を重ね合わせることで、文化財や歴史資料への被害状況を一定程度把握し、それに対応した効果的なレスキュー活動のロジスティクスを立案することが可能になるところにあります。

2019 年台風 19 号と福島県での資料保全活動



ふくしま歴史資料保存ネットワーク

阿部 浩一

2019 年の台風 19 号では、福島県内でも阿武隈川とその支流域を中心に広域的な被災がありました。文化財等に関して言えば、未指定を含めるとその全容はまだ把握できていないものと思われます。今日は、特に被害が最も大きかったとみられる本宮市立歴史民俗資料館でのレスキュー活動を中心に報告いたします。

本宮市では、10 月 13 日の深夜 1 時頃に河川氾濫による避難勧告が旧本宮町域全体に出されております。13 日朝には町の中心部がほぼ浸水するような状況でありました。

県内の被害状況については、福島大学の同僚である小松賢司さんが早くから車で回って視察と把握につとめておりました。13 日には、まだ近づけるような状況ではなく、水が引いて 14 日に資料館に着くことができたそうです。この時にはまだ文化財レスキューを受け入れる状況ではなかったのですが、本宮市役所に勤めている私のゼミ OB が、災害対応の傍ら資料館に足を運んで資料ネットへの応援要請を熱心に働きかけてくれたそうで、私が 16 日に初めて本宮を訪れた時には、レスキュー支

援を受け入れるための話し合いがスムーズに進んでいき、翌 17 日から作業に着手することができました。

資料館は本館、分館、それからプレハブ 2 棟から構成されています。展示室は 1.3 m くらいまで浸水しており、訪問した際には展示ケース内の古文書や土器などがみな泥まみれになっておりました。本館には事務室横に格納室があり、そこでも古文書が被災しておりました。分館では民具類、プレハブ 2 棟は考古遺物、土器類、それから写真、図面等が被災していました。もっとも、2 階以上の部分は浸水しませんでしたので、2 階にありました古文書類の大半は被害を免れました。今回はまず、本館の格納室に保管されていた古文書類から搬出いたしました。資料館のすぐ近くに公民館があり、その一室をお借りして、被災した資料を並べていきました。

ここで少し話は変わりますが、10 月 17 日から 18 日にかけて、会津の北塩原村で、文化財保護指導者研修会が開催されておりました。その席上、本宮市の文化財調査委員が支援を要請し、福島県文化財センター白河館(まほろん)の菊池徹夫館長が閉会の挨拶の中で、県文化財課に早急に対応を求める異例の要望を出したということを知っております。その結果、17 日付で県文化財課課長名にて、市町村に対し被災文化財の救援要請についての照会が出されました。その後、市町村からの要請に応じて県から関係機関に応援要請の依頼があり、学芸員などが公務で救援活動にあたることのできる体制が整いました。その背景には、福島県が作成している文化財保存活用大綱の目玉と位置付けている 59 市町村との「福島県内における文化財に関わる災害時等の相互応援に関する協定」がありまして、その先行事例としたいという思惑もあったようです。



図 1 本館格納庫の被災状況

本題に戻りますと、今回の初動については比較的早く出来たのではないかと考えております。本宮市からの要請にもとづき、先程の県からの呼びかけで関係機関が公務でレスキューに入ったのが10月23日でした。それ以前の22日までは福島県立博物館、福島県立美術館、まほろん、それから福島大学の有志がボランティアとして支援しました。福島県の場合、原子力災害の被災地での資料保全活動が今なお続いている関係で、福島県被災文化財等救援本部が存続しておりました。そうした日常的なつながりを保ちつつ、現場感覚を失わずにいたことが、速やかな対応を実現できた最大の要因ではなかったかと思えます。保存科学を専門とするまほろんの中尾真梨子さんの指導により、歴史・美術・民俗等それぞれの専門性と経験を活かし、適切な処置や助言が行われ、随時メールにて情報共有が図られました。

ちなみに福島大学は、本宮付近で橋梁の盛土が流出し、東北本線が一部不通となったことで、18日まで全学休校という処置がとられました。そのため、土日を含め1週間程度、学生たちとボランティアで応援に行くことが可能となりました。

初動がうまくいったもう一つの要因として、支援を受け入れる本宮市関係者との連携がありました。一時保管場所もすぐに手狭になってしまい、そのことを相談したところ、すぐに話をつけて、公民館の隣にあるホールを確保していただき、ここで作業が出来ることになりました。また、作業に必要な資材の確保や、史料ネットで購入した冷凍庫の設置などの対応をしていただきました。

資材に関しては、震災以来のストックがありました。



図2 ホールでの保全作業

そして何より、日々熱心に活動する地元のボランティアの皆さんには大変頭の下がる思いでいます。

県文化財課の応援要請による救援活動は、現在のところ4回行われております。学芸員たちの公務での参加を可能にしたばかりでなく、関係者の当事者意識や協力関係を深め、現場で実践経験を積む機会となったのではないかと考えております。今後の福島県における資料レスキュー活動にどう結実していくのか、注視していきたいと考えております。

レスキュー活動は現在もおこなってありますが、課題も多くありました。最も悔やまれるのは、民間所在の資料の廃棄を止められなかったということです。私が初めて本宮市を訪問した16日は、台風後久しぶりの晴天ということもあり、どのお宅も物凄い勢いで災害ゴミの処分を進めていました。あとになってみると、何かしらできなかったかなという後悔があります。

福島県立博物館学芸員の高橋充さんが『本宮町史』を基に資料所在リストを作成してくれました。このリストを基にして、10月31日に住宅地図と突き合わせて所蔵者のもとに聞き取り調査に行きました。該当するお宅は12軒あり、そのうち所在確認ができたのは1軒でした。こちらは少し水濡れしている程度でありました。それからもう捨ててしまったと言われたのが2軒。所持していないと言われてしまったのが2軒。わからない、確認できなかったのが3軒。それからもうお住まいでないお宅が4軒。そのうち1軒は今回の災害以前から更地になっているような状況でした。

古文書以外にも、遺跡を撮影した大量の写真類がありましたが、これらは担当者から既に報告書に載せてあるから無理をしなくていいと言われたこともあり、作業自

| 日程 | 実施場所 | 参加人数 (延べ) | 1日あたり 平均 |
|--------------|----------------------------|--------------|-------------|
| 10/23 ~25 | 本宮市歴史民俗資料館 | 30名 | 10名 |
| 10/28 ~30 | 田村市歴史民俗資料館 隣接施設 | 39名 | 13名 |
| 11/6 ~8 | 伊達市梁川総合支所 (旧梁川町史編さん室資料) | 36名 | 12名 |
| 11/20 ~22 | 伊達市梁川総合支所 (旧梁川町史編さん室資料) | 27名 | 9名 |

情報提供：福島県教育委員会文化財課

図3 台風19号にともなう被災文化財等への救援応援活動の実績

体が後回しになってしまいました。後日、宮城資料ネットの紹介でNPOに来ていただいて写真保全の技術指導を受け、関係者が作業を続けております。ただ、時間も人数にも限りがあるので、なかなか進まない状況であります。その他の考古遺物であるとか、民具類の保全など、それぞれ課題は多くあります。

大学が平常に戻るにつれて、授業や学内業務が重なり、思うように支援に行く時間がとれなくなりました。博物館と違って大学の場合、公務としてレスキューに出かけられませんので、歯がゆい思いをすることもありました。

今回の発表では時間の関係で割愛しましたが、伊達市梁川町でも同様の被災と救援活動が続いており、こちらについても初動段階から支援を続けております。複数の現場を受け持つ難しさを感じております。

考えてみると、福島県内でこれだけ多くの水損資料、特に紙類のレスキューが行われたのは、東日本大震災でもなかった初めての経験でありました。広域的な被災によって外からの支援を受けにくい中、県内関係者だけで何とかやってきましたが、東日本大震災、福島第一原発事故の経験と教訓に裏付けられた関係者の使命感と果敢な行動力があってからではないかと思っております。県主導の救援応援活動自体は評価されるものべきですが、その内実は多くの課題を抱えております。目下、文化財保存活用大綱の策定が進んでおり、パブリックコメントも募集されていますけれども、この丸9年の成果と課題を次にどうつなげていくか。福島は今、大事な局面を迎えているといえるでしょう。

茨城県北部地域における 2019年台風19号被災史料レスキュー活動

茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク

佐藤 和明



私は群馬県みなかみ町の出身で、茨城大学大学院人文社会科学研究科で日本近世史を専攻しております。今年の春からは高等学校の教員として勤務することが決まっております。私は学部2年から茨城史料ネットの活動に参加しており、3年の時に関東・東北豪雨水害を経験いたしました。そこで水損資料の洗浄や修復等に従事し、現在でも被災資料の修復活動を行っております。本日は、茨城史料ネットの事務局員として報告をさせていただきます。

まず、茨城史料ネットとはどういう団体なのかについて説明いたします。正式名称は「茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」でして、東日本大震災時に被災をいたしました未指定で民間所在の文化財や歴史資料を救済・保全するために2011年7月2日に誕生いたしました。事務局員は、主に茨城大学と筑波大学の教員、

それから私のような茨城大学の大学院生で構成され、現在2020年1月時点で会員数は468名となっております。この写真は、昨年の12月に定例で実施しております資料整理活動が250回を迎えた記念の風景です。

2019年10月に発生した台風19号では、10月12日に茨城県を含む1都12県に大雨特別警報が発令されました。茨城県内では、那珂川・久慈川水系で10か所の決壊が確認され、死者2名、行方不明者1名、146棟の全壊被害が確認されております。

今回茨城史料ネットが現地で活動したのは、こちらの地図にあるとおりです。本日はこのうち、①の水戸市と②の常陸太田市での活動について報告したいと思います（資料1）。

水戸市の被災地域ですが、茨城大学から車で10分程度の場所でも被害が出ておりました。私たちがレスキュー活動を行ったのは、その内の上国井町というところですが、10月18日の金曜日、この写真のように教員と学生とで2人1組のペアを作り、水戸市での巡回調査を実施しました。18日で10軒の巡回をおこないまして、そのうち3軒で資料の被災が確認されました。私たちがレスキューできたのは2軒で、もう1軒は既に廃棄されたことが確認されました。また、上国井町でお堂が被災し、仏具などが水濡れ被害にあっておりました。これに対しては、その場で応急処置を行いました。

水戸市での巡回から、いくつかの課題が見えてきました。まず、巡回を行うにあたり、水戸市史編さん当時の資料所在目録がないことです。資料の所在を把握するために、片っ端から確認するしか方法がなく、聞き込みを行うなかで、東日本大震災後に廃棄してしまったという情報が多数確認されたことも大きな課題です。また、被



資料1 東京新聞ウェブ2019年10月16日「台風19号 久慈、那珂川12カ所で堤防決壊」より

災直後のタイミングで訪問したため、資料のレスキューどころではなく、ライフラインの復旧に向けたお手伝いをするほかなかったところも多々ありました。

次に、常陸太田市での巡回について報告します。常陸太田市では久慈川が決壊しており、私たちはその周辺地域にあたる松栄町を対象に、10月30日と11月1日の2日間巡回活動を行いました。ここでも水戸市での活動と同様に2人1組のペアを作って巡回し、合計34軒の巡回と3軒のレスキューを実施しました。

ここで一つ事例を紹介したいと思います。松栄町で農家を営んでおりましたS家での資料レスキューですが、このお宅は久慈川の決壊により2mを超える浸水被害を受けました。その結果、日記や写真など250点余りの資料が被災し、そのなかには現在のご当主の伯父が特攻隊員だったのですが、その方の遺書なども含まれていました。この写真は、私たちが訪問した直後の状況です。ご当主がどうにか乾燥させようと網戸の上に資料をのせて乾かしている様子です。私たちは、これらの資料を大学に持ち帰らず、お宅の庭先をお借りして吸水・乾燥作業を実施しました。大きなものは、このようにブルーシートの上に広げ、水に濡れた本は文字の書いてあるところを中心に1点1点キッチンペーパーをはさみ吸水し、日蔭で干して乾燥作業を行いました。4日間作業を行い、教員や学生ボランティア、資料ネットOBなど20名が参加しました（資料2）。

松栄町でのレスキューでは、日記などの乾燥処理をおこなったことで貴重な戦争関係資料や学校史に関する地域資料の消失を防ぐことができました。ご当主からは、「大切に守ってきて、将来孫が大きくなった時にこの資



資料2 常陸太田市松栄町S家でのレスキュー活動の様子

料の話をしたい」とおっしゃっておられ、そうした資料を守ることができたのは、今回の成果として挙げられるのかと考えております。

関東・東北豪雨と今回の活動を通して、私が考えていたことが2点あります。ひとつは、巡回体制として、事務局の教員を中心とした巡回体制が確立し、被災地をまわることができたこと、その過程で、必要な物資の準備や資料の処置に関する備えなどは、これまでの経験を活かした成果であると思います。

また、茨城史料ネットとして、今回は新しい動きがありました。それが自治体と協力した体制づくりです。まず、10月16日に水戸市立博物館と共同声明をだしました（資料3）。こちらの資料になりますが、こうした手続きにより、資料ネットが行政と連携した活動が可能になりました。また、水戸市立博物館だけでなく、常陸太田市教育委員会と共同で巡回調査の実施や、茨城県立歴史館との水損資料救済に関わる共同作業など、自治体や関係機関との協力した活動ができたことは、今回の大きな成果でした。さらに、茨城県立歴史館や常陸大宮市文書館、隣県の栃木県那須歴史探訪館などで被災資料の相談対応、受け入れの表明が行われましたが、こうした表明に際して、茨城史料ネットの活動を経験した人たち

被災した歴史資料(古文書・古写真等)についてお困りの方へ

令和元年 10月16日
水戸市立博物館

水戸市立博物館と茨城史料ネットでは、台風19号により被災した歴史資料の相談を受け付けています。

今回のような災害では、大切な家産や財産とともに、昔から伝わる古い書類や手紙、写真、書画、骨董品なども傷んでしまうことが多くあります。また、蔵や倉庫などを片付けているなかで、これまで気付かなかった古い物が見つかることもあります。こうした資料は、地域の歴史を記録した、かけがえのない文化財です。水や泥に浸かってしまった場合でも、適切な処置を行うことで、修復が可能な場合があります。被災した歴史資料をどうしたらいいのか分からないとき、お困りのときは、水戸市立博物館または茨城史料ネットまでご相談ください。

こんな時は、ご相談ください

- ◆ 和紙にくずし字で書いた文書、和紙に書かれている冊子、古い絵図・日記・手紙・はがき・写真などが、水や泥まみれになってしまった。
- ◆ ご先祖から伝わった古い道具(骨董品や民具)や古美術品などが、今回の災害でこわれてしまった。
- ◆ 自宅を片付けていたら、なにか古いもの(古文書、古美術品・古い書類など)が出てきたが、どう取り扱ってよいか分からない。
- ◆ 古い書類や骨董品の今後の保管について心配がある。

【ご相談先】
水戸市立博物館 〒310-0062 茨城県水戸市大町3-3-20 担当 関口・藤井
電話 029-226-6521 / FAX 029-226-6549 / メール museum@city.mito.lg.jp

茨城史料ネット事務局 〒310-8512 茨城県水戸市文京2-1-1
茨城大学人文社会科学部添田仁研究室
電話 029-228-8118 / メール hitoshi.soeda.carp@vc.ibaraki.ac.jp

資料3 水戸市立博物館との共同声明文

が先頭に立って進めていたことは、茨城史料ネット関係者によって広がる支援の輪というものが感じられました。

ただ、活動のなかで課題もいくつかありました。大きな点では先ほど言ったとおり、資料の所在把握に関する手段がないということですが、世代交代という問題も指摘できると思います。今回、私のようにたまたま関東・

東北豪雨の経験者が事務局員として在籍していましたが、それも来年度は卒業してしまいます。そのため、茨城史料ネット内で災害対応マニュアルの作成など、経験を引き継ぐ必要性が出てきているのかと、今回の水害を通して感じております。

第1セッション 質疑応答

天野真志



4名のご報告をうかがっております。1995年の阪神・淡路大震災から始まった資料ネットの活動が全国に派生するなかで、その活動が非常に多様なものとして展開していることをあらためて感じました。

ここでの多様化とは大きく分けて2つあると思います。一つは組織面での多様性です。原田さんのご報告にもありましたが、一つの地域が被災した際に全国各地から支援が呼びかけられ、被災地に対する多方面での支援活動へと広がっていくことは近年の大きな特徴かと思えます。そこでは、属人的な関係から組織的なものにいたる多様な連携が見られます。組織や分野を横断した多様な連携が迅速に展開する状況は、本日4名のお話にあったような活動とも大きく関わっているものと感じております。

もう一つは、救出対象の多様化という点です。もともと資料ネットは、歴史研究者が中心となって広がった活動でありますので、どうしても救出の対象は古文書が中心となってきたかと思えます。ただ、本日のお話を聞いていると、仏像や掛け軸など、多様な媒体の資料が積極的に救出されるようになってきております。もちろん、そこには博物館の存在が大きな役割を果たしているものと思えますが、歴史研究に限定されない幅広い連携体として、資料ネットの意義が求められているのかなと考えました。

ここからは、私の方からお一方ずつに質問をさせていただき、その上でフロアの皆さまとも議論を進めていきたいと思えます。まずは原田さんのご報告ですが、お話を伺っておりますと、信州資料ネットの発足について、かなり迅速に組織化されたような印象を受けましたが、信州資料ネットが立ち上がった背景につい

て、少し詳しく教えていただけますでしょうか。

原田和彦



ここ10年で長野県は3度の自然災害を経験しています。2011年の栄村、2014年の白馬村、そして今回です。2度の地震対応については、長野県内での活動は局所的な活動になってしまって、全体的なつながりというのが必ずしもありませんでした。今回は長野市内が被災したということもあり、信州大学の山本さんに声を掛けていただいて、じゃあみんなでネットワークをつくってやってみようという形になっていったということでございます。10年間で3回目の災害ということもあり、災害に伴う文化財のレスキュー自体は県内各地で行われてきたことではあります。今回こういった形で信州大学中心に活動できたのは非常に大きなことです。今後、対応は早くできるのではないかと思います。

山本英二



信州大学の山本です。長野県の場合、資料ネット活動の中では実は大学の存在感は希薄です。長野県は、県内に博物館が非常に多く、さらに市町村レベルのアーカイブズが多数できております。また、長野市の場合はボランティアの皆さんが中心的に関わってくださっています。長野県の場合、地域の中に非常に關心のある方が公共機関を含めて沢山いるものですから、大学としては、それらを

結んでいけるような役割を期待されているのかと考えており、それが長野県の特徴かと思っております。

天野：ありがとうございました。続きまして蝦名さんに移りますが、今回宮城資料ネットの活動として特徴的だったのは文化財マップであったかと思えます。本日も文化財マップを活用した災害対策の実践と可能性についてお話をいただきましたが、この取り組みについて今後の見通しをお聞かせいただけますでしょうか。例えば、このマップを展開させる方向性についてです。お話を伺っておりますと、宮城資料ネットが集積した所在リストを活用した県内情報の精緻化と、全国の情報に踏まえた全国展開の二通りの展望があるように思いましたが、充実の見通しとして、まずは宮城県もしくは東北地域など、蝦名さんや宮城資料ネットが中心となって活動する範囲で情報の精緻化、技術の深化を進めるのか、もしくは精度よりもむしろ広域データをひとまず作ることを目指し、既存の情報に基づいて全国規模でのマッピングデータを完成させていくのか、という点について、お考えをお聞かせいただければと思います。あわせてもう1点、こうしたデータを防災の観点からどのように活用していく可能性があるのか、その見通しについてもお聞かせください。

蝦名裕一



文化財マップに関しては、今天野さんがおっしゃったふたつの方向性について、どちらの見通しももっております。文化財マップそのものの作り方としては実は非常に簡単で、エクセルに位置情報を入力し、グーグルマップに放り込めばすぐにマップができます。この手法を是非全国の皆さんに共有いただいて、各地の資料ネットで地元の文化財や民間所在

資料のマップを作っていくという形で展開していけばと思っております。それから情報の精度について、東日本大震災の時と比較して、現在は多様な災害情報が発信されるようになりました。ただし、東日本大震災であるとか、最近では北海道胆振のように、被災地で電源喪失が起こったり、あるいはあまりにも甚大な被害で地元の関係者が身動きがとれないといったケースもあります。そうした時に、被災地外から情報を整理し、被災地の皆さんの生活の立て直しが出来た段階ですぐに資料レスキューが展開できるような情報を用意することも可能です。これも、全国の皆さんと文化財マップの作成方法や活用方法について情報を共有していくことで、効果がでてくると思います。

それから、災害対策から防災対策へという話はまさにその通りで、今日、ハザードマップというのは全国で数多く作成されています。ここに文化財や歴史資料の位置情報と、付随する情報を追加していきます。例えば文化財の中にも美術品などの動産であったり、あるいは建物や史跡といった不動産であったりとか、様々な種類があります。こうした種類に対応して、古文書を中心とする資料ネットのみならず、建築の関係者、美術の関係者など、異なる研究領域の方々と、文化財マップを媒体とすることで繋がりながら、これからの文化財などの防災を考えていけたらと思います。今後、多くの作業が必要になるかと思っておりますので、是非このやり方を皆さんと一緒に共有しながら実践できたらと思います。

天野: ありがとうございます。続きまして阿部さんにお話を伺いたいと思います。東日本大震災以降の様々な蓄積に基づいて、今回も迅速な対応が進んでいるのではと思います。特にお話を伺っていると、今回の本宮での取り組みも含めて、行政との関わりという点が特徴的であったかと思っております。こうした資料ネットと行政との関係というのは、日常的なコミュニケーションの中で進んでいるのではないかとも思いますが、これは持続的に進めていく時の見通しであるとか、展望とかもしございましたらお話いただければと思います。

阿部浩一



本宮に関して言えば、正直申し上げますと、知り合いの担当者がおりませんでした。そのため、最初に小松さんが入った時には、まだ支援の受け入れが難しいと言われてしまいましたが、たまたま役所にうちの卒業生がおりまして、資料ネットにはこういう先生がいて支援してくれると盛んにプッシュしてくれたおかげで、受け入れていただきました。そういう形で信頼関係ができると、その後はいろいろと対応してくれました。本宮市は自治体としてはそんなに大きくありませんから、逆に役場内の人間関係が緊密であり、たとえば段ボールのような資材が大量に必要なと、ここにあるから持って行っていいよとか、そういう形でうまく連携が出来たなと思っております。

もう一つの伊達市に関しては、こちらは普段から文化財担当者で面識があって一緒に活動していますので、比較的入りやすいところがありました。今回、新たに県が59市町村と連携して進めていくことになりました。今後、こうした連携が本当の意味で機能していくことが大事なことかと思っております。今なお史料ネットはそれほど認知度が高くないので、例えば県の呼びかけに応じて現地入りする形ができてきますと、私達も入りやすいところもありますので、そのあたりの手順も含めて考えていきたいと思っております。

天野: ありがとうございます。最後に茨城史料ネットの佐藤さんに伺います。設立以来、茨城史料ネットは学生が中心となった活動というのが特徴的ですね。本日、その活動を継続させていく上でいろんな課題を挙げていただきました。それらは、学生主体であるがゆえの課題というものもあるように思いますが、一方で活動を推進していったOB・OGたちが県内各地に就職して各地に茨城史料ネットとの関係が密になり、やがて組織的な連

携へと発展するような状況が広がっていくのかなと思っておりました。一方で、茨城史料ネット自身の問題として、佐藤さんが世代交代の課題を挙げられていました。その点について、佐藤さんを始め、現在事務局を支えられておられる方々のなかで、どのようなかたちで活動を引き継いでいこうとお考えですか。もしなにか思うところがあれば、お聞かせいただけますでしょうか。

佐藤和明



私を含め、現在茨城史料ネットに関わっている修士課程2年は5人おりまして、この3月で修了する予定です。次の世代は2015年の水損資料への対応に従事したことの無い世代になってしまいます。先程の報告でも触れたのですが、今後同様の事態が発生した場合の備えや対応に向けた具体的な方法については、私達が卒業するまでにまとめて残していかなければいけないと考えてはおります。ただ、具体的に動きとしてできてはならず、どのような形で残していくべきか、考えている段階です。

天野: ありがとうございます。4名のご報告は昨年の台風被害を受けた具体的な実践でして、これまでの経験の蓄積や諸方との連携を踏まえ、各地域を主体とした独自の取り組みが展開していることを教えていただきました。今回の台風被害に限らず、こここのところ毎年のように自然災害が発生していますが、今後の発生に備え、新しい資料ネットを作ろうという動きも各地で起こっているように思います。例えば、2019年12月には、東海地域でそうした動きが形になるようにしています。よろしければ、篠宮さんにその辺りの現状をご紹介いただければと思います。

篠宮雄二



今ご紹介にあずかりました篠宮雄二と申します。昨年12月22日に名古屋大学でシンポジウムを開催し、東海地域を対象とした資料ネットの設立に向けて議論し、2月16日に設立総会を開催して東海資料ネットという形で始動することとなっております。現在は大学関係者を中心に動いており、愛知県ですと名古屋大学、愛知県立大学、中部大学、愛知大学などの教員に参加していただき、三重や岐阜、静岡の大学関係者などとも一緒にやっいてこうと調整を進めております。12月のフォーラムの際、久留島浩さんから千葉県史のご経験を踏まえ、愛知県史への要望として強いアピールをいただいたことが良かったと思いますが、愛知県史で調査した資料所在状況の利用に向けて動けそうな感じで、この点についても県と連絡をとりあっているところです。このような形で進めていきたいと思っておりますので、是非皆さんにもご支援いただければと思っております。

天野：ありがとうございます。各地で災害対策だけでなく、地域の資料をどうやって守っていくかを議論し、保存・継承に向けた取り組みが広がってきているのかと思います。

その他、いかがでしょうか。例えば神奈川の取り組みなどについては、多和田さんか宇野さん、いかがでしょうか。

宇野淳子



神奈川資料ネットの宇野と申します。神奈川資料ネットは、これまで国立文化財機構立ち合いのもと、神奈川県博物館

協会と神奈川県教育委員会、私共の3者で、国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進事業（関東甲信越）「地域の文化財防災体制の確立に向けた協議会」の県内会合という形で議論をしてまいりました。その中で館蔵資料は県博協、指定文化財は県教委、民間所在資料は資料ネットというように初動を担う対象をおおまかに分け、各々の活動の情報共有を行うことで、ゆるやかにそれぞれが守るべきものを把握していくことになりました。例えば川崎市市民ミュージアムなどは県博協の流れで作業を行い、民間所在資料に関しては資料ネットが行う。その情報は守秘義務に配慮しながらお互いに共有するという形をとりました。2階に掲示したポスターにも書いておりますが、台風15号の前の9月3日に横浜市内で大雨があり、被災状況の確認調査を行いました。台風15号による高波で2mぐらいの浸水があり、企業資料が被災したことに関しては資料ネットで水損行政文書のレスキューと同じ手法で、初期乾燥作業を行いました。

天野：ありがとうございます。その他何かご質問や話題提供などございますか。例えばまた関東の話になりますが、関東でも資料ネットのない地域で災害が発生し、その対応が進んできたりしています。特に神戸の史料ネットのでもそうした活動について支援しているかと思いますがいかがですか。

小野塚航一



神戸史料ネットの小野塚と申します。10月に栃木県佐野市大橋町にお住まいの方から、所蔵資料が佐野市を流れる秋山川の氾濫によって水損してしまったと問い合わせがありました。水損したのは、所蔵者の方がおよそ70年にわたり骨董市などで収集した膨大な量の戦争関係資料です。栃木県には資料ネットのような組織はないのですが、幸いなことに、宇

都宮大学の高山慶子さんを始め県内の関係者の方々に資料レスキューにご協力いただきました。現在、水損資料は宇都宮大学に保管しており、神戸史料ネットは引き続き整理作業などを支援していく予定です。

天野：ありがとうございました。本日まで参加の方はもちろん、その他の皆さまの中でも災害対策が進められているかと思いますが、今後こうした災害に対してどのような備えをしていくか、地域内の連携をどうやって作っていくかということが、今後の議論として深まっていくのかと思います。今日お話いただくことができないかもしれませんが、千葉のほうでも千葉資料ネットが今回の台風被害への対策を進めております。また、国立文化財機構の文化遺産防災ネットワークでも全国的な防災対策への対応が進んでおります。このあたりについては、またポスターのほうでご紹介いただけるのではないかなと思っております。

4名のご報告をいただきましたが、恐らくこれからこうした活動、災害対策というものが本格的に進んでいくのではないかと思います。東日本大震災の時もそうですし、阪神・淡路大震災の時もそうだったのでと思いますが、救済したものをこれからどうやって地域に戻していくかということが、中・長期的な活動として大きな課題でもあるし、重要な問題にもなると思います。もちろん地域を軸にした取り組みが深化していくものと思いますが、それをその地域や資料ネットだけの問題としてではなく、それを軸としながらも幅広く協力・連携を通して展開させていくことは、社会的な意味もあると思いますし、技術的な連携や地域を超えた協業を通して新たな気づきも出てくるのかと思います。そうした意味でも、資料ネット活動の新たな展開が期待されるのかと思っております。



会場風景 1



会場風景 2

会場紹介

御影公会堂と神戸空襲、阪神・淡路大震災



火垂るの墓を歩く会

正岡 茂明



みなさん、こんにちは。ご紹介いただきました正岡と申します。遠いところから沢山神戸に来ていただき、ありがとうございます。15分間ですので、うまく言えるかどうか分かりませんが、どうぞお付き合いください。

司会の方が言われましたように、自分なりにまとめた資料をお配りしていますので、見ていただけたらと思います。

この建物は御影公会堂と言われています。資料に書いてありますように1933年に完成されました。その建設費用はこの地元の酒造家「白鶴酒造」の嘉納治兵衛さん（代々治兵衛を名乗っておられるので、正確には7代目治兵衛さん）が、当時20万円を寄付され、それを基に建てられたものです。この方は文化に大変造詣の深い方で、ご存知の方も居られると思いますが、JR住吉の北にある白鶴美術館も7代目治兵衛さんが始められたものです。

この御影公会堂の建物ですが、もし時間がありましたら、ぜひ石屋川の西側の土手から見ていただきたいと思えます。船の形をイメージしていると言われてはいるのですが、ちょっと船としては四角ばっているように見えますけれども、最近のニュースでよく出てくる大型クルーズ船を思い浮かべると、すごくそっくりだなあと思ったりもします。港神戸をイメージするというので清水栄二さんという方が設計されました。清水栄二さんは元々神戸市に勤務されていて、その後独立されました。魚崎小学校や旧魚崎町役場の庁舎も設計されました。そして建築は大林組が請け負いました。

それで自分自身が「火垂るの墓を歩く会」という活動に関わっているので、どうしても野坂昭如さんと比較し

てしまうのですが、ちょうど野坂さんが生まれた頃（野坂さんは1930年生まれ）は、先程お話させてもらいました嘉納さんが寄附をされてというような時と重なっています。ですからこの公会堂と野坂さんとほぼ同じ時代に生まれたということです。

そういう背景でこの建物が出来て、御影町というそんなに大きくはない町がこれだけの公会堂を持っているという事は大変素晴らしいことでした。しかし御影公会堂が出来て12年目に神戸大空襲がありました。1945年6月5日、神戸東部地区は焼夷弾による爆撃を受け、ちょうどこのステージの裏側くらいのところに焼夷弾が落ちて、この中は燃えてしまって、建物はすごく頑丈な建物だったので残りましたが、内部は焼けてしまいました。アニメ『火垂るの墓』で清太と節子が「周りが全部焼けてしまったのに公会堂だけ残ってる」と言うシーンが出てくるのが、6月5日のことです。でも残念ながら残ってはいましたが、建物の中はそうして燃えてしまって使えない状態になっておりました。

石屋川をはさんで、当時は西は神戸市灘区ですけれども、東はまだ神戸には入っていないそれぞれ独立した御影町であったり、魚崎町であったり、住吉村であったりという時代でした。ですから戦後の復興ということはそれぞれの自治体として単独ではできない、財政面で厳しい状態で、最終的には神戸市東灘区という形で神戸に入っていきます。その中でようやくこの御影公会堂も改修工事が行われるということになりました。改修が行われて、御影公会堂はこれだけの建物は当時他にあまりありませんでしたので、いろんな用途に使われました。演劇会であったり、上映会であったり、選挙に関しての演説会であったりなどなど、そんな中でもここは結婚式場

としてよく使われ、市民総合結婚式場ということで、リーズナブルな値段で使うことができる結婚式場として、当時人口も増加している時代でしたから結婚式も多かったので活用されました。

この御影公会堂は正面玄関を出たところが国道2号線ですので、その国道2号線を当時は路面電車が走っていて、阪神国道電車ですが、路面電車から花嫁さんがみんなに祝福されながら降りてくるのが見られるということで、それもブームの原因になりました。そしてちょうどその頃、野坂さんの『火垂るの墓』が『アメリカひじき』と共に直木賞を受賞します。そういう時代ですね。日本がどんどん復興していく時代でした。

その野坂さんの直木賞の受賞からちょうど20年後にアニメーションが作られました。高畑勲監督の作品です。封切は『となりのトトロ』との二本立てで、出た時はそんなにすぐ売れたということではなかったようです。その後、夏に民放TVが『火垂るの墓』を毎年のように放送しましたので、全国的にこの御影公会堂であったり、あるいは清太と節子が暮らした防空壕のあったというニテコ池であったりが全国的に有名になりました。

しかしこの公会堂も長く使われる中で次第に老朽化していき、保存するかどうかが話題になってきました。お配りした資料の阪神・淡路大震災の一つ下の行を読んでいただくとありがたいのですが、本当に皮肉なことに1995年元旦の神戸新聞に、“この御影公会堂を取り壊して、前の正門部分だけを残して、後ろに嘉納治五郎の記念館を作るという話が持ち上がっている”という記事が出ています。そして半月後、阪神・淡路大震災が起きました。取り壊そうかと言っていた御影公会堂が逆に避難所として、またこの西側の石屋川公園が元気村という名前で、沢山のテントが並んで炊き出しやいろいろサポートの拠点となり、全国的に有名となり、御影公会堂の名前も再び脚光を浴びることになりました。当然そういう中で、神戸市も震災で大変な財政状況になりまし

たし、取り壊して云々ということは、白紙に戻るといような状況になりました。

私は阪神・淡路大震災の時に、すぐ東側にある県立御影高校に勤めておりました、震災後石屋川の土手の上から見ると、西にあるJR六甲道駅まで見事なくらい更地が広がり、六甲道駅が石屋川の土手からよく見えるといような状況になっていました。神戸空襲の後、“この地域は更地が何年も続いた”ということを書かれておりましたが同じような状況だったのかなと思いました。ピタリ50年ですが、空襲と震災と、50年の間を隔てて同じような厳しい状況の中をこの建物は生き抜いてきたのだと思います。

そして資料の最後のところに書いてありますが、野坂さんは2015年に亡くなられ、高畑さんも3年後に亡くなられましたが、この建物は神戸市が先程いった計画を白紙に戻して、ここを完全に改装することとなりました。エレベーターを付けるとか、空調設備をもう一度やり直すとか、いろんなことを地元の人達の要望を入れて、例えば建物の壁面のタイルですが、スクラッチタイルという、ひっかいて傷をつけたようなタイルですが、戦前から残るスクラッチタイルを貼り付けていくといようなことも行っています。ですから先程言った船の形をしているので横から見ていただいたら、といところで、タイルの色が変わっている、違うところがあります。元の空襲に耐えたスクラッチタイルも残して復元されているのだと感じていただければと思います。そして最後に嘉納治五郎さんについてですが、NHKの大河ドラマ『いだてん』に取り上げられましたし、元々の計画であった嘉納治五郎の記念コーナーも地下に作られました。こちらも見ただけならと思います。治五郎さんは、この御影公会堂ゆかりの白鶴酒造の嘉納家とは遠縁にあたるのだそうです。

短い時間で、十分な話ができなかったかもしれませんが、ご清聴ありがとうございました。

第2セッション

座談会

史料ネットの25年と資料保全・地域史のあゆみ



登壇者

奥村 弘・大国 正美
(歴史資料ネットワーク)

2代目事務局長 松下 正和
(神戸大学)

3代目事務局長 板垣 貴志
(島根大学)

4代目事務局長 中野 賢治
(山梨県立博物館)

5代目事務局長 川内 淳史
(東北大学)

司会

6代目事務局長 吉原 大志

吉原大志：それでは第2セッションの座談会を行います。「史料ネットの25年と資料保全・地域史のあゆみ」というテーマを掲げました。



阪神・淡路大震災を機に始まった歴史資料ネットワークの25年にわたる活動は、地震だけでなく水害によって被災した資料の保全や、災害それ自体を記録する災害資料、震災資料などといった議論を生み出してきました。また、度重なる災害に際して、各地で立ち上がった資料ネット組織への支援を行う他、日常的には資料保全の担い手を広げるためのワークショップ等にも力を入れています。25年続いているので、阪神・淡路大震災当時の立ち上げ世代から、私に至るまで、事務局長は6代にわたります。それぞれが

時代とかかわる中でいろんな課題を抱えながら取り組みを進めてきました。そういった歴代の事務局長や、初期の活動を支えた方々の座談会を通して、歴史資料ネットワークの長く、多岐にわたる活動を振り返りながら、25年間に各地に広がった資料保全や地域史のあゆみについて皆さんと考えたいと思います。

それでは、阪神・淡路世代から現在に至るまでの事務局長や初期メンバーを紹介したいと思います。まず史料ネットの代表委員で神戸大学の奥村弘さんは95年2月の立ち上げの段階から現在に至るまで歴史資料ネットワークの活動を続けています。

次に大国正美さんは、1995年2月の立ち上げから現在まで史料ネットの運営委員として活動を続けています。震災当時から現在まで神戸新聞社に在籍しています。震災で被害を受けた神戸新聞社は、当時新聞を発行できな

い状況にありましたので震災の年の2月5日まで京都新聞社で新聞作りに携わりました。また、大国さんは東灘区にある神戸深江生活文化史料館という市民によって運営されている博物館の館長もボランティアで務めています。このほか、兵庫県内を広く対象とする神戸史学会という学会で『歴史と神戸』という郷土研究誌の編集を務めています。

阪神・淡路大震災世代には初代の事務局長として藤田明良さんがいますが、本日は欠席です。

続いて、2代目事務局長の松下正和さんです。阪神・淡路大震災の時、第1回目の資料レスキューは、神戸・三宮のミニコミ誌を発行していたところの事務局のレスキューでした。松下さんは、その時に院生として参加して以来、現在まで史料ネットの活動を続けています。現在は神戸大学に所属し、2002年から史料ネットの2代目事務局長、2009年からは史料ネットの副代表として史料ネットの活動を続けています。

3代目事務局長の板垣貴志さんは、2005年から2015年にかけての10年間、神戸の史料ネットで活動を続けました。現在は島根大学に在籍しています。2009年に事務局長を務めました。

4代目事務局長の中野賢治さんは、現在は山梨県立博物館で学芸員をされています。神戸史料ネットには2006年から2011年まで関わり、2010年の1月から2011年3月まで事務局長を務めました。

次に、川内淳史さんは5代目の事務局長です。現在は東北大学の災害科学国際研究所に在籍しています。2007年から歴史資料ネットワークの運営に関わり、ちょうど東日本大震災後、2011年4月頃から史料ネットの事務局長を務めました。その後、2016年から副代表になり、現在は宮城資料ネットの事務局に携わっておられます。

最後に、私が現在の事務局長を務めている吉原です。この皆さんがそれぞれどんな活動をこれまでやってきたのか。その時にどういう問題があったのか、ということやうかがいながら、史料ネットの25年の歩みを聞いてみたいと思います。

それでは、まず奥村弘さんにおうかがいします。奥村さん自身が阪神・淡路大震災の時に最も取り組んだこと

は何だったのか。立ち上げに関わっておられますので、災害対応が中心になると思いますが、組織の運営も含めて、教えていただきたいです。

奥村弘：奥村です。阪神・淡路大震災の時にできた当初の特色は、若い人達によって構成された組織という点だったかと思っています。代表を務めた私は当時35歳で、大国さんが最年長で



した。その他、藤田明良さんは同い年ですが当時まだ大学院生で、松下正和さんも大学院生でした。史料ネットが立ち上がった当初は、災害時における一連の前例がほとんどありませんでしたから、若い人達でお互いに考えながら進めていくことに重点をおいていました。日々何をしたらいいのかがわからないので、まずは出来ることで動いてみて、それから考えていくというスタイルで当初はやっていたと思います。当時、ボランティア元年とか言われていて、いろんな形の市民活動が出てきました。その中で、歴史文化に関わるものとして、あまり重く考えすぎず、できることを参加した全員で相談しながら手探りで進めていったのが当初の史料ネットでした。

吉原：それでは、立ち上げの段階から大国さんは奥村さんと一緒に活動していましたが、その具体的な活動の部分で、阪神・淡路大震災の時に取り組んだことについてお話しください。

大国正美：私は新聞記者という立場でこの活動に当時37歳で関わりました。最初に思ったのは、全史料協という、現在でも頑張っている団体がありますが、その中で議論をされていた



ということは、いわゆる民間に所在する資料というのを誰が保存するのか、誰が担い手になるのかという議論がありました。アーキビストというのは公文書をきちんとやるべきであって、民間にある資料にまで積極的に手を出すべきではないという議論がありました。

地域にある資料館についても、複合的な資料館はダメだ。いわゆる公文書に専門化、特化していくべきだとい

うような議論が随分ありました。

私はどちらかと言うと、それに対しては批判的な立場を当時とっていました。そんな議論をちょうどやっていた時は1994年全史料協が正式に組織替えになってからちょうど20年経った時です。そのシンポジウムでも同じような話をしたのですが、その翌年に阪神・淡路大震災が起きた、というような背景があります。ですから私はそういういわゆるアーキビストたちは民間に所在する資料については、なかなか手を出してくれないのではないかなという考えを持っていました。先ほど奥村さんから、大変若い層で動いたとありましたが、ということつまり逆に言いますと、本当のプロの大学の教授クラスの人たちは動いてくれないのではないかなというような、当時どちらかと言うと生意気な不信感をもっておりました。

要するに、それまでの長い自治体史編纂の仕組みというのができてしまっていて、資料を保全する人、調査する人という組織といいますか、行政のいろんな人達がいて、それを利用する、あるいはそれをちゃんと学術的に使っていく専門の先生がいる。ですから民間に所在する未指定の資料について、そういったものを調査したり、あるいは、しかもレスキューしたりするというようなことに積極的に動くということは非常に難しいのだろう。というような、これも今から思えば一面当たってますが、一面外れているんですけども、そんな気持ちでした。

だから私が動かなければいけないということが非常に使命感でもあった。ということがひとつです。

それから大学院生の方が多かったです。車がない。行政も車を用意してくれない。ましてやなかなか協力的なところも得られない。というようなことがありまして、たまたま私が車を持っていて、車がないとレスキューした資料を安置場所、保管場所に運ぶことすらできない。というような、当時非常に限界がありました。

そういうことで当初は、いろんな人からのレスキューを待っていたわけですけども、意外にレスキューして欲しいという声来ない。まだそういったものが非常に胡散臭い団体と思われていたのか、知名度が無かったのか、よく分かりませんが、被災者の方から家にこういうものがあるから調べてほしい、助けてほしいとい

う声がなかなかこない。そうであれば自分たちで出ていくしかないだろう。というようなことで巡回調査に回りました。自治体を決めて自治体ごとに、主には宝塚とか川西を中心に回りましたが、そういったところに巡回調査に回りました。明治半ばぐらいの地形図、河川地形図を使って、この周辺に旧村落があるということが分かっております。それから、それまでの自治体史で使った資料のデータをもとにですね、家を一軒一軒回って行くことに力を入れました。そういった中で発見されて、救出された資料というのは非常にたくさんあります。そういったものを今度はどこで保全するのかということですけれども、これも行政からなかなか最初の頃は協力してくれない。こういうような事態が続きました。ただ救出してしまえば、これはなかなか行政も持って帰れとまでは言いませんので、目の前に物を積み上げることで一緒にものを考えていくというようなことが、当初の活動の出発点だったと思います。ただ巡回するにあたっては、全く我々だけで動くということはやめました。必ず行政の協力を得る。名前だけ貸してほしいというような、最初から、「じゃあ、ものが出てきた時にどこに保管しましょうか」というようなところまで、話をすると進みません。最初はとりあえず、こういうことで巡回をするので、名前だけ貸してほしい。これをチラシに名前を刷らせてもらって、そして巡回する。こういった形の中で次第に、そういったものが理解をされてくる。そうして市民からの声が出てくるようになると、それが次第に行政の中にも重要だということが分かってくるというようなプロセスを取りました。最初は現場の職員の方は、現場の本当に末端の方、末端というのは失礼ですね、いつも現場にいる、出先の職員の方は理解を示してくれるんですが、なかなか上司が理解してくれない。そんな関係がずっと続きましたし、特に神戸市なんかは、被災地が本当にひどかったという状況もあって、非常に厳しい状態が続いていたのかなと思っています。

そういった中で、いくつかのところで資料を救出した。ちょっと具体例の報告をすると時間が足りなくなるので割愛します。

あとですね、いくつか出てきた資料を、出来るだけ地域の人に還元したいと思いました。西宮の門戸厄神とい

う大きなお寺があるんですけれども、そこで展示会を、翌年ですけれども、やりました。2週間ほどの間に1,300人の方に来ていただきました。お寺の庫裡を借りて、そこに救出した資料を並べるといって、非常にシンプルな展示でしたが、そこに1,300人の方に来ていただいた。その方たちのアンケートを読んでいると、地震というとても酷い目にあっただけでも、この地域にこんな豊かな歴史があって、そしてそういう資料が救われたということを実際に良かったと思う、というようなことを感想に書いてくれていました。改めて資料を救出するということの意味とそれを地域の人に知ってもらおうということの意味が、地域のアイデンティティを取り戻していくというような、そして横のつながりを強めていく。資料を前に、年配の方が自分の子供達に子供の頃のことを思い出して、あんなことがあった、こんなことがあった、この道はこうだったというようなことをお互い語り合った。自分たちの街を見直すというような、そして何がこれから必要なかというようなことも、そういった中で話し合っていく、というようなことをやってくれたことが非常に嬉しかったです。これがその後、お寺が自分のところに資料館を建てるというようなことに繋がっていくわけです。

吉原：第1セッションにおける台風19号の事例を聞いていると、東日本大震災の時のつながりが、今回の台風被害に対して活きたというような報告がいくつかありましたが、これに対して阪神・淡路大震災の時には、一からスタートということが大きかったと思います。大国さんの話を聞いていると、例えば行政とのつながりや、大学同士の横のつながりなどについて、最初からそれが基盤になって始まっているというよりも、具体的に活動を積み上げていく中で、つながりを深めていったと捉えられるように思いました。先ほどの西宮の門戸厄神の事例のような、市民向けの展示会や報告会は、現在も我々史料ネットは続けており、各地の資料ネットが今も取り組んでいることの原型が、この阪神・淡路大震災の立ち上げの時に、試行錯誤しながら組み立てられていったのではないかと、奥村さんや大国さんの話を聞きながら思っています。

奥村：若干、それ以前の関係なんかを少し話をしてお

かなければいけないんですけれども、私が代表委員だったということもあるんですけれども、それ以前には実は保存活動がなかったわけではなくて、重要な指定文化遺産を保存していくような活動はそれ以前からありました。特に関西では大阪の日根野の景観全体を保存していくような活動に、関西の学会はたくさん参加していました。私たちの世代からすこし上の世代の人たちが大学院生の頃に結構保存活動がありました。それは史料ネットに参加している方の動機になってくるかと思います。

もう一つは民事裁判に関する資料が裁判所から廃棄されるという問題が、この直前に大きな課題になっていまして、これも現在の国立公文書館のつくば分館に収められていますけれども、その民事裁判の資料を保存していくという活動がありました。民事裁判のようなさまざまな市井の事件なども、資料として残していくということで、これは近現代の公文書の関係者がかなり入っていました。尼崎の地域研究史料館に、最初に史料ネットの事務局が置かれたのは、そういう活動の延長線上にあったということがあります。そういう広がりがあったということも補足させていただきます。

吉原：阪神・淡路大震災以前からの個別の資料保存への対応の中で築かれた関係性は重要なポイントです。それが活動の基盤のひとつになっていたと思います。そういった阪神・淡路の時に松下さんは院生のボランティアとして参加されていましたが、当時の活動への関わり方や、その受けとめ方についてや、どういったことに取り組んでいったかということをお話してください。

松下正和：ご紹介いただいた松下です。第一回目のレスキューから参加していますが、私自身は古代史が専門だったのと、しかも古文書レスキューと聞いていたのに、実際には地域



のミニコミ誌や生活雑器という新しいものの搬出だったので、私も含めて現場では「何でうちらがせなあかんねん」という声も正直ありました。ただ、よくよく考えてみたら、そういう近年のミニコミ誌であっても、将来的には地域に残された貴重な記録や「古文書」になっていくという当然のことに、随分後になって気づいた次第で、

こうやって偉そうに壇上に並んでおりますが、お恥ずかしい限りです。

私は2002年から事務局長を務めました。史料ネットは2004年から水害対応を始めるようになったのですが、ちょうどこの2004年以前の活動と後の活動とでは、私の中ではかなり違った意味を持つということをお伝えできたらと思っています。

まず一つ目が2004年以前の活動です。実は阪神・淡路大震災直後は、資料レスキューに対してまだ理解を得られたのですが、時間が経過するにつれ、ましてや日常生活に移行していきますと、「まだそんなことしてんの?」「まだ被災地、被災者言うてるの?」という声がかんかん聞こえてきました。今では考えられないことですが、史料ネット活動をしていることで心ない言葉を、しかも同業者から(!)かけられる運営委員もいたわけです。神戸の震災復興の一助としてやっていたつもりだったのですが、周囲の「まだやっているの」という声に対してどう応えていくのか、この平時の時に史料ネット活動をやることの意義を見いだすことが課題となりました。

被災地からのレスキューがあるうちは史料ネットの存在意義はわかりやすいけれども、普段の時にはどうアピールしていくのかが問われたのです。そこで私たちは、市民の方に対して、実はここの会場でも行いましたけれども、地域史に関する市民講座の開催に取り組みました。レスキューした史料から新たな地域史像を描き被災地の皆さんにそのレスキュー成果を還元するという意味を込めて、市民講座自体は震災直後の1996年からやっていましたが、私が事務局入りしてからは、古代、中世、近世、近代と四つの時代の地域史をテーマに開催し、講座終了後には演者や聴衆、スタッフが集まって懇親を深め、地域史の解明や史料保全の意義について理解を求めていきました。

あとは、事務局内部のドメスティックな問題ですので、ここにいらっしゃる皆さんにこんな話をして何の得になるんだろうとも思うのですが、実は運営委員会の進め方自体も、私達事務局サイドでは変えたいなという思いがありました。といいますのも、神戸の史料ネットの運営委員は構成団体の各学会から派遣される科学運動の委員

なのですが、震災を知らない新しい世代がどんどん入ってくる。もちろん史料ネットの運営委員になってくださるだけあって、史料保存や震災への関心は高かったとは思いますが、せつかく運営委員会の場に出ても二年間ほとんど発言せず、市民講座の設営準備だけをやって終わったという方もいました。それではいけないだろうということで、震災当時を知らない方も含めて活躍の場を提供しようということで、事務局員の浅利文子さんの提案で、運営委員会の時には必ず学会の動向を報告してもらうことで発言の機会を確保し、特に神戸大学以外の他大学の方に積極的に関わっていただくことで、「神戸大の史料ネット」というイメージの払拭に努めました。

全国との関係でいえば、資料ネット活動が全国展開していったということが、災害が多いことの裏返しではあるのですが、私たちが活動を継続する上でとても励みになったということです。たとえば2000年鳥取県西部地震の際の山陰ネット、2001年芸予地震の際の山口・愛媛・広島ネット、2003年宮城県北部連続地震の際の宮城ネット、あるいは2004年新潟県中越地震の際の新潟ネットなど、各地でどんどん資料ネットができて、歴史資料保全活動が国内展開していくことで、私たちは各地の資料ネット支援をしながらも逆に勇気づけられることが多かったわけです。そういう意味で神戸の震災以後の日常時の活動をどう続けていくのかというのが大変でした。

もう一つは、水害対応を開始した2004年以降の取組です。2004年は一年に10個台風が上陸した年だったのですが、尾立和則先生から、「史料ネットは地震ばかり対応して、何で水害はせえへんの」ということを言われまして、「そらそやな」と。当たり前の話ですが、台風や洪水に伴う風水害も地震と同じ災害の一つだということで、2004年以降本格的に対応を始めました。これが史料ネットの活動にとって大きな画期になったと思います。

実は奥村先生と2000年の東海豪雨での水害の対応をしようとしたこともあって以前から課題とはなっていたのですが、2004年7月の新潟県・三条水害へのお見舞いや福井水害被災地への訪問、福井ネット設立支援を経

験して水害対応の必要性を実感し、対応の自信を深めました。10月の台風23号で兵庫県北部、京都府北部に大きな被害をもたらしました。皆さんもご存じのように、このあと新潟県中越地震やスマトラ島沖地震に伴う津波被害も発生し、2004年は大変な年でした。私たちはこの年から水害対応を展開していくということになりました。この経験が、あとでも話があると思いますが2009年台風9号による兵庫県佐用町大水害や、東日本大震災の津波被害対応にもつながっていったと思います。ということで、私たちの時代では平時の史料ネット活動の存在意義を考え、地震に加え水害対応も新たに始めたということが頑張った点です。

吉原：1995年に始まった活動は、松下さんが事務局長になるくらいの時期には順調に発展してきたわけではなく、関西の中では「まだやっているの」というような声が意外と大きかったという話がありました。25年間の活動を通じて、日本社会の中で資料ネット活動は間違いなく広がっていますので、順調に発展したように見えますが、実はそういう意識が2004年前後にはあったということは重要なポイントだと思います。そういった中で、画期として2004年の台風23号水害のことで、松下さんからいくつか写真を準備していただきました。

松下：これは兵庫県豊岡市日高町T家の古文書です(図1)。味噌蔵で保管していたために蔵の土壁が内水氾濫した際の生活排水や山からの鉄砲水と混ざって、私たちがレスキューに入った際には土の中から「出土」するような形で出てきました。ご当主に「何でこんなところに置いてあったんですか」と聞いたら、その方の先々代が



図1 味噌蔵内で水損した日高町T家の古文書

襖の下張り用に置いていたものだったようで、大事なものは家の中にあり無事だったようです。味噌蔵内の汚損文書は既にかかなりの臭気が発生していました。失敗したのはこれを現場で洗ってしまったことです。

吉原：洗った写真がこれです(図2)。こういう形ですね。

松下：現場で洗浄した後にキッチンペーパーに包んで持って帰ってしまったんです。これが後々史料と癒着してしまいなかなか剥がれなくて大変でした。私自身は現場で史料を拾って帰ってくるという役割だったのですが、大変だったのは被災史料の受入先となった神戸大学の文学部です。当時日高町T家と出石町日野辺区有の汚損史料は神戸大学に持ち帰り乾燥作業を行ったのですが、その陣頭指揮を執ってくれたのが河野未央さんで、とても苦労されたと伺っています。というのも、一度濡れた汚損史料はどんどん劣化が進み、カビや異臭も発生するという状態でした。被災史料の乾燥工程は誰かが一元的に管理しないとイケないのですが、その役回りが河野さん一人に集中してしまいました。そこで水損史料対応をいろんな方が出来るようになってほしいということから、河野さんが水濡れの資料の吸水乾燥法を伝えるワークショップを実施することになりました。明日の最後に開催するオプション企画でまたワークショップを行いますので、よろしかったら是非ご参加ください。

吉原：先ほど長野の例でも、試行錯誤の中で洗ってみたという話がありました。指導を仰ぐことができない状況もあります。手探りで初めての水害対応の課題について、画像をもとに聞かせてください。

松下：これは同じ日高町のM家での対応の様子ですが、



図2 汚損文書を現地で水洗いしている様子

これはまだ理想的なほうです。先ほどごらんいただいたT家の対応は大失敗でした。というのも手ぶらのまま丸腰で現場に入っていた時に、いきなり水損史料を発見したということと、やはりまだ水損対応について理解していなかったことがありました。

吉原：これがその時の写真です（図3）。

松下：M家のレスキュー時はビニール袋などのグッズを持参しており、ビニール袋に水損史料をそのまま入れて現場から持ち出すことが出来ました。また当時尾立和則さんがいらっしゃった京都造形芸術大学に即持ち込んで吸水乾燥をしてもえましたので、劣化することはほとんどなく、乾燥後は所蔵者にお返しすることが出来ました。

吉原：松下さんが現場からレスキューして持ってきたものを、こういったかたちで、運営委員の河野さんが、大学の授業等を利用して学生と応急処置作業を行いました。

松下：はい、そうです。これは大国さんの授業ですね（図4）。

大国：はい。これは私が非常勤であった時に授業でやりました。

吉原：私はこの時神戸大の2回生の学生でしたが、確かに古文書学の授業の一環でこういう作業があったということ覚えております。現場で16年前にやっていたということですね。

当時初めて水損資料の処置を始めるということで、技術的に我々だけではどうしようもないというところがあったと思います。東日本大震災以降では、いろんな業



図3 日高町M家での水損史料をビニール袋詰めして搬出

種間の連携も進みましたが、真空凍結乾燥機の利用など、つながりを作るのもいろいろ苦労があっただろうと思います。そういった点について聞かせてください。

松下：私自身は一応古代史の人間ですから文化財修復や保存科学のことについては無知だったわけですし、実際に水損史料を発見した時にどうしたらよいかのわからなかったのが正直なところでした。当時は古代史だったので崩し字を読んだり地方史料の解読には何の役にも立たなかったのですが、考古学の方と知り合いでフリーズドライという手法を教えてもらったことで、ようやく古代史でも役に立つことがあるんじゃないかと感じました。そこで2004年台風23号の水損史料をフリーズドライで乾燥させるために、神戸市の埋蔵文化財センターや兵庫県教育委員会の真空凍結乾燥機で実験的にデータを取った後、そのデータをもとに滋賀県の安土城考古博物館の真空凍結乾燥機で乾燥していただきました。兵庫県の民間所在資料を、しかも未指定の文書をなぜ滋賀県で乾燥することが出来たのか。もちろん直接的には水損史料を受け入れてくださった安土城考古博物館の中川正人さんのご尽力によるところが大きいのですが、それとともに私たちの先輩の世代が、文化財防災に関して近畿2府4県の広域連携の枠組みや相互支援協定の体制を築きあげてくれていたおかげというのが、滋賀県での乾燥につながったというふうに思っています。

吉原：ありがとうございます。写真をいくつか提供していただきましたので、水損資料の話をしていただきました。東日本大震災以後、日常的な関係の中で、水害時にどのように真空凍結乾燥機の相互利用を進めていくの



図4 水損史料の乾燥作業（大国氏古文書学授業内）

か、体制としてどうしていくのか、という議論が進んでいます。2004年の史料ネットによる水害対応の時には、すでにそういった課題があったということが松下さんの話から分かると思います。板垣さん、中野さん、川内さんの世代が史料ネットでの活動を始める時期というのは、水害対応が軌道に乗っている時期でしょうか。

板垣貴志：水害対応の2004年の時は、私は事務局としては関わっていないですね。協力はしているんですけども、いわゆるコーディネートする側の人間として関わっていないので、体験の仕方が全然違ったと思います。だから私は2005年から2015年まで事務局として関わったんですけども、2005年から2009年までは災害がなかったんです。これは神戸の史料ネットとしてメインで対応する災害ということで、全国では災害はあったんですけども。先ほど茨城ネットの佐藤さんがどうやって継承したらいいのかというふうな問題を提起されましたが、私は事務局として災害に対応するというのは、経験しないと絶対継承できないことだと思っています。なのでマニュアルは作られてもいいと思うんですけども、むしろ1年に1回くらいOB・OG会を開いておいてですね、なんか後輩たちが対応しなきゃいけなくなった時に、側でアドバイスするというような役回りが経験者には求められるんじゃないかなと思っています。そういう意味では2009年に佐用町・宍粟市に水害があった時に、ここに座っている3人（板垣・中野・川内）は大混乱になったんですね。結局経験のある初期メンバー、特に松下さんに、こういう時にはこうなんだという風なやり方を教わったことがあったんです。2004年の兵庫県北部の水害は事務局としては我々3人は関わっていません。そこが大きかったと思います。

吉原：世代で言うと、右のテーブルに座られている板垣さん、中野さん、川内さん当たりが同世代でその下が私の世代ということになります。その板垣さんたちの世代が、直接的に初めてメインで事務局として災害対応したきっかけが、2009年に兵庫県の北西部である佐用町、宍粟市で発生した水害なわけでした。板垣さんが史料



ネットにメインで関わられるようになった時に、いろいろ取り組んだことがあったと思いますので、そのことについてお話しください。

板垣：結論から言うと、2005年から2009年までは災害対応していなかったもので、私自身、非常に観念的でした。だからですね、史料ネットニュースレターの1面の上に3行の文章があるんですよ（図5）。3行目に注目して欲しいですね。「被災地から全国へ歴史学と社会をめぐる普遍的な課題」。この普遍的な課題を初期メンバーが掲げたから、史料ネットがいままで続いたと思うんです。当初は、1年で史料ネット活動は、1995年で終わるんじゃないかと言われていたのを、奥村さんとか大国さんとかが続けようと言った時に、「普遍的な課題」を掲げたということ、その「普遍的な課題」というのが何なんだろうと、そんな観念的なことを事務局に入った頃には考えていました。それで僕なりに考えて重要だなと思ったのは、被災地ですね、先ほど大国さんも言われましたけれども、改めて歴史を再評価する市民活動が活性化したことなんです。このスライドの写真は宝塚古文書を読む会の様子ですけども、街がごとごとく壊れた被災地で、まちづくり協議会が立ち上がってきた時に、じゃあ今後被災地でどういう新しい街を作っていくかという時に、歴史が顧みられたわけなんです。この現象が、非常に重要だと個人的には思っています。その時に宝塚の古文書を読む会とか歴史資料を守る会とか、伊丹市立博物館とか市民活動が被災地で活性化した。

この写真にはもうひとつポイントがあって、いわゆる古文書を読む会という、ある種一般社会から見たらマニ

- ◎ 被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
- ◎ 幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
- ◎ 被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

被災地

あらためて地域の歴史や文化を再評価する市民活動が活性化

宝塚の古文書を読む会
神戸の歴史資料を守る会
→ 門戸厄神東光寺松風館
伊丹市立博物館友の会

歴史資料のもつ可能性の発見!



歴史資料が人と人とを結びつける



宝塚の古文書を読む会の様子

図5 普遍的な課題についてのスライド

アックな世界なんです、ここに集まっている人たちは、いわゆる歴史好きな人たちだけではなく、この街をどうにかしたいという人が集まっていて、むしろ復興やまちづくりに強い関心をもっている人たちだったんですね。歴史研究者側からするとひとつの発見だったんじゃないかなと思うんです。驚きとともに重要な発見だったのではないかなと思っています。

だからたんに、過去の事を明らかにするだけではなくて、今を生きる人と人を結びつける力も歴史資料や歴史保存にはあるのではないかということも再発見したということが、僕の中で考えた中で被災地で見出された普遍的課題だったと思っています。被災地での発見は、いろいろあったと思いますけれども重要な点かなと思います。私自身、2009年頃は観念的だったんですが、でもこれは継承に値する課題だなと思っていました。その後事務局長を引き受けるんですけども、災害経験がなかったこともあって、最初は大変な時期もありました。

それともうひとつ重視したのは、人と防災未来センターという阪神・淡路大震災そのものを記録する震災資料とか災害資料を取り扱うセンターに、史料ネット関係者として初めて着任したことです。周りからは初めての着任だということで「なんかやれ!」とか言われるから自分もその気になって、洗脳されてですね。震災資料のことを自分でもちゃんと考えなければいけないな、と思って川内さんと吉川さんと一緒に作るのが震災資料ブックレットにつながっていったと思います。だから私が事務局長をやっていた時は、どちらかと言うと平時の活動が多かったです。そういう中で震災資料の問題をじっくり考えることができたかなと思っています。

吉原：震災資料の部分については、まだ色々あると思いますので、後ほど聞いてみたいと思いますが、ほぼ同じ世代で活動していた中野さんはどうでしょうか。

中野賢治：史料ネットは学会連合という形をとってしまして、私は最初、大阪歴史学会からの派遣委員として所属していたわけです。先ほど板垣さんがおっしゃっていましたがその間、史



料ネットが主体的に対応するような災害が無くて、端的に言うとも居心地がよくて、後任に引き継ぎをした後もそのまま運営委員として残っていたというのが実態だったと思いますね。ですので、活動の中心は2004年の最初の水害対応の資料の整理と返却と、それから2009年の佐用町のレスキューが中心でした。それと松下さんもおっしゃっていましたが、何も災害がない期間に史料ネットの存在をどういうふうアピールするか。そういうのに、いろいろと、まあ、ワークショップを大学で巡回してみたり、シンポジウムを開催したりといったことを中心に私の時にはやっていました。

吉原：川内さんは、その時期どういうことを行っていたか、どういうことに取り組んでいたのか、お話しください。

川内淳史：僕が史料ネットの委員として関わりはじめたのは中野さんよりも後だったんですけども、入った経緯は中野さんと全く一緒に、大阪歴史学会協議会からの派遣委員という形



です。当時在学していた関西学院大学も兵庫県だから、神戸に近いだろうということで、運営委員をお前がやれということで参加しました。ですから、当初は史料ネットというものについては、災害時に史料のレスキューをやっているんだあというくらいの認識しかなくて、全く物心がついていませんでした。ちょうど運営委員に着任した頃は大きな災害がなかったもので、ワークショップのお手伝いをしたり企画のお手伝いをしたりというような形で、なんとなく2年3年くらい委員を続けていました。そのような中、やはり板垣さんや中野さん、僕、また今日司会の吉原さんにしても、2009年の水害の経験は非常に大きかったと思います。2009年8月に起こった兵庫県の佐用町と宍粟市の水害ですけれども、この写真(図6)は8月末に佐用町でのレスキュー作業の様子です。松下さんから佐用町でのレスキューがあるから来いと引っ張っていかれて、旧家の蔵から水に浸かった史料を搬出しているところです。初めてレスキュー作業に参加したこの時の経験というのは、非常に衝撃的でした。史料ネットというのは一体何をやる団体なのかというこ

とを、この時初めて身をもって知りました。

この時、本当は日帰りする予定だったんですけども、松下さんに「泊まっていけ」と言われて、急遽ホテルに泊まって、翌日もレスキューのお手伝いをしたんですけども、史料ネットが被災地に行って資料をレスキューするという意義がこの時初めて身をもってわかりました。この時レスキューに入った旧家は、戦国時代から続くと言われるような大きな家で、蔵もたくさんある家だったんですけども、こんな水害は初めてだ、数百年来の水害だというような状況でした。その様なことで、このお家も大変な状況にあって、私たちのような者がいきなり行って大丈夫なんだろうか？と心配していたのですが、所有者の方が我々が来たことを非常に喜んでくれたんです。東日本大震災以降、写真やアルバムを拾ったり救済したりするボランティアが有名になりましたが、2009年当時はそういうボランティアはまだありませんでした。災害ボランティアといえば、いわゆる泥出しや家屋の片付けとかが中心でした。災害ボランティアの人たちが沢山被災地に入ってくる、そういう中で被災した旧家の方が、「本当は捨てて欲しくないようなもの」も捨てられてしまい、なかなか「捨てないで」と言い出せなかったということもあって、その旧家の方が我々の事を「拾うボランティア」と表現しまして、こういう「拾うボランティア」の人達がいるということが本当に嬉しいですよと言ってくれました。史料ネットというのは「拾うボランティア」なんだ。そういう活動をしているんだと身に染みて感じました。僕自身、2007年から運営委員は始めているんですけども、本気で史料ネットの活動に関わ



図6 初めて参加したレスキュー(2009年8月29日、佐用町O家)

りだしたのは、この2009年の水害からです。

その当時、先程板垣さんが言った通り、我々は災害を経験しない中で2009年の水害に直面し、目の前の災害に対して本当にどうしたらいいかわからず、ただあたふたしていました。そうした中で松下副代表に、我々は運営委員会の場でしかかれませんでした。お前ら指示待ち世代か？と、要するに「ひとりひとりができることをやれ」と言われました。ちょうど吉原さんが事務局に入った直後くらいの運営委員会だったと思います。それぐらい、我々の世代というのは2009年水害に直面した時には何もできなかった。それを松下さんに引っ張ってもらって、何とか史料ネットの活動に意義を見出して、今まで活動してきたという形です。

吉原：中野さんや川内さんの話のように、史料ネットが長年続いてきた理由や条件の一つは、歴史系の学会の委員で構成されている団体だということです。関西にある複数の学会の中には史料ネット活動を担当する委員が置かれています。委員は任期によって交代をしていきますので、それによって組織としての再生産がなされていると思います。そして、史料ネットについてよくわからないまま入ったとしても、実際に活動に関わることを通じて、史料ネット活動の意義や課題、役割を理解していったのが、この2009年以降の世代かと思います。板垣さんの話にあったように、新たな世代が第1世代の阪神・淡路世代の取り組みを再認識していったということでもあると思います。

2009年前後の世代については、新しく入ってきたメンバーがどのように史料ネットの活動を新しく作っていくのかという、ひとつの潮流をつくった時期でもありました。そのときの取り組みを、私たちは「若手企画」と呼んでいますが、それは、阪神・淡路世代や松下さん世代の活動を下から見ながら組み立てられていったと思います。現在の史料ネットの活動につながる若手企画について、板垣さんから話してください。

板垣：そうですね、2005年に事務局に入り始めて、比較的平穏だった時にですね、それこそ松下さんが言うように「まだやっているの」と批判もありました。ある意味、今でこそ史料ネットの活動ってかなり認知度は高まってきている。福島の阿部さんはまだ高まっていない

とおっしゃいますが、我々の頃からすると飛躍的に高まっていると思うのですね。その時期に批判もある中で、どうしたらいいかという時に若手企画が出てきたように思います。それこそ、確か第1回目は、北原糸子さんをお呼びしたことを覚えています。災害対応がなくて比較的余裕があったので、新たに生成され始めた震災資料とか災害資料の問題を考えようということになりました。ちょうど私が人と防災未来センターの専門員になったということも、そっちの方向にだいたいシフトしていく要因でした。その中で実際に被災者の方に、資料を介して初めて会うような経験をしていくわけです。

2008年の5月に、奥様を亡くされて、自分も生き埋めになった経験を持つ、ある震災遺族の桜井健さんという方に会って話しました。いわゆるメディアにおいては一番濃密な阪神・淡路大震災の体験をした人というふうに見られている方になります。自分の体験を紙芝居にしたから寄贈したいんだということで会いに行きました。僕はこの紙芝居を見た時に、これはすごいなと直感的に思いましたね。ちょっと今から20枚の紙芝居をパッパと見てもらおうと思います。これ15年経った時に、震災遺族が振り返った時にこういう絵を描いたということですね。ちょっといいですか。「戦後最大級の惨事」、「悪夢」、「奈落」、「崩壊」、「耐震設計の崩壊」、「救出活動」、「人の絆」、「奇跡」、「避難」、「避難」、「悲惨」、「焼け野原」、「火災」、「焼け野原」、「行列」、「断水」、「リュック生活」、「灰と瓦礫の中 路上で店開き」、「復興」、「友情」。絵が縦になっていたり横になったりするんで紙芝居として成立していないというツッコミはなしにしてもらいたんですが、20枚ある絵を描いた中で、おおよそ18枚はすべて新聞報道なんです。鳥瞰的な新聞報道もある。だから奥様の葬儀の写真なんかは自分が見た経験を描いているんですけども、この現象をどう考えるのかと言うふうなことを真剣に考えたのが震災資料ブックレットの出発点で、大国さんのような神戸新聞の記者とか、関西にいた震災報道をしたマスコミの人たちとの、シンポジウムを考えようと思ったんですね。まずはそれをとっかかりに震災資料のことを考えようと思うようになりました。この桜井さんです。ちなみにこの絵も含めて震災の絵に関しては、吉川圭太さんが素晴らしい論文を書いている

んで是非まだ余っているので買ってもらえればと思います。『阪神・淡路大震災像の形成と受容』、岩田書院です。ちなみにさっきの普遍的課題のことは、川内さんが注で触れています。我々のやった若手企画で震災資料ブックレットにまでもっていったことが成果としてはあったのではないかと個人的には思っています。

吉原：阪神・淡路大震災から始まり、その後に水害の対応を始めました。そして2009年ごろは事務局としての大きな世代交代が起こった時期でした。その前後ぐらいに神戸史料ネットとしては、大きな直接の災害対応がない中で、むしろ自分たち史料ネットの活動を通して阪神・淡路大震災に関する資料の問題というものを考えていったのが、板垣さん、中野さん、川内さん世代だったのではないかと思います。

そういった若手の活動の延長に、現在につながるような活動の原点が出てくるのだと思いますが、今までの話の内容を踏まえながら、阪神・淡路世代の奥村さんや大国さんは、ここまでの話を聞いた上で、自分たちがやってみて明らかになった成果や課題というのを今から振り返ってみるとどのように捉えているのかということを知りたいと思います。

奥村：今も継続して考えないといけないことですが、史料ネットの活動がずっと続けてこられる一番の根底は、先ほどの震災資料の話なんかもそうですけれども、やはり地域のいろんな方と様々な形で触れ合うというか、関係していくことで色々和勇氣をもらうということが大きいんですね。歴史関係の人間が多いので日常的に古文書だとか資料を読み込む活動が多いのですが、やはり歴史文化が本当はどこから生まれてきて、どういう力を持っているのかを感じることができたということが、史料ネットの活動のなかで大きかったのではないかと思います。

それから、歴史文化は一人で作るのではなくて、いろんな関係者がたくさんいるのですけれども、そういう人が日常的になかなか見えないんですね。みんな一緒に動いているわけではないので。だけど災害時にはなると非常に多くの方が関わっているんだなあ実感できるということがあります。また、その中で今まであまりお付き合いがなかった方々との関係ができあがってきました。

よく歴史文化を社会の中でつくりとくか、市民に支えられて歴史文化はあるとかいいますけれども、言葉にはあっても抽象的になりがちですが、それが具体的な形でわかるということが資料ネットの活動の中で、一番基礎にあると、それを多くの方々と確認できたことが一番の成果じゃないかなとは思っています。

ただ、先ほどの茨城史料ネットの時にもありましたけれども、資料はどんどん消えていっているという重たい現実があります。これは災害以前に地域の方々と関係を深めていけば残ったかもしれないと常々思うこともあるのですが、そういうことをどこまで広げていけるのかという点では、いろいろと工夫しなければならないと思います。事前の調査をどうやったらいいのかなとか、悉皆調査をしたらいいのではないかなというけれど、そもそも悉皆調査とはどういうことなんだということを含め、いろんなことが課題として残っていると思います。むしろやればやるほど、新たな課題と成果が生まれる、ある意味終わりが無いのかなというふうに思っています。そういう意味では、完全に対応する方法が分からないと活動できないというふうに考えますと、活動できなくなります。したがって、資料ネットの活動は新しいことをどんどん考えていく、分からないことがどんどんわかっていくというイメージで僕は捉えています。

吉原：大国さんは活動を続けながら成果や課題についてどういったことを考えているのでしょうか。

大国：はい、成果については先程も少しお話した通りで、まず地震という災害と水害は全然違う形の災害でありますし、資料の保存の在り方も全く違うということですが、そういうものによろやくうまく対応できることができた。一部で、ほんの一部ですけれども、我々もそれに踏み出すことができた。そして今日はいろんなご発表がございましたけれども、そういったものがいろいろところで一緒に取り組んでいただける方が増えてきたというのがまず一番の私達の成果だと思います。それから意図してきたわけではないんですけど、国の様々な政策とか様々な防災の計画、そういったものにもこういった未指定の文化財というもの位置付けるということが必要だということが明文化されてきている。わたしは別にそういうものを目指してきたわけではないし、

それだから何でもかんでもうまくいくという楽観をしているわけではございませんけれども、少なくとも国がそういったものを位置付けるというようなところまで踏み込んでくれたということもそれなりの成果だと思っております。

先程から板垣さんも言っていたようにですけども、ちょうど一年か二年くらい経ったところで史料ネットの組織をどうしようかという議論をした時に、普遍的な課題があるという話をさせてもらいました。それは資料というのは災害とかで失われるだけではなくて、日常生活の中で失われていっているのだということを引きちんと位置付けないと物事は進まないのではないかな。例えば家が建て替わるとか、人々のライフサイクルの変化の中で資料は捨てられる。我々が被災地に行った時にはすでに、地震の前に捨てたという資料はたくさんありました。それを残していくということに対してはやはり普遍的に歴史・文化というものは、先程の話に戻りますが、地域のアイデンティティを強め、我々の生活、未来を考えていく。そういうところに非常に重要な素材なんだということの共通認識を広めていく以外にないんだということも訴えた。それが普遍的課題であるというふうに思っています。そういう意味では普遍的課題というのはまだまだ達成できていないし、その一方で達成しようという人達がこれだけ沢山広がってきたというのも逆の成果であるというふうにも思っています。

吉原：松下さんは神戸の史料ネットとして初めて水害対応をやり始めたということで、同じように現状を踏まえて、これからの成果と課題についてお話しください。

松下：成果については先程皆さんがおっしゃっていただいたことに尽きるのかなと思います。私達は結局災害の種類が多さに気づいたということもそうですし、先程の日常の延長線上にこの活動があるという話にも正にその通りだと思います。そういう意味で、先程も申し上げたのですが、災害時の史料保全活動が水平展開しているというのが、私にとってはずっと心の支えになっているわけです。また一方で、岡山、山形、福島で「予防ネット」という形で平時からの史料保全活動や災害時に備える史料ネットも設立され、私達は一層勇気づけられたところがあります。今日のような場もそうですけれども、しか

も各地のネットと連携を深めていく活動は、司会の吉原さんのような若手の世代がやってくれています。下の世代にも担い手が広がっていき、史料ネット活動が継続していくというのが神戸の史料ネットの一番の成果ではないかと思っています。

課題といますか、今はもうそんな話は聞いたことがないですけども、当時は禁欲的にレスキューすると言いますか、つまりレスキューしたら普通に目録とって研究して地域に成果を還元して…というようなところまですべきという話がある一方で、うちらはボランティアなんやから被災地から救出して安全な場所まで一時保管したらもうよろしい、これは平時の地方文書調査と違うという議論が昔はあったんですね。成果の還元が不十分だったというのが一つ目の反省点です。所蔵者の方に史料の意味を理解してもらわないと保存してもらえないということから、今では所蔵者の方に保全した史料を解説して中身を知ってもらうということがわりと当たり前になってきました。2004年の時は水損史料のレスキューと応急処置で手いっぱいだったし、私自身もまだあまり地方文書を読めませんでしたので、出石町の日野辺区有文書を返却した際には、神戸大学の木村修二さんに伊勢講の史料解説と、区有文書入り和筆筒の展示を地区の公民館でやってもらった他は、研究成果をあまり還元せずに来てしまいました。そういうわけで2009年の台風9号の時には、レスキューした宍粟市閏賀地区の区有文書の説明会を板垣さんや吉原さんにしてもらえたので、地区の方にとっても嬉しいことだったと思います。

二つ目の反省点としては、県内自治体の文化財担当職員や学芸員、地域史研究団体と神戸大学との連携はまだ不十分だったのではないかと、それは神戸大学や史料ネットの問題というより私自身の知名度がなかったためというべきかもしれませんが、地元との関係作りが大変でした。2004年の台風23号の被災地では、兵庫県と京都府あわせて8市10町を調査しました。もちろん事前には連絡はしていますが、「水損した歴史資料はないですか?」「あれば一緒にレスキューしませんか?」とある意味「飛び込み営業」みたいな形で行くわけです。そうすると災害対応で忙しいときに神戸大の助手風情が何しに来たんだとやんわり断られることがあったわけですが、

一方で話をちゃんと聞いてくれる方もいらっしやるわけです。

それまでに大国さんたちが関係性を作ってくれた郷土史団体との間ではうまくいくのですが、文化財担当職員の方にあまり知り合いがないことと、地方の文化財担当職員はたいていの場合、考古学専攻の方が多いわけですから、自治体史編纂などに関係していない文献史学のメンバーとはどうしても疎遠がちなところもあったと思います。神戸大学では2002年以降に地域連携事業が展開し、県内の歴史文化を活かしたまちづくりなど県内の文化財担当職員と一緒に活動する機会が増えて、徐々に認知度も上がってきた感じがしています。また2004年以降の自治体合併の問題があり、自治体のほうも合併前よりも少なくなった担当者で、合併前よりも広いエリアをカバーしなくてはならない中で、私達が未指定の文化財まで守れと言うわけですから、保全対象は広がる一方で、避難所対応など文化財以外の業務が主になりがちな中で、一緒にレスキューしていただいた職員さんは大変だったと思いますし、ご協力いただいた皆様に感謝したいと思います。

実際に住民の方々も過疎化や人口減で集落の維持もままならない中で、どうやってするのかというのが非常に問題になっております。神戸大学の若いメンバー、今日もいてはりますけれども、井上舞さんを中心に兵庫県教育委員会と連携しながら市町の文化財担当職員向けの文化財防災研修会を県内の県民局単位でやっています。午前中は県の文化財保存活用大綱と市町の文化財保存活用地域計画に関する討論、午後は地域防災計画の策定に関与する市町の防災担当の方、あるいは危機管理課の方にもご参加いただいて、市町の地域防災計画に未指定文化財保存の項目を入れたり、県の大綱、あるいは市町の保存活用計画に大学や史料ネットなどとの連携を盛り込んでもらえるような活動を展開しています。阪神・淡路大震災の頃と比べて格段に史料保存体制作りは深化していると思います。

あともう一つ、隣接分野との関係ですが、先程も話が出ましたけれども、レスキューから応急処置・修復の過程で、私達は文化財修復や保存科学、民俗学、美術史、建築などいろんな分野の皆さんに大変お世話になったん

ですね。そういう意味で歴史文化に関わる業界全体で、レスキュー体制を構築しながら展開してきましたが、東日本大震災後は文化財防災ネットワークという形で被災文化財の保全体制が整備されてきました。私たちにとってはありがたいですし、一昔前だったら考えられないような体制作りが出来て夢のようで、本当に期待しているところでございます。

吉原：このように阪神・淡路大震災と水害の時に初めてやったという成果と課題を示していただいた上で、先程板垣さんからは若手メンバーによる企画の成果の一つとして、震災資料の企画であるとか、ブックレットを成果物として発行したという話がありました。そのなかで中野さんは、当時神戸大学に在籍していたわけでもなく、大学院は大阪大学でしたが、活動をしていく中での課題とか問題意識はどのようなものだったのでしょうか。

中野：おっしゃる通り、私は大阪大学に所属していて、兵庫県とはあまり縁のない暮らしを送っていましたので、やはり震災資料の保全から始まった、史料ネットの活動は、どこか他人事のような意識がありました。それがぎっぎの2009年のレスキューに実際に関わったことで意識が大きく変わりました。私がかつて感じていたように、「それは神戸の人がやっていることだから」という意識をどう克服していくかというのを意識して、イベントでいろいろな人を巻き込んでいく流れをどうにかしてつukれないか、というような事をずっと考えていました。

吉原：中野さんの言うとおりの、活動を広げていくに伴って史料ネットの活動の理解も大きく広がっていくということで、東日本大震災のインパクトはやはり大きかったと思います。災害時に歴史学以外の保存科学や修復の方々との付き合いが本格的に始まったのもそのぐらいだと思いますし、また各地に資料ネットが次々と設立されていくという流れは、東日本大震災の前後ぐらいから急速に進んでいったことだと思います。そこで川内さんから改めて、東日本大震災の対応とその後の広域連携の作り方、それを支えるための情報集約と発信のあり方について、どのようなことをやったのか、どういう問題意識があったのか、まとめてお話しください。

川内：先程吉原さんからご紹介いただいたように、僕がちょうど事務局長を引き継いだのは東日本大震災の直

後なんですけれども、その引き継ぎ前後に大震災が起こったため、実質的には2011年3月から事務局長代理という肩書で、東京の学会などとの連絡調整ですとか、そういうことで動いておりました。なので私の事務局長としての最初の仕事はまさに東日本大震災でした。その後ご縁があって、現在は仙台で東日本大震災の10年を迎える資料の後始末と申しますか、返却とかに携わっているわけです。当時のことと言えば、東日本大震災が発生した時、皆さんもご記憶かと思いますが、あの津波の映像を実は吉原さんと2人で、神戸市内の某所でインターネットでの中継を見ていたんです。あの津波の映像を見た時に、もう何も考えられないという感じがしました。でも何かしなければいけないという中で、3月15日に宮城資料ネットのメールニュースがポーンと届きました。これに被災地の外にいた我々は驚き、勇気づけられました。あれだけの災害の被災地において宮城資料ネットがもう動き出しているということで、やはり被災地での活動を外からなんとか支えていく必要があるだろうということを考え、後方支援を遠隔地からしていこうと決めました。最初の動きとしては支援募金です。だいたい史料ネットは大きな災害がおけると活動資金のための支援募金の呼びかけを行うんですけれども、支援募金を呼びかけてそれをどんどん被災地に送って、活動資金としてもらおうということでやりました。最初に支援募金の呼びかけを始めたのは2011年3月16日ですが、実はその後3月24日、5月4日と、バージョンの違う支援募金の呼びかけ文を出しているんです(図7)。普段はこういうことはあまりしていません。これは要するに、被災地の状況をみながらどういう形で訴えかけると被災地の活動を支援できるかということで、史料ネットの運営委員会の中で議論しながら、時期を追いながら支援募金の呼びかけ方を変えながら募金を集めていったということです。そうした支援募金の呼びかけ・送金の他、被災地への人材の派遣とか、いろいろやって後方支援を軸にしながら史料ネットとしては東日本大震災への対応を行いました。そういう中で私たち史料ネット自身も、2011年4月と5月に宮城資料ネットや山形ネットなどと連携して被災地のレスキューを行ったり、またその後関東では、神奈川や千葉、じゃんびんとか、またふ

くしま史料ネットも含めて、関東の資料ネットによる連携レスキュー活動が展開されるなど、実際のレスキューは被災地の資料ネットが行い、被災地の外の資料ネットは後方から支援をするという関係ではなくて、被災地内外の資料ネットが連携して活動を行うということが、2011年以降盛んに行われるようになりました。

東日本大震災では、そうした資料ネット同士の広域連携による対応や、また今日も国立文化財機構の岡田健さんがいらっしやっていますけれども、当時岡田さんが事務局長となられた「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」に私たち史料ネットと宮城資料ネットが構成団体として参加しまして、国全体の文化財レスキュー事業の中に資料ネットも参画して、そうしたところの連携による活動も行われました。僕としては、このような東日本大震災以降の連携の形をもっと可視化して、維持して、いざという時に備えておく必要があるのではないかという問題意識がありました。そういう中で5年ほど前、ちょうど史料ネットが設立20周年ということで何か記念事業をしましょうか、企画を考えましょうかという事になり、その企画をちょうど吉原さんと大阪の飲み屋で二人で飲みながら考える中で、一度全国の資料ネット全員で集まって、どこか温泉旅館かなんかに泊まって一晩飲んだら連携も深まるのでは、一年に一回そういうことをしたらいいのではということ話し合い、運営委員会に提案したり、いろんな方へご相談申し上げ

ていました。このような全国の資料ネットが集まる場をつくろうということで企画をしていましたところ、当時、国立文化財機構の事務局長だった栗原祐司さんがその話に乗ってくださり、史料ネットと国立文化財機構の共催で、2015年2月に神戸で第1回全国集会を開催したのが、僕が事務局長をしていた時の大きな成果の一つということ（図8）。

それともう一つ、第1回全国集会で『『地域歴史遺産』の保全継承に関する神戸宣言』を採択しました。これはいろんな関係者が集まって資料を残して未来に継承していこう、それは専門家も非専門家も、一般の市民の方もみんな一緒になってやっていこうということを明文化して、全国集会の場で宣言しようということで、文化財機構の栗原さんと我々史料ネットの運営委員会とでやりとりをしながら文案を作っていて、この時に発表しました（図9）。これは阪神・淡路大震災から東日本大震災に至るまでの、資料ネットの活動がやってきたことの成果を形として発信したものと位置づけられるのかなと、今でも思っているところです。

そうした広域連携の在り方を可視化すると共に、やはり情報ですね。全国集会をやってみて、各地に様々な取り組みがあるということがわかったわけなんですけれども、集会をやるまでお互いの活動を知る機会というのが実はあまり無かったです。その一方で情報発信はそれぞれしているのですが、各地の情報を総覧できるように

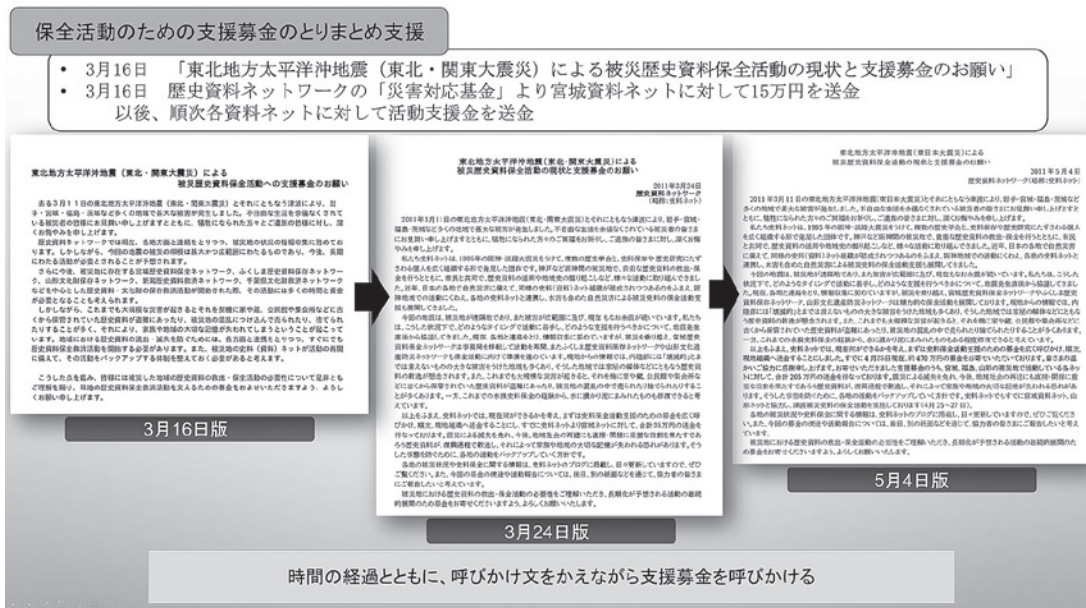


図7 東日本大震災での後方支援活動（活動支援募金のよびかけ）

プラットフォームがなく、そうした情報環境もお互いの活動がよくわかっていなかった原因の一端だったわけです。史料ネットは現在でも全国の資料ネットの「暫定的センターの役割」を果たすということを、2002年の改組の際に定めた申し合わせ事項で掲げている関係上、何とか全国の資料ネットをつなげ、情報を集約して発信する仕組みは出来ないかという事を考えて、東日本大震災の時に運用開始した SNS を使ったり、また 2012 年の史料ネットのホームページのリニューアルの際に、事務局の松岡弘之さんに web 担当委員を引き受けていただいて、SNS や各地の資料ネットの情報発信と連携させるような仕組みを作ったりしました。この写真（図 10）は 2011 年 3 月 11 日の史料ネットの Twitter で、下から上にかけて新しい情報になっていくんですけども、こうした SNS の利用というのは資料ネット活動としては初めてだったと思います。このアカウントは、実は運営委員会に黙って勝手に作っていて、東日本大震災が起こった後に、実はこういうのがあるんですけどもいいですかということで、事後承諾で正式に運用を開始しました。一昨年度の西日本豪雨の際も岡山史料ネットや愛媛資料ネットなどが、被害の状況や活動の様子など、それぞれ SNS 等で上手に発信されていて反響も大きかったようですが、こうした SNS の活用を通しながら全国の資料ネット活動を何とか共有化していこうというのが、もう一つ私が頑張ったところかなと思っています。

吉原：川内さんが指摘したような活動が現在も、他地域への大規模災害時への支援や、この全国集会に象徴されるような広域連携のための場を設けることにつなが



図 8 第 1 回全国史料ネット研究交流集会（2015 年 2 月）

ています。またホームページや SNS については現在いろんな資料ネットがさかんに情報発信しているので、我々も学ぶところが非常に大きいです。

ここまで、阪神・淡路大震災から現在に至るまでの活動の主要な担い手である皆さんに、それぞれの時期にどのような取り組みをしていたのかという話をさせていただきました。最後に、現在の史料ネット活動を見てどう思うのかということと、これからの活動について期待したいことについて教えてください。

川内：僕が事務局長時代に、全国の資料ネットの広域連携の形を作ることができないかということで全国集会を始めたのですが、お陰様で今日も全国からたくさんの方にお集まりいただきました。この間に全国各地で大規模災害が立て続けに起こっていますけれども、現在のところ、資料ネット間の連携は結構密にとれているのではと思っています。こうした広域連携とともに、それぞれの地域で様々な人たちのつながりが存在する、まさにネットワークでつながるといのが資料ネットという活動だと思っています。

広域連携のハブとなる暫定的センターとしての史料ネットは、東日本大震災以後、新しく設立された資料ネットも出てきている中で、その役割も非常に重要になっていると思っています。その一方で、これは僕が史料ネットにいた時からずっと思っていて、現在の事務局長である吉原さんも頭を痛めているのではないかと思っていますが、こうした広域連携の形ができてきて、史料ネットがセンター的役割を果たさなければならない一方で、実際の史料ネットの事務局体制というのは、必ずしも盤石



図 9 「地域歴史遺産」の保全・継承に向けての神戸宣言

ではないはずです。先程からも出ていますが、史料ネットは元々阪神・淡路大震災以来、学会連合的な役割を果たしており、僕とか中野さんなんか学会から派遣される形で史料ネットへ関わり、活動をしている。このような史料ネットの若手委員のリクルートというんですか、担い手の拡大を行ってきたんですけども、やはり阪神・淡路大震災から25年が経って、日本史学における学会の状況とか日本全体の学術体制を取り巻く状況はかなり変わってきているわけです。関西の日本史学界では、若い院生・OD層が日常的に各学会の部会の運営を担当していますが、現在では一人の人が二つも三つも学会運営を掛け持ちするような、そういう状況が生まれています。そういう状況では、なかなか若手研究者が落ち着いて史料ネットの様な活動に関わる余裕がないということが、少なくとも関西では見られました。他のところはいろいろ状況もあるのですが、たとえば茨城なんかは若い院生のみなさんが頑張って資料ネット活動を支えていますけれども、現在僕が関わっている宮城なんかでも、同じように資料ネット活動への若手研究者の参入不足という課題を抱えているな、と仙台に行つて思いました。若い研究者のみなさんと資料ネット活動を一緒にやってく中で、このような課題をどう考えていくかは、私が事務局長時代も課題としてありましたが、現在ではなおさら深刻な課題になっているのかなと思っています。こう

した状況を踏まえ、四半世紀を超えてきている資料ネット活動というのがどのような歩みをしてきたか、またこれからどういう課題があるのかについて、一度何らかの形で検証して、位置付けていく必要があるのではないかと個人的には思っています。5年前に史料ネット20周年記念事業を立ち上げた際には、奥村さんとか大国さんに聞き取り調査をして、史料ネットの歴史的検証をやっというかという考えもあったんですが、今に至るまで充分できていません。その辺については、現在の事務局に引き継いで欲しい問題関心だと思っています。

あともう一つ、先程述べた若手委員のリクルート、若手研究者の活動への参加促進ということとも関係しますが、たとえば茨城史料ネットでは、活動に関わった大学院生のみなさんが、修了後に自治体などの歴史資料・文化財関係担当職員などに就職して、その結果、自治体の中に茨城史料ネットのOB・OGが沢山いて、そういう人達と現役の学生・院生が関わりながら活動したりしています。また福島でも、先程の第1セッションでふくしま史料ネットの阿部浩一さんが、台風19号の際に、卒業生が被災自治体にいたことで繋がる事ができたというお話もありました。そういう資料ネットに関わった人達が、その活動を評価されていろんなところに就職し、そのつながりで資料ネット活動がさらに展開できているという事はあります。しかしながら一方で資料ネット活動を行うことによって、例えば我々の出身母体である歴史学としての学術的な部分で若手研究者が評価されるかという、実は必ずしもそうではないという状況があります。資料ネットがこの25年間全国に拡がり、多くの歴史研究者が参加する活動になってきている現状を鑑みた時、やはりこういう活動に携わることによって、若い人たちがそれなりの評価をきっちり受けるような仕組みなり、場なりが設けられる必要があるのではないかと思っています。そこは資料ネットだけでは解決出来ない部分もあるんでしょうけれども、現状の課題としてあるかなというふうに考えています。

吉原：活動が全国化していく中で、やはり大切な活動であるのは間違いないので、そういった大切さをどのように評価してもらうのか、それをどうやって伝えていくのかを考えると、史料ネットでの経験を各地で伝えるこ



図10 東日本大震災直後の史料ネットのtwitter

とが重要だと思います。その意味で、中野さんは現在、山梨で学芸員のお仕事をしていますが、今の山梨の状況も含めて、史料ネットの活動に期待する事をお願いします。

中野：私は山梨の博物館で働いていますけれども、先程松下さんがおっしゃっていたように、災害がなくても日常的に資料が破棄される状況が全国的に進んでいると思います。私が勤めているところでも、月に必ず1回から2回そういうお申し出があって、その都度段ボール20箱くらいもらってきているというような状況ですね。そういった状況で資料の価値をどういうふうに地域の人達に理解してもらって、地域でなんとか資料保全を続けてもらうにはどうしたらいいかというのを最近はずっと考えて、いろいろとアプローチを考えているところです。そういう意味では史料ネットでそういう考え方を教えてもらったことが、今の仕事をする上での非常に大切なことになっているのではないかと考えています。とは言え、山梨でもそろそろネットワークをという話が出てきておまして、平川南さんから繰り返し言われてきたことなんですけれども、ようやく地元の大学と連携して山梨ネットの設立に向けた動きが徐々に進みつつあります。またいろいろとみなさんのご指導を仰ぐと思いますが、よろしく願いいたします。それが一つです。

あとはここ数年、私のようなものが史料ネットにいた頃と違って、大規模災害が毎年のように必ずどこかで起こるといって、とんでもない時代になってしまいました。そうした中で、先程川内さんがおっしゃったように、全国的な支援体制の中での史料ネットの立ち位置は、これから特に重要になってくると思うんですね。一方で文化庁の文化財防災ネットワークという事業があって、あれは非常に心強いんですけども、そういう官としての事業が成立してくると、選択と集中という、私が一番嫌いな言葉ですけども、それがいいんじゃないかという話になりかねないと思います。そうではなくて、やはりそれとは違うアプローチの仕方としてこれまで史料ネットが培ってきた方法、やり方というのが必ずこれから先、生きてくるとは思いますし、必要になってくるとは思いますので、継続的な活動をいかに続けていくかということと、やはり全国の中でどういうふうに立ち位置を占

めていくかということ、それぞれを非常に難しいことだと思うんですけど、是非続けていっていただいで、是非山梨ネットにも支援をいただければと思います。

吉原：では板垣さんも最後に一言お願いします。

板垣：今日は、毎号の史料ネットニュースレター1面の上に掲げられながら案外無視されていた「普遍的な課題」というくだりを強調しました。それは、初期メンバーが掲げた課題というのは、どうやって具体的に被災した資料を救おうかという課題ではなくて、さっき中野さんが言われましたが、日々廃棄されつつある資料をどうやったら大切に社会にすることができるとかというように、非常に意味抽象的な課題だったんです。僕自身も観念的になっていたというお話をしましたが、これは新潟の交流集会の時にもフロアから発言したんですけども、史料ネット活動というのは、具体的には被災地に入って資料を救って、水に濡れた資料なり、被災した資料を救って、保存科学の人の協力を得ながら修復して返すという活動なんですけど、一方で抽象的なレベルでは、記録とかアーカイブズといった歴史資料というものを大切に社会にいかにしてつくっていくかという活動でもあるんです。それこそ初期メンバーが掲げた普遍的な課題だったというふうに私は思っています。だから具体的なレベルでは資料保全活動を被災地で展開するわけですけども、一方で、学術的な実践という側面があることを一方で忘れてはならなくて、単なるボランティア活動ではないという側面がとりわけ歴史研究者として関わっている人にはあるんです。それをきちんと形にして出していくことが最終的には歴史資料をちゃんと大切に社会の形成に繋がっていくんじゃないかと個人的には思っています。

松下：先ほど話に出ていましたが、事務局体制が私達の時より規模が縮小されていて大変だなと思うんですね。人手も少ない中、今日のような大規模な行事も開催し、準備も大変だったと思うんですが、非常によく頑張っ取り組んでいるなあということで感謝しています。私達のような団塊ジュニア世代は就職氷河期だったのですが、実は2004年当時も、就職もあまりなく先行きが不安な中、こんなボランティア活動ばかりして「大丈夫かいな」と心配の声だったり、「そんな暇があるなら論

文の一本でも書け」と怒られたりとか色んな目に遭いました。この手の話をすると多分一時間半かかってしまうので、先程も誰か本の宣伝をしてましたんで真似しようと思うんですが、詳細は『水損史料を救う』という名著がございます。現在在庫210だそうで、寄附や思っで購入してもらえたらありがたいです。そこに元大阪大学の加藤さんも書いてはありますが、結局ボランティア、先程板垣さんも形にせなあかん、という話をしてましたけど、本当にその通りだと思うんですね。結局資料を救うことをどう学問や社会の中で位置付けていくのか。これは恐らく一人ひとりの立場で違うでしょう。まだ言うても近世や近代やってる皆さんはいいなあと思うんですよ。すぐに役立てることが出来るんで。私らみたいな古代史の人間、今日も来てはる岡山の今津勝紀さん、神戸の坂江渉さん、愛媛の寺内浩さんとか。実は史料ネットは古代史や中世史の方が多くんですけど、本当にすごいなあと思うんです。なんで古代・中世が多いかという、史料ネットの運営委員会は各学会の科学運動の委員から構成されているので、第一世代の場合、特に遺跡保存運動などの延長線上で活動されている委員が多かったのではないかなあと思います。一方で専門の時代にかかわらず、史料保存や活用のことを我がこととして考えていく。そういうきっかけを頂いたということで、最後個人的な話になってしまうんですけども、資料ネット活動によって私にとってはすごくいい経験をさせてもらったと思っています。この頃、地域連携事業でよく中山間地域に入らせてもろてますけれども、以前のように地方文書が出てきてもあまり怯むこともなくなりました。今自分の科研費で、災害史の研究をしたり、地域の皆さんと自治会文書の保存と活用の研究や活動をやったり、過去の南海地震の災害記録や津波記念碑を太平洋沿岸部の地域の皆さんと一緒に読んで自主防災活動に活かしてもらう研究をしたり、そういうことが自分自身で展開できるようになって、ようやく古代史としての自分と資料ネット活動する自分との折り合いを私なりにつけてきたつもりです。資料ネット活動が社会的にも学界的にも認知されなかった頃は、きっと僕らと同じ若手メンバーはもやもやした中でやっていた人も多かったと思うんですね。でも近年ではこういう資料ネット活動も十分に認知され、報われ

るようになってきているのではないかなと思っております。ということで皆さん明日からも頑張りましょう。

大国：もうすでに4人の方が言われたことと大分重複すると思いますので、私は違う形でお話します。日常的に資料が捨てられるということで言いますと、今の過疎化、限界集落、無住化集落といった問題が大切でしょう。それから災害ということと言いますと、南海トラフ地震等で想定される広域的な同時被災というものへの対処。こういったものがまだまだ心許ないなと思っています。具体的な答えがあるわけではありません。そういう時には腹をくくってというか覚悟を決めてやるということしかないなと思っています。先程国の話も少ししましたが、少しそういう関係もできつつあるという認識もあります。同時にここに集りの皆様と、どう手を携えられるかということが、相当覚悟が問われるなと思っています。いずれにせよ、やはり顔の見える関係を維持できるのか。特に難しいなと最近思うのは行政との連携です。一緒にやっている時には顔も見えますが、少し時間も経って距離が離れると行政の人は異動して行って、新しい人が来ている。また一からいろいろ話をしないとなかなか話が通じない。というところでの温度差というのは25年ずっと、私は名前を連ねるだけですけども、史料ネットにいとそういうことを感じます。やはりそれこそ日常、どういうふうに関係をちゃんと作っていくかということが問われる。同時に先程から担い手の話がちょっと出ています。やはり資料ネット活動は楽しまないといけないし、歴史学会の人だけではなくてそれ以外の人達にも楽しんで関わって欲しいなと思っています。そういう意味では明日のお昼ごろからの第4セッションですが、私はこういうことを是非やりたいと話をさせてもらいましたので、明日の第4セッションで若手で頑張っている人達のお話を皆さんと共有したいなと思っていますので、明日も是非長時間でありますがお付き合いいただきたいと思います。

奥村：もうあまり言うことがないのですが、神戸の史料ネットの事務局長の皆さんの話の特色が分かっていただけではないかと思っています。歴史資料ネットワークは阪神・淡路大震災の後にできました。したがって、その一つは被災した歴史資料の保存という柱が非常

に大きな意義を持っているのですが、同時に大災害を経験したということで災害に関する資料の保存という問題を、もう一つの大きな柱として掲げてきたことがあると思います。板垣さんの話にもありましたけれども、そういう意味では両方を含めて社会の記録というものを次の世代にどう具体的に引き継いでいくのかということ、意識して展開してまいりました。これは僕はとても重要なことではないのかなというふうに考えています。私達人類は、自然と社会との関係において大きな災害と向かい合って歴史を作ってきたので、そのことをちゃんととらえていくということがやはりだいじかなと強く感じています。そういう中で活動を進めていく際、この後も二本柱は大事ではないかなと感じているところでございます。

もう一つは先ほどちょっと述べたのですが、私自身は25年も活動が続けてきたのですが、個人的にはこの活動を通して、歴史のプロフェッショナルとして歴史研究者が社会の中で意味を持っているんだなということ、認識させられていたことが、歴史学者として研究をするときにも一番大きな基礎になってきています。このことは、個人の問題だけでなく、歴史学にとってとても大事なことだと思います。私たちがそのことに気づくというのは、日本社会の長い歩みの中で、今私たちが生きる現代社会においては歴史や文化を大事にする人がいて、それが社会を支えている、歴史文化の基礎を支えているということを資料ネットの活動の中で再認識してきたこ

とではないかと思っています。今この普遍的な課題という点では新しい科研費をいただきまして、そこでも議論をしていますが、21世紀の日本社会にふさわしい、歴史文化の次の世代への伝え方というのをちゃんと考えることができるのは、全国で資料ネットをやっている方との協力なしには進まないんじゃないかなというふうに思っています。そういう点では、阪神・淡路大震災のころと比べると、歴史資料を保存していくとか、歴史文化を伝えていくことが、日本全体で大きな課題として取り上げられるようになったことは、隔世の感があります。

ただ、あまりに課題ばかり考えているとしんどくなってきました。だいたい歴代の事務局長は前向きに考えて、ある意味では勝手なことをどんどん進めていくということが、今日も聞いていただけるとわかると思います。私はこのような自由な雰囲気がこれも大切じゃないのか。どうせ私たちは全て分かるわけではないですから、一つ一つできることを配慮しながらやっていくというのも神戸の歴史資料ネットワークが25年間続いてきた一番の大きな理由なのではないかと思っておりますので、このような雰囲気が次の世代にもつながっていけばいいなと私自身は思っております。

吉原：史料ネットの25年の歩みについて、どのように考えながら活動してきたのか聞いてきました。ご質問等がある方はいらっしゃいますでしょうか。

第2セッション 質疑応答

モリス・ジョン



大変面白いお話をありがとうございました。宮城資料ネットのモリスと申します。今日の話聞きまして、思うところが2つあります。1つは、大国さんが、地域社会の崩壊ということ資料レスキューの大きな課題として指摘されましたが、明日の若手養成の話で課題として出てくるかと思いますが、資料ネットにとっての大変大きな課題は、地域社会の崩壊と表裏一体であります。具体的には、大学院で若手研究が育っていないことが各地の資料ネットにとって大きな課題になっていると見受けられます。宮城資料ネットについていえば、事務局の中心となっている人たちが20年近く、「わたくしが一番若い人です」と言い続けてきていますが、いつの間にか、彼らが完全に「おっさん」になってしまっています。こうした状況では、大国さんが問題にしていた課題、つまり資料をどうやって地域に返すのかということだけではなく、日本の大学教育そのものの危機がわたくしたちの運動の危機でもあると認識する必要があると思います。

もう1つ直視しなければならない課題は、わたくしたちが資料レスキューという活動を社会一般と学界にどう説明するかという問題にかかわるものです。単刀直入に言いますと、わたくしたちの資料レスキュー活動を災害科学という学問の中にどう位置づけるかということについて意識する必要があるように考えます。奥村さんは繰り返し、資料レスキューが地域社会にとって非常に大事だということをおっしゃっていますが、さらに踏み込んでいえば、資料レスキューは、地域とともに活動して初めて可能になるということをも併せて認識する必要があります。しかし、それにはとどまらず、さらに踏み込んでいえば、災害科学で主要な

概念となるレジリエンスとの関連で見ると、資料レスキューは、レジリエンスの発現を促すもの、すなわち縦にも横にも幾重に結ばれて広がっていく多様な人間関係を形成して発動されるさせる活動である、ということを我らがもっとはっきりと認識すべきであります。その場合、歴史家が世間に向かって「わたくしたちがやっている活動が地域社会を元気にしているよ」と発信すれば、ややもすればこうした考え方が歴史家の勝手な独りよがりや拒絶反応を起こす恐れがありますが、被災地に入っていききっかけをつかむのに困っている他の人文科学（例えば社会学や心理学）の力を借りれば、わたくしたち歴史家がやっている資料レスキューが地域社会にもたらすより広範な効果について、より客観的に説明できる論理を獲得することが可能になります。さらに、社会支援を専門とするこうした領域の人たちと協働・連携すれば、わたくしたちの資料レスキューがもたらすプラスの効果がさらに高まる可能性も生まれてきます。資料レスキューの原点たるもの、すなわち資料をどれだけレスキュー・保全できたかという根本的な部分はいささかも変わりませんが、他領域の人たちと手を携えることによって、板垣さんがおっしゃっていた普遍的な課題に対しての答えを見出す1つの道筋になるかと、わたくしは確信しております。

上山真知子



宮城資料ネットの上山と申します。私は心理学者で歴史学者ではありません。なぜ今日ここにいますかといいますが、モリスさんのお話にありましたように災害科学という観点から考えた場合、資料レスキューというのは、皆さんの言葉でしょっちゅう出てきましたけれども、「アイデンティティ」「人々を元気にする」

まさにこれだったんですね。東日本大震災の直後には、「なんで物なのっしょ」「人の命だべっちゃ」と言われて「帰れ」と言われたレスキューの皆さんがたくさんいらっしたんですね。本当に我々心理学者は、皆さんの活動を受けた人々が自分のアイデンティティを取り戻し、生きる活力を持って、まさにレジリエンスを高める社会的支援になったということを何とか証明したいと思って、現在資料所有者の方々、レスキューを受けた方々への聞き取り調査を行っています。このように恐らく非常に素晴らしい活動をやっておられるんですけども、みんなの為になったとか、良かったというだけではなくて、他領域の力をかりて、自分達は何をしたのかという事をきちんとアセスメントというか自覚なされたほうがいいのではないかと私は思います。こういうことは決して日本国内だけではなくありません。一昨年度ユネスコが招集しました私的文書の資料収集に関する国際シンポジウムに参加してまいりました。その中で結局はユネスコとしては、2015年の国連世界防災会議で採択された「仙台防災枠組2015-2030」が定義しましたように、被災をした方々はステーキホルダーであり、それからサイコソーシャルと呼ばれる活動を通してレジリエンスを高めていくということの重要性について議論されています。レスキューがどういう役割を果たすのか。この活動自体は災害科学の中で位置づけて考えた場合、非常に大きな支援の価値をもつと考えています。今日は無料な話で恐縮なんですけれども、是非他領域との連携ということ、広域連携で、ネット同士だけではなく、例えば古代史の方が、松下さんがおっしゃったように、考古学、それ以外の方との連携、そういった力を借りるということを、今後は是非全国的にお考えになれば、この活動の素晴らしさが訴えられると思います。人のためになるということが証明できれば必ず行政は動くし私は考えていますので、是非頑張ってくださいと思います。

吉原：お二人から資料ネットの活動を広い文脈のなかで指摘いただきました。

この議論がなければ出てこないことだと思えます。最後に奥村さんから何かコメントをお願いします。

奥村：最初のモリスさんから言われた全国の大学の在り方ですけれども、これに関しては現代社会の中で歴史的なアプローチをとるような学問領域というのが必ずしもすぐに役に立たないというふうに言われていることが少し前にありました。私のイメージでは数年前が一番ひどかった。それよりは少し最近いろんな反論があって、少しはましになった気がするんですけど、ただ全体としてはそういう領域の学問を今なぜしなければならぬのかということも含めて大学院生が考えなければいけなくなっている。それは全体としては研究者として就職できる枠も少なくなっています。それから博物館や学芸員の皆さんの就職先も狭くなっていたり、場合によっては非常に待遇の悪い場所にしか就職できないことが明らかに存在します。この問題はすぐさま解決できるものではないんですけども、広く歴史文化の意義というものが、本当に社会の中で大事だということをきっちりアピールしていくことが重要であると考えます。災害科学の中でもそうですし、広く日本の科学の技術の中でもそれが大事だということを積極的に言っ

ていかないとダメだということは強く感じています。そのためにはどうしたらいいのかということも大きな課題として強く認識していますので、そのことに資料ネットとしてできるかということもありますけども、全体として我々、特に大学にいる人間はこのような現状を変えていく必要性を強く感じています。

それから2つ目のいろんな連携というのがありましたが、特にやはり社会の中でコミュニティの崩壊であるとか様々な現象が、確かに今言われていますように進んでいて、私も神戸大学で、様々な地域連携で他の分野の方々とも連携しながら、もう一度そういう新しい社会をどうやって作っていくかということを議論させていただいています。結構、多くの研究者がそこに参加してくれることになっていまして、今日は松下さんがそういう神戸大学の地域連携室の仕事もされていて、『地域づくりの基礎知識』というシリーズ本を作らせていただいています。その中で歴史文化をどういうふうに作っていくかというのは、『地域歴史遺産と現代社会』（奥村弘・村井良介・木村修二編、神戸大学出版、2018年）として1冊目を刊行しました。以後のシリーズ本の一つの見本みたいに使わせていただきました。それは我々の歴史文化

に関する課題が地域づくりの中で他分野にくらべてある意味先端的というか、災害の中で他の分野よりも進んでいることもあるのかと考えています。多様な領域で相互共助するようなシステムをどうつくっていくのかということも大学の中ではとても大事なところでして、今日も大学関係者の方々も見えているので、広い意味で人文科学と自然科学との協力の中で何ができるのかというところで私達の活動も位置付けてもらったりとか、積極的にいっしょに事業を取り組んでいくということについても議論をしていただければいいなと思っておりますので是非この点もご支援の程よろしく願いいたします。

吉原：史料ネットの活動について大きく説明していただきました。史料ネットの25年の活動を振り返るという企画のもと、ここではそれぞれの世代の活動を主に担った人達に登壇していただきました。もちろんこれ以外にも、それぞれの世代にたくさん関わった人達がいるということを改めて認識することができました。それではこの第2セッション、第1日目のプログラムを終わりにしたいと思いますので、登壇した皆さんに拍手をお願いします。

ポスターセッション点景



ポスターセッション



じゃんぴん 号外

南伊豆で報告会開催

2019年10月1日

「伊豆の心かしら」

南伊豆を知ろう会

2019年10月1日

山部ヒトリ

肥田家

大宇誌 両竹1

西村慎太郎

山部ヒトリ

肥田家

大宇誌 両竹1

西村慎太郎

山部ヒトリ

肥田家

大宇誌 両竹1

西村慎太郎

NPO 法人歴史資料継承機構じゃんぴん

宮城歴史資料保全ネットワークのいまを見つめる

宮城歴史資料保全ネットワーク 井上瑞葉

事前の対応

宮城歴史資料保全ネットワークとは？

宮城県内の歴史研究者や大学院生、あるいは文化財政に関わる自治体職員などを中心に立ち上げられた、歴史資料の保全活動をおこなう組織のことで。

宮城歴史資料保全ネットワーク 略歴

- ▶2003年7月 宮城県北部地震(7/26)の発生と 宮城資料ネット成立
- ▶2006年9月18日 NPO宮城資料ネット設立
- ▶2008年6月14日 岩手・宮城内陸地震発生
- ▶2011年3月11日 東日本大震災発生
- ▶2019年10月13~14日 台風19号発生

救う - 救済活動 -

- 保全活動 - 守る

広げる - 普及活動 -

事後の対応

史料保全の準備

ボランティア募集

調査報告会や展示会

未来に向けて

シンポジウム・講演会

研究・論文の発表

地域交流

情報発信

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク

西日本豪雨被災資料救出保全活動の成果

岡山史料ネット 上村 和史

はじめに

西日本豪雨発生直後の活動

- 2018年7月初旬に西日本豪雨発生
- 民間所在資料の被災情報は不足
- SNSなどにより情報を募る
- 1000点以上の被災歴史資料を救出(7月下旬)

1. 予防的組織から実践型組織へ

人的交流が大きな意味を持つ

- 2005年の結成以降、関係者が集まる場を設ける例) 講演会、セミナー、第4回研究交流集会など
- 自治体文化財担当者からの情報
- 考古学、自然地理学の専門家からの情報
- 救出につながる

2. 行政との連携

県ネットと岡山ネット

- 岡山県文化財等救済ネットワーク組成(2014)
- 倉敷市真備町大日産での伝書レクチャー
- 岡山県立博物館が情報収集と応急処置
- 岡山史料ネットが修復資金を確保
- 県文化財課が調整を担う
- 三者の連携によって 救出・保全が実現

3. 多様な被災資料の救出

多様な関係者のネットワークを活かす

- 古文書、伝書、公文書、写真、レコード、母子手帳など幅広い救出対象
- 絵画修復士による「大切なもの」修復活動
- 予防的活動が功を奏した

おわりに

作業の現状と今後の課題

- 1月1日、整理修復活動を継続中
- 7割程度処置が完了
- 岡山県文化財保存活用大綱策定(2018.11)
- 未指定文化財の調査・研究について 全般にわたって記述
- 関係者の連携により 大綱の具現化を

岡山史料ネット
〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1 岡山大学文学部日本史研究室内
電話&FAX: 086-251-7442 email: okayamasiryonet@gmail.com

岡山史料ネット

「鹿児島歴史資料防災ネットワーク」の活動

丹羽謙治 (鹿児島大学)

鹿児島歴史資料防災ネットワーク(以後、鹿児島ネット)は、2018年、大学共同利用機関法人人間文化研究機構(国立歴史民俗博物館)と鹿児島大学との連携協定締結を機に、それまでの「準備会」を削除し、新たな気持ちで史料ネットワークの活動を開始しました。近年の活動の一端を紹介します。

鹿児島ネットブログ <http://kagoshima-shiryonet.seesaa.net/archives/20191207-1.html>

【宮崎歴史資料ネットワークとの連携-DIG-01】

「少ない人数で最大の防災を」(佐藤宏之)の方針のもと、鹿児島県に災害があった場合は宮崎ネットが応援に入り、宮崎に災害があった場合は鹿児島ネットが助けに行くということを目指し、DIG (Disaster Image Game) (山内利秋氏の推奨)を通して、災害発生時にその時々でどのように動くべきかをトレーニングするワークショップを、宮崎市(2018年)、鹿児島県出水市(2019年)、鹿児島県鹿島市(2020年)で開催しました。

今回の研究交流集会でデモンストレーションが行われました！

【資料防災に関するフォーラムの開催】

2019年12月7日、「災害から歴史を守るために何ができるか in Kagoshima」を鹿児島大学で開催しました。愛媛県歴史文化博物館・学習員の中野美希子氏、大分県文化課・参事の大分県と市町村間の文化財をめぐる体制についての報告をいただき、および宮崎ネット・鹿児島ネットからの報告を行った後、資料や文化財の防災についての座談会を行いました。ちょうど首里城被災の後でしたので、文化財保護にまつわる様々な意見が出され、鹿児島の問題点がより明らかになりました。

【資料保存・公開の循環をつくる】

南九州は高温多湿の環境にあるため、資料の状態が悪い場合が多く、状態が悪いほど廃棄されるリスクが高まります。資料を可能な限り補修し、目録・目録の作成を進め、所有者や地域に還元する試みを行っています。

(事例1) 南大隅町教育委員会蔵「下村家文書」

大隅半島の先端、鹿児島湾沿岸に位置する南大隅町根占は、鹿児島県で初めて近代的な図書館が設立された場所です。その根占の旧下村家村に伝来する資料を調査するなかで、徳富が甚だしい資料のうち臨時譲渡の圖書を「下村家文書」として発見(高蔵)の名前を見出しました。教育委員会の了承を得て、業者が依頼して読める状態にしたところ、現れたのは、船中の扉裏でもあった白尾友山・白尾南蔵父子が根占の郷土誌(門人)29名に宛てた年始状でした(写真)。白尾家文書は西南戦争などで失われたことがわかっており、破れはあるものの貴重な地域資料と言えます。こうした資料を通じて町の歴史の振り返りを行い、展示や説明会を通して地域への還元を図ります。

(事例2) 敬天舎(鹿児島市)資料のレスキュー

敬天舎は、旧制第七高等学校の校長・若狭正徳の教えを受けた高橋貞三が若狭正徳が組織した修養団体、孝経の義談と徳教の実現を重んじて活動を行って来ました。敬天舎は二松学舎教授の山田幸や政友会の政治家大谷次吉、西元義隆などと交流がありました。特筆すべきは、昭和5年末から6年にかけて起こった城山自動車道路建設反対運動の後となったことです。西南戦争の遺跡の舞台となった鹿児島市城山に自動車道路建設計画が持ち上がる、七高や鹿児島高等農林学校の教員・学生ともに反対運動を繰り広げました。道路は建設されたものの、城山を特別天然記念物の指定に導いた同構らの功績は高く評価されます。その時の資料類を中心に、鹿児島市の近代史を語る上で重要な資料を整理し、保存、公開に向けた作業を行っています。

鹿児島歴史資料防災ネットワーク

熊本被災史料レスキューネットワーク（熊本史料ネット）

2015年4月29日設立 代表・福原健爾（熊本大学永青文庫研究センター長・教授）
事務局 〒860-8555 熊本県中央区東里2-40-1 熊本大学永青文庫研究センター内
TEL：096-342-2304 FAX: 096-342-2272 E-mail: eiseiken@kumamoto-u.ac.jp

概要・設立経緯

- 1) 熊本地震と熊本史料ネットの結成
2016年4月14-16日の熊本地震の発生、多数の未指定文化財が被災
4月23日、熊本県内の大学教員や博物館等の学芸員により、「熊本史料ネット」が結成
- 2) 初期のレスキュー活動
4月23日から史料所有者の活動に応じて被災史料のレスキューを開始
→前提条件には、地震直後の所有者との関係が良好に存在
→熊本県が1998年に作成した古文書等の思惟調査リストの活用
→各地史料ネットからの協働
→公民の種別によるレスキューの発動まで（約3か月）、ボランティアな活動を支援
- 3) 熊本史料ネットと文化財レスキュー事業
7月13日、文化庁・国立文化財機構による「文化財レスキュー」事業が発動
→熊本史料ネットも上記事業の枠内で活動すること
→2017年度から文化財レスキュー事業は熊本県の所有に限定
→以後、専ら熊本県以外の文化財レスキュー事業に協力
→資料整理会では、市市民ボランティアが古文書の目録作成や撮影作業に従事



活動内容の紹介

- 1) レスキュー活動の実績
→2020年1月現在、文化財レスキュー事業による救出（一時持ち帰り）は47件（総点数約39,300点）、うち39件は所蔵者に返却済み
レスキュー史料資料の内訳は、古文書が主、その他は書籍・漆器・陶磁器・民具・武具など
- 2) 熊本史料ネット主催講演会「学んで守ろう 熊本の歴史遺産」
→文化財保存への法的な責任を知るための講演会を継続的に開催中
①「大橋町と本郷寺」被災寺社の歴史と現在
講師：伊藤幸司氏・中野野氏・平川氏 2017年3月
②「阿蘇神社」被災神社の歴史再発見
講師：伊藤幸司氏・和田和紀氏・ヨゼフ・ライナー氏・池田秀秀氏 2017年10月
③「熊本」の歴史地帯に学ぶ 講師：保立直久氏 2017年12月
④「被災史料が語る日本近世史」 講師：福原健爾氏・今村直樹氏 2018年5月
⑤「被災史料が語る井寺古墳」未指定文化財と指定史跡との間
講師：三津野氏・嶋田氏 2018年12月
⑥「シンボリック」文化財の歴史と救済—九州の事例から—
講師：船越真樹氏・有木智理氏・伊藤幸司氏・保立直久氏・山田貴司氏 2019年4月
⑦「古文書の設置を目指して」古文書の機能と役割—熊本と天草から—
講師：定兼孝氏・松野恭子氏 2020年4月（予定）
- 3) レスキュー史料による新たな研究の展開
→文化財レスキュー事業で救出された、「熊本山家文書」「大矢野家甲斐」など
→「熊本山家文書」（熊本藩士山家の家）には、近世初期の熊本忠利の書状が伝来
→一近世の熊本山家は、中世以来の拠点である定山院（山家園）に居住しながら熊本市に奉仕
→地震後に持ち込まれた「熊本山家文書」（旧庄の家）には、国指定史跡井寺古墳関係の史料が存在
→一藩末期における熊本山家の経緯が詳細に判明、考古学研究にも重要な知見を提供
- 4) レスキュー史料の「価値」付けと返却
→救出した古文書23件（約12,600点）のうち、16件を解説・調査対象として作業中
→2019年12月、目録と解説を付した「長野野文書」(熊本藩士山家の家、約200点)を返却
→所有者が古文書の価値を認識するとともに、大々永く保護してもらう願い
→被災文化財を地域に還元する新たな試みとして、熊本から発信
→他方、回収スペース等の事情で、レスキュー史料の返却が困難な事例も多く存在
→今後、熊本県等に対して、公立図書館の整備を促す活動を展開する予定

文責：今村直樹（熊本史料ネット事務局次長、熊本大学永青文庫研究センター准教授）

神奈川地域資料保全ネットワーク

事務局 〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
横浜国立大学教育学部 多和田雅保 研究室
URL https://kanagawa-shiryounet.hatenablog.com/ Mail kanagawa_shiryounet@yahoo.co.jp
電話・Fax 045 (339) 3434 設立年月日 2011年7月30日

2019年の活動について—大都市圏の「資料」と「担い手」—

2019年の神奈川圏は、9月3日に横浜市を中心とした大雨により床上浸水が起きたのを始め、台風15号では高波、台風19号では内河川氾濫や土砂災害により「地域と人」とをささえる「資料」が被災しました。神奈川資料ネットでは、大都市圏の現状をふまえ、人と人とのつながり（ネットワーク）を意識しながら保全活動を行ってまいりました。

人びとの権利や尊厳を守る資料の保全を行う

- これまでの連携に学び、考える
→岡山史料ネットが災害ボランティアセンターに「捨てないで」チラシを置きに行ったことから学ぶ
→災害ボランティアの情報共有会議に災害ボランティアとして参加⇒水損資料の情報がもたらされ、レスキューへ！
→神奈川県文化遺産防災連絡会議で、国立文化財機構・県博覧会・県教委・資料ネットが災害時に、各々が保全対象とする資料の範囲をおおまかに共有。活動の際には情報を共有してもらうとともに、他団体の活動体制に即して、資料保全のための協力を行うことを伝えた。
- 大都市圏における資料の多様性
→生活再建に資する資料の保全から始めて、まちづくりや地域の成り立ちに役立つ資料に気づいてもらう。
→台風15号では、1960年代に横浜市（みなとみらい地区）の都市整備を目的とした都市計画の変更により埋め立てられ、市中心部に散在した工場跡の移転地として造成された、金沢工業団地内で高波により水損した企業資料の初期乾燥を行った。

さまざまな担い手と連携して資料を守る

- ①神奈川県文化遺産防災連絡会議・災害ボランティア等と連絡調整
- ②台風19号関係協議会にお見舞い文と「捨てないでチラシ」【A】をフлакシムリにて送信
→被災自治体の災害ボランティアセンター・文化財所管課・博物館・公文書館・自治体史編さん担当（5市町11件）及び神奈川県災害救援ボランティア支援センター。他、持参2件。
- ③現地調査（9月大雨・台風15号、4回（横浜15号5地区）歴史の古文書所蔵リストと突き合わせを行う）
④水損資料の初期対応（台風15号・19号）
→水損資料の初期乾燥を行う（金沢工業団地【B】の企業、1社（4回・のべ11人参加【C】））
→水損資料の初期乾燥方法をレクチャー（金沢工業団地および川崎市、1社と1事業所（2回・のべ7人参加））
⇒災害ボランティア団体との連携や神奈川資料ネットへの問い合わせにより活動
⇒活動地での災害ボランティアセンターおよび資料保存機関等への事前＆事後報告

企業資料の初期乾燥作業

- 通常業務の復旧が優先と避けるため、作業をほしめたいとの依頼あり。
- 情報機密を考慮。現地へ赴いて作業を行う。
- 貼付や指印がある資料→水損により隠蔽していたため、開くためには乾燥を行い、粘着企業を剥離。乾燥後は記載内容の欠損や貼付の剥離などによる情報の欠損を防ぐため、ドキュメンテーションを行うに留めたこととした。
- 水損行政文書の初期乾燥の手法（段ボールサンド【D】）を用いた。

今後の見通し

- 災害ボランティアの情報共有会議【E】や向上訓練の機会など、日常的に災害対応の一環として資料レスキューを位置づけてもらうことを目標として会議等への参加を継続する。
- 2020年1月中旬現在まで、相模原市緑区（旧津久井郡）では家財を運び出す調整を行っている業者がある状況（土砂災害による道路閉鎖などの都合による）。⇒継続的な対応が必要。

新聞掲載

- 9月22日 神奈川新聞「「広がり」支援の動き 台風被害の余波に工業団地」の一部として
- 9月27日 朝日新聞横浜版「水浸した資料 復元も」（台風15号で被災した 金沢区の産業団地）の一部として
- 11月10日 神奈川新聞「「台風19号 ボランティア続出」の一部として

謝辞

2019年9月以降の大雨や台風による神奈川圏内の被災に際し、全国の資料ネットワークの皆様から応援いただきいただきました。心より御礼申し上げます。また、株式会社 資料保存センターからボランティアを御提供いただきました。ありがとうございます。



熊本被災史料レスキューネットワーク

神奈川地域資料保全ネットワーク

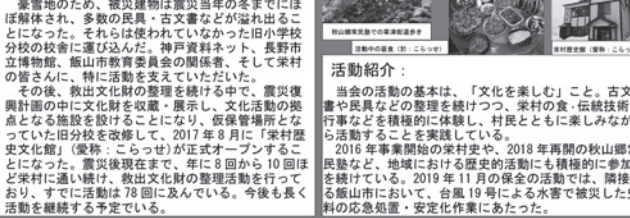
地域史料保全有志の会

2011年4月設立

連絡先：(代表)白水 智 E-mail: ven05021@nifty.com

概要・設立経緯

2011年3月12日、長野県栄村は、東日本大震災の翌朝に起きた長野県北部地震で大きな被害を受けた。同村で長年わたって古文書調査を続けてきた研究会のメンバーを中心に、民具学専門家、長野市立博物館、飯山市教育委員会の関係者、そして栄村の皆さんに、特に活動を支えていただいた。その後、救出文化財の整理を続ける中で、震災復興計画の中に文化財の収蔵・展示し、文化活動の拠点となる施設を設けることになり、仮保管場所となっていた旧分校を改修して、2017年8月に「栄村歴史文化館」（愛称：こらっせ）が正式オープンすることになった。震災後現在まで、年に8回から10回ほど栄村に集い、救出文化財の整理活動を行っており、すでに活動が7回に及んでいる。今後も長く活動を継続する予定である。



私たちは「地域史料保全有志の会」です。長年栄村の歴史を研究してきた方々、被災史料の調査・保存活動を行っている方々を結びます。



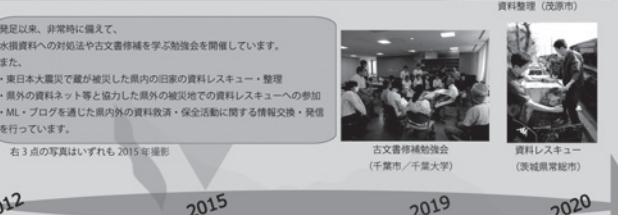
私たちはこんな活動をしています。栄村の歴史文化館（こらっせ）は、2017年8月に正式オープンしました。震災後現在まで、年に8回から10回ほど栄村に集い、救出文化財の整理活動を行っており、すでに活動が7回に及んでいる。今後も長く活動を継続する予定である。

地域史料保全有志の会

千葉歴史・自然資料救済ネットワーク（千葉資料救済ネット）

千葉資料救済ネットは、災害などによって歴史・文化・自然資料への影響が県内で起こった時に、資料救済活動をスムーズに推進するために、2012年3月に発足したボランティア団体です。

1. 災害などで被災した資料の救出と保全
 2. 災害などで被災した資料に関する記録作成
 3. 年に1度の総会開催、上記1,2のために必要な事業（勉強会の開催など）です。
- 資料保全に関心を持つ、さまざまな立場・地域の参加者から構成されており、2020年1月31日現在、4団体106名が参加しています。



発足以来、非常時に備えて、水損資料への対応法や古文書修繕を学ぶ勉強会を開催しています。

東日本大震災で被災した県内の旧家の資料レスキュー・整理
県外の資料ネット等と協力した県外の被災地での資料レスキューへの参加
ML、ブログを通して県内外の資料救済・保全活動に関する情報交換・発信を行っています。
※ 右3点の写真はいずれも2015年撮影

2019年9月・10月の台風・豪雨により、千葉県内では資料・文化財の被災が確認されています。

千葉資料救済ネットでは、
→県文化財課・独立行政法人国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進室等、県内外の機関
→被災地の文化財・博物館行政関係者および資料保護者等と連絡を取りつ、資料保全活動に取り組みます。
全国の資料ネット・企業・個人の皆様からは、多くの支援のお申し出とご助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

被災資料への対応法の助言 被災資料への対応法のログを通じた発信 千葉資料救済ネットワークの位置づけ（概念図）
※ 上2点の写真はいずれも2019年撮影（県内某市）
千葉歴史・自然資料救済ネットワーク
〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区荻生町1-133 千葉大学教育学部小坂研究室宛
電話：043-290-2550 / e-mail: chibasyounet@gmail.com
右の連絡先まで、電話・メールでお寄せください。
http://chibasyounet.blog.fc2.com

千葉歴史・自然資料救済ネットワーク

西日本豪雨災害と広島歴史資料ネットワーク

広島県立図書館におけるボランティア活動

ボランティア活動日 約155日
 ①2017年7月 火・水 10:00-16:30
 ②2017年10月 火・水 10:00-16:30
 ③2017年12月 火・水 13:00-15:00
 ④2018年4月 火・水 10:00-16:00
 ◎ボランティア参加人数 のべ418人
 ※レスキューした被災文書の一覧表

| 品目 | 数量 | 備考 |
|-----|------|------|
| 100 | 100冊 | 被災文書 |
| 101 | 100冊 | 被災文書 |
| 102 | 100冊 | 被災文書 |
| 103 | 100冊 | 被災文書 |
| 104 | 100冊 | 被災文書 |
| 105 | 100冊 | 被災文書 |
| 106 | 100冊 | 被災文書 |
| 107 | 100冊 | 被災文書 |
| 108 | 100冊 | 被災文書 |
| 109 | 100冊 | 被災文書 |
| 110 | 100冊 | 被災文書 |
| 111 | 100冊 | 被災文書 |
| 112 | 100冊 | 被災文書 |
| 113 | 100冊 | 被災文書 |
| 114 | 100冊 | 被災文書 |
| 115 | 100冊 | 被災文書 |
| 116 | 100冊 | 被災文書 |
| 117 | 100冊 | 被災文書 |
| 118 | 100冊 | 被災文書 |
| 119 | 100冊 | 被災文書 |
| 120 | 100冊 | 被災文書 |



中世甲冑のレスキュー (広島市安芸区瀬野)

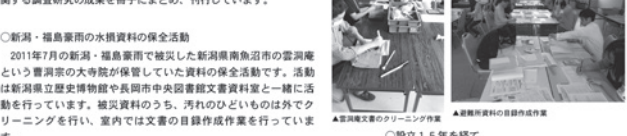
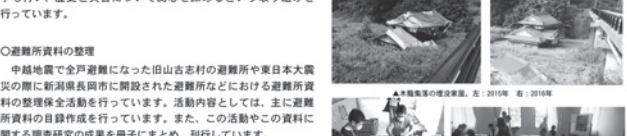
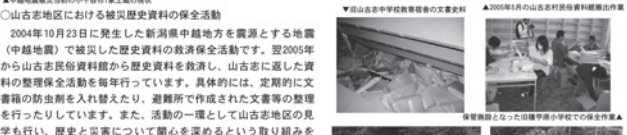
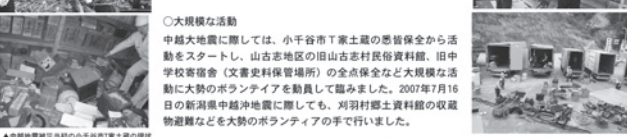
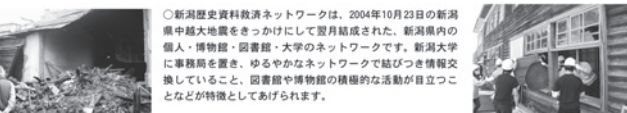
被災した甲冑 瀬野町で発見された中世甲冑のレスキュー活動の様子。甲冑は貴重な文化財であり、被災した甲冑のレスキュー活動の様子を写真で紹介します。



広島歴史資料ネットワークの概要

| 項目 | 2018年度実績 | 2019年度実績 |
|----------|---|---|
| 登録団体数 | 12団体 | 13団体 |
| 登録個人数 | 150名 | 160名 |
| 登録文書数 | 1,000冊 | 1,200冊 |
| 登録写真数 | 500枚 | 600枚 |
| 登録資料数 | 1,500冊 | 1,800冊 |
| 登録資料価値 | 約100万円 | 約120万円 |
| 登録資料種類 | 文書、写真、絵巻、書札、日記、手紙、日記、手紙、日記、手紙 | 文書、写真、絵巻、書札、日記、手紙、日記、手紙、日記、手紙 |
| 登録資料保存場所 | 広島県立図書館、広島市立図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館 | 広島県立図書館、広島市立図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館 |
| 登録資料保存方法 | 紙質の劣化防止、湿度・温度の管理、防虫剤の使用、防虫剤の使用、防虫剤の使用 | 紙質の劣化防止、湿度・温度の管理、防虫剤の使用、防虫剤の使用、防虫剤の使用 |
| 登録資料保存期間 | 10年 | 10年 |
| 登録資料保存場所 | 広島県立図書館、広島市立図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館 | 広島県立図書館、広島市立図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館、広島市立中央図書館 |
| 登録資料保存方法 | 紙質の劣化防止、湿度・温度の管理、防虫剤の使用、防虫剤の使用、防虫剤の使用 | 紙質の劣化防止、湿度・温度の管理、防虫剤の使用、防虫剤の使用、防虫剤の使用 |
| 登録資料保存期間 | 10年 | 10年 |

新潟歴史資料救済ネットワーク



広島歴史資料ネットワーク

新潟歴史資料救済ネットワーク

ふくしま歴史資料保存ネットワーク

当ネットワークでは例年、原子力災害被災地での文化財レスキュー、震災遺産の収集活動などについて紹介してきましたが、今回は2019年10月の台風19号被害について発表いたします。

伊達市梁川では堤野川の氾濫により、旧梁川町史編さん室が被災しました。資料は文化財課や地域住民の手で搬出され、県などの応援で応急処置が進められています。

本宮市では安達太良川の氾濫により、本宮市歴史民俗資料館が被災しました。資料は一時保管場所に搬出され、古文書類や写真類、考古遺物、民具など多様な資料の保全が進められています。

他に田村市でも、大滝根川の氾濫で文化センター収蔵室に水が流入し、県の呼びかけで応援が入りました。いわき市などでも独自に対応した事例が伝えられています。県全体では把握できていないところで多くの資料が被災し、残念ながら処分されたものと思われる場合があります。

ふくしま歴史資料保存ネットワーク
<https://www.facebook.com/fukushima.shiryu.net/>
shiryu-net@foc.fukushima-u.ac.jp

空き家と資料保全活動

第6回全国史料ネット研究交流集会 (2020年2月8日-9日)

松山 真弓 (宮崎歴史資料ネットワーク)

はじめに
 災害のみならず、資料保全の対象となる歴史的な建築物の解体が進行しています。特に空き家 (法令上は「空き家」と表記) の増加は、人口減少・少子高齢化社会における問題と密接な関係があり、歴史的関係のある建物とそこに所在する様々な資料の喪失に繋がっています。

空き家と我が国の課題
 ・人口の減少、特に生産年齢人口が減少している中で、歴史的建築物の空き家化は解決が難しい問題になっている。
 ・歴史的な価値が認められて再生利用が行われている建物は一部であり、費用・税制の問題から解体も困難になり、放置状況も多い。

空き家と税制
 空き家がなくなる原因
 ○取り壊すお金がかかる
 ○土壌の固定化・汚染
 ○老朽化や災害被害等により危険性が高まっている
 ○重要文化財指定
 ○重要伝統的建造物保存地区指定
 ○所有者の高齢化
 ○収入が年々少くなる
 ○相続税の負担
 ○所有権の放棄
 ○解体費用の負担
 ○解体費用の負担
 ○解体費用の負担

空き家と資料保全活動
 資料保全活動は、「空き家」や解体の可能性のある建物がある物件を再評価させることで、歴史的価値は、建物の保存につながったり、解体しても一時的に再活用させる可能性がある。反対に建物以外の歴史資料を保存するための工夫も必要だろうか。

ふくしま歴史資料保存ネットワーク

宮崎歴史資料ネットワーク

第3セッション

史料ネットと震災資料の25年



登壇者

喜田 浩一
(河北新報社)

田中 洋史
(長岡市立中央図書館文書資料室)

跡部 史浩
(歴史資料ネットワーク)

佐々木 和子
(神戸大学)

司会

奥村 弘
(歴史資料ネットワーク)

川内 淳史
(宮城歴史資料保全ネットワーク)

歴史資料ネットワークでは、阪神・淡路大震災当時から、震災資料の保存・活用についての取り組みを進めてきました。それ以後、各地でも震災資料に関わる実践が積み重ねられてきています。このセッションでは、東日本大震災被災地における災害関連公文書の保存の問題や、中越地震の震災資料のほか、阪神・淡路大震災の震災資料の利用事例について紹介していただきます。そのことを通じて、様々な震災資料の収集や保存、利用、公開をめぐる課題や方法について意見を交換します。

第3セッション 1  喜田 浩一

私が公文書の問題に興味を持つようになったのは5年ほど前のことです。東北大学名誉教授の入間田宣夫先生に取材をし、その聞き書きを5回連続で掲載したのですが、その過程で山

形県史編さんにご関係の方とお話する機会がありました。その際、山形県にはまだ公文書館ができていないため、県史で収集した資料の保管が課題となっているので取材をしないかとお誘いを受けました。当時山形県は、公文書センターという小さな資料保存施設が開設されたばかりでして、そこを見学したのが、私にとって初めての体験でした。

当初は、東北にある公文書館や公文書センターの整備状況、公文書管理条例の制定状況取材しました。東日本大震災に関連した文書がどの程度残っているのか不明な点が多いという話を聞き、自治体にアンケート調査したことがあります。また、私は昨年宮城県の大崎市というところに転勤しておりましたが、そこは台風19号による被災地でした。現地では様々な行政批判が広がっていましたが、そのなかに、1986年に発生した水害の教訓が活かされていない、という声もあちこちで聞きました。取材しておりましたら、過去の災害に関する重要文書が保存されていなかったことが分かってきました。

本日は、災害公文書の保存というテーマでお話いたします。自治体は、大災害時に、災害対策本部の記録、避難所運営や都市計画などに関して多くの文書を作成しますが、そうした文書は歴史資料として保存されるべきですが、自治体職員のなかでそれらを受け継ぎ、教訓として活かしていかなければならないという認識が弱いのではないかと感じています。2年ほど前、東日本大震災で被災した岩手・宮城・福島の沿岸部37市町村にアンケート調査を実施しました。その結果、半数近くの16市町村が震災関連文書に関して特別な措置をとっていないこ

とが分かりました。震災関連文書の保存に向けた動きが進まないなかで、私が感じたもう一つの疑問としては、議会でそうした資料の保存について議論されたことをほとんど見たことがないということです。後で申しますが、行政に関することについて議会に働きかけるには、請願という手段があります。請願をすると、議会では真面目に議論してくれます。歴史公文書の保存についても請願という手段が広がっていけば、公文書館の設置や公文書管理条例の制度、さらには被災資料の問題なども含め自治体が資料ネットと連携していくきっかけになるのではないかと考えています。

まず、東北地方には公文書館が少ないと言われていますが、現在設置されているのはこちらに示した7ヶ所です。このなかで、秋田県公文書館はかなり整備されており、アーキビスト的な職員も配置されており、現用文書の保存年限が切れた際の選別など一定の権限を持っている公文書館です。対照的に、宮城県公文書館は、宮城県庁のほうが文書管理の権限が強いため、公文書館としての機能が十分に発揮できていないと思います。青森県公文書センターと山形県公文書センターは、2011年に公文書管理法が施行されたことを受けて設置されたところです。これらは、すべての歴史公文書を扱うには至っていませんが、昭和期のものなど、30年保存の年限が切れたものを暫定的に保管し、昭和50年頃以前のものから公開することを始めたところです。秋田県の大仙市アーカイブズは、空き校舎を再利用して開設され、公文書と民間資料を対象とした大規模な施設です。同じく秋田県の横手市公文書館は2020年春開館予定です。また、公文書管理条例については2014年の秋田市がありますが、山形県でももうすぐ施行されます。なお、ここに載せていませんが、岩手県大槌町が2018年に条例を施行しています。その背景には東日本大震災後の対応が影響しております。大槌町は津波によって役場の庁舎がすべて水没し、町長以下多数の職員が亡くなりました。その後町役場で聞き取り調査を行い、当時の状況につい

て調べたのですが、その聞き取り調査の資料が廃棄されていたことが判明して大問題となり、今後こういったことがないようにと、条例が施行されました。ところが条文を見てみると、かなり骨抜きになっていることがよく分かりました。たとえば、第1条には条例の目的として、公文書館法の理念に基づいて公文書を「町民共有の知的資源」として書いてありますが、その下を見ていくと保存年限を文書で定めるとか、行政文書は保存年限をきちんと定め、その年限が過ぎたら廃棄すると書いてあり、本当に残そうという気持ちが条文から見えてきません。だから条例があればいいというものではないというような実態です。

東日本大震災に関しては、昨年の1月に沿岸部の37市町村へ電話で震災関連文書の保存に関して取り組みをしているかを聞いてみました。最初は多くのところで警戒されて、それほど関心が高くないのであれば記事を書くのを止めようかと思っていました。それでも、電話取材で調べているうちに、これまで把握していた仙台市のほかに、宮城県女川町と多賀城市が歴史公文書の選別基準を策定していることが分かりました。そこで、今度は電話取材ではなく、アンケート用紙の送付や可能なところは現地へ赴いて調査を行いました。岩手県の大槌町や釜石市あたりまで車で出かけたりもしましたのでかなり疲れましたが、約1ヶ月半の間に全市町村から回答をいただくことができました。ちなみに、後になって全史料協でも同じようなアンケートをしていることが分かりました。そちらは関東を含めた189市町村だったと思います。

アンケートを通して、公文書管理に関し、県の指導力が弱いことが分かりました。そのため、市町村が各自でその基準を判断しているようです。ただ、福島県双葉郡の双葉町、大熊町、富岡町あたりは、役場の職員同士が連携しているようです。実際に聞いてみると、福島県庁がこの問題に関心をもって来ていないので町がやるしかなく、特に全町避難の影響で、町自体がアイデンティティを回復するために、町として公文書保存の問題を何としても取り組まなくてはならないという強い意識があるようです。

また、宮城県女川町は特殊な事情があり、女川原発の

関係で町の財政は比較的安定していました。そのため、文書保存について第三セクターに一部委託をされていて、その第三セクターが震災後に文書保存を提言し、その提言に基づいて歴史公文書の選別基準をつくった。財政的背景からみると、女川町は特殊事例のように見えますが、一方で多賀城市のように独自に歴史公文書の選別基準を策定しているところもあります。その他、東松島市は急遽重要な文書を保存するよう通達したようですが、16市町村については特別な措置なしという回答でした。このアンケート調査の結果を踏まえてこちらの記事を書きました。その際には宮城学院女子大学の平川新先生からコメントをいただきました。

次に、水害の話に移りたいと思います。2019年4月に宮城県大崎市に異動しました。大崎市には吉田川という川が流れており、10月12日から13日にかけて宮城県を通過した台風19号では、丸森町に続いて被害が大きかった場所になります。吉田川は、品井沼という大きな沼に注ぎ込んでいました。その沼だったところを仙台藩が干拓して水田開発を進めていきました。そのため、吉田川周辺は水害に弱い地域でして、これまでに一番大きかったのが1986年に発生した8・5豪雨という水害です。現在は合併して大崎市になっていますが、8・5水害の際、鹿島台町は町の半分近くが水没し、周辺町も大きな被害を受けていました。今回の台風19号では志田谷地という地区で185世帯が水没しましたが、その地域に取材に行くと、職員に対する不満がかなり大きかったです。33年前の鹿島台町役場の時は、台風が来る前から職員全員に招集がかけられ、町長以下職員が腰まで水に浸かりながら安否確認をしていたのに、今回の鹿島台総合支所の人達は人手が足りず、現場に足を運ん



でないといった怒りの声がかかりありました。8・5豪雨が旧鹿島台町にとって忘れてはならない大きな災害であったことが分かりますが、では松島町や大郷町、現在の大崎市に災害対策本部の記録や水害対策の資料などが残っているのかどうかを確認するため、昨年情報公開請求を行いました。水害に強い町づくりというのは、元々建設省による線としての河川対策だったのですが、8・5豪雨をきっかけに面的な対策にも広げようということになり、道路が2番目の堤防代わりになる二線堤バイパスが造られたりしました。町の方でも国と連携したモデル事業として始めていたのですが、そうした文書が残っているか開示請求したところ、松島町と大郷町に災害対策本部の記録が残っていることが分かりました。ただ、残念ながら大崎市には文書が保存されていませんでした。その背景を探ると、全国的にも同様だと思いますが、一つは鹿島台町が合併前に庁舎の建て替えをしております。その際に古い文書、保存年限が切れている文書をどこかに移動させて、そこで捨てられている可能性が高いのではないかと思います。また、もう一つの可能性としては、市町村合併すると町役場時代の文書が処分されてしまうことがあります。そのため、大崎市に合併された際に処分されたとも考えられます。もっとも、ここでは大崎市をやり玉に挙げましたが、松島町・大郷町でも水害に強い町づくりの資料は保存されていませんでした。その意味ではどの自治体も完全ではありませんし、ほかにもまだ問題はあります。

取材を進める中で、歴史公文書を残すことについて、必要性自体は認識しているが、具体的な方法が分からないとか、人材不足・予算不足、または保管場所の問題などの声が多く確認されました。また、文書担当課の権限



が弱いという実態も出てきました。各部署の人たちが各自で文書保存年限を決めてそれぞれで廃棄するといったように、文書担当課の権限が行き渡らない問題がかかり大きいです。さらに、教育委員会などは市町村からの権限が及んでいないので、実態については私のアンケートからは見えてきません、そのため、まだまだ調べていくことが多いかと思っています。

なお、先ほど申しました請願ですが、昨年大崎市役所で手話言語条例のような障害者のコミュニケーションを促進する条例が制定されました。これは、全国のろうあ者の団体が全国の都道府県や市町村で請願運動を進めている長年の取り組みが広がっており、現在全国に300以上の条例が制定されています。こうした請願を行うと、議会の方でも結構真面目に議論をします。同じように、歴史公文書についても、地域の歴史を後世に伝える取り組みを進めるべきという請願をすれば、どの政党としても反対のしようのない提案であると思いますので、そうした請願をするのが重要なのかと思います。もちろん、紹介議員が必要なので、そうした議員が誰かを確認する必要があります。

最後に、岩手・宮城・福島3県でいえるのは、県と市町村の文書担当者や研究者が繋がる連携組織が足りないと思っています。秋田県ではつながりがあると言われていますが、そうした連携の組織をつくって市町村の文書担当課の役割を強化していくことが重要ではないかと感じています。

川内淳史：ありがとうございました。

喜田さんは東日本大震災後、今のようなお話の経緯で、宮城県内ですとか東北地方の公文書について調査、取材活動をされて、最後そうした取り組みが弱いことに対して議会請願への働きかけというところの提案をいただきました。先程喜田さんが震災資料に関して、まあ震災資料と被災資料を4つに分けて整理をしていただきましたが、今日は喜田さんのこのセッションでいきますと4つのうちの右側の災害公文書及び災害資料、主に民間とありますけれども、こちらについてこのセッションでは主に議論していくという形になりますけれども、右側の2つを含めて震災資料、災害資料とかと私達は呼んでき

ているわけですが、震災資料、災害資料と資料ネットの活動の関わりということについて次に佐々木さんに講演いただくんですけども、その前に少し奥村さんよりこのあたり、資料ネットと災害資料との関係ということで少しコメントをいただきたいと思っています。

コメント

奥村 弘（歴史資料ネットワーク）

喜田さんのお話にありました東日本大震災の状況は、私たちの取り組みの実情を象徴していると考えており、まずその状況について共有しておきたいと思います。大規模地震災害時の状況をあらわす資料を私たちは震災資料と呼んでおりますが、これらの保存に向けた取り組みは、歴史資料ネットワークのなかで被災歴史資料保全とともに重要な柱となる活動でした。

後ほど佐々木さんからお話があると思いますが、阪神・淡路大震災時は多くの市民の方々により早い時期に記録保存に向けた活動が始まっています。また、図書館をはじめ様々な分野のネットワークが形成されたこともあり、全体的には私たちがこの問題に関わる以前から、市民レベルでの活動が広がっていたことが特徴です。歴史資料ネットワークとしては、被災資料の保全活動が少しずつ収まってから、この問題に取り組みました。1995年5

月頃から議論を進め、11月22日に運営委員会を開いて自治体等への働きかけを決定しました。その後、21世紀ひょうご創造協会が県の議会資料と阪神・淡路大震災資料収集に関して意欲があることが分かり、そこに働きかけをしていくこととなります。翌年から21世紀ひょうご創造協会を含めた関係の方々と進め方について相談していき、1月17日に「震災記録保存を考える研究会」、2月23日には創造協会と共催による「震災資料の保存と編さんに関する研究会」を開催し、そこで資料の保存のあり方を考えていきました。12月に入ると、創造協会は佐々木和子さん等3名を嘱託として積極的に震災資料の収集活動を開始しました。歴史資料ネットワークによる被災資料の巡回調査がこの背景にあり、当時「パトロール」と呼んでいた、市民の方々と話しながら各地域で被災した資料の保全活動をしていました。この形がおおよそできあがっていましたので、そのイメージをもとに震災資料収集についても積極的な活動が開始されたと考えています。この後、創造協会との関係を基軸としながら、継続的に震災資料への取り組みが始まっていきました。創造協会での事業は、阪神・淡路大震災記念協会に引きつがれていきます。その以後はそことも協力しながら議論を進めていきました。以後歴史資料ネットワークは、阪神・淡路大震災と向き合っております。



私は1996年12月から震災資料の収集・保存の仕事に関わってきました。これには、歴史資料ネットワーク（以下史料ネット）と大いに関係があります。史料ネットと連絡を取りながら、史料ネットの被災資料の保全ともう一方の柱となる震災資料の保存の立場から行ってきました。

史料ネットとの出会いは、設立を伝える新聞記事です。当時史料ネットの連絡先は尼崎市立地域研究史料館だったので、講師をしていた高校の公衆電話から電話したことを覚えています。その後、1996年4月頃に、史料ネットの立場で震災関連の資料について兵庫県の相談にのっていた芝村篤樹先生から、震災関連の資料収集と記録集編さんについて手伝わないかというお話がありました。私はその意義を理解したからではなく、これまで歴史を勉強していましたので、むしろ記録集の編さん事業に興味関心がありました。そのための資料収集かと思いました。また、一番魅力的に思えたのは、10年間の事業という話でした。私は非常勤講師をしていましたので、毎年3月に次の年の仕事の心配をしていました。10年間も仕事が続くのなら、これは関わってもいいかと考えました。そういう状況の中、第2回震災資料の保存と編さんに関する研究会に参加しました。1996年10月13日のことです。

第1回研究会には参加はしていませんが、第1回で原資料を残すといった資料収集の方向性は決まっていたようでした。また、方法として、「資料は人についでくるので、人のルートを辿る」などが話し合われ、これには人がいるということになって、人を雇おうということになっていました。

この2回目の研究会では、歴史学だけではなくて、社会学の岩崎信彦先生、当時神戸大学文学部の社会学の先生ですが、被災地の状況をどういうところで、課題があって調査しているのか、非常に具体的な震災資料の一

覧を出されました。歴史学の先生はやはり過去の出来事で何が必要かということが分かりやすい。一方、社会学は今の課題に立ち向かう。現在進行形の震災では、社会学の知見が必要でした。研究会では岩崎先生から現代都市を直撃した災害で必要な資料と当時思われるのは、こういう種類のものであると提示されました。具体的には、緊急対応では、その地区で人々がどのように死んでいったか、被災状況の把握、避難、援助の様子はどうかであったのか。そして応急対応、復旧については、仮設住宅内での生活の総合的な把握が必要だということです。それから復旧、復興までで、住宅再建、あるいは復興まちづくりについての調査が必要だということに、具体的に一覧をあげて説明していただきました。そして、今出てきたものに一つずつ細かい、内容、例えばどのように死んでいったのかということには住宅被害、建築倒壊の検証図であるとか、体験記だとか、調査だとか、細かく

阪神・淡路大震災

第二回震災資料の保存と編さんに関する研究会のお知らせ

阪神・淡路大震災の発生からすでに1年9ヶ月が過ぎようとしています。この震災の中で生まれた様々な記録や資料は、この災害の歴史と教訓とを後世に伝えるべき貴重な財産であり、これをいかに収集し、保存していくかは今日の私たちに課された課題であると言えます。

すでに去る2月23日、阪神大震災対策歴史学会連絡会（歴史資料ネットワーク）と、(財)21世紀ひようご創造協会との共催で「第一回震災資料の保存と編さんに関する研究会」を開催し、歴史研究者や史料保存機関、自治体関係の方々を交え、震災記録保存に関する意見の交換をおこないました。しかし、他方では、まだこうした記録がともすれば散逸しかねない状況や、あるいはこれを生かしての総合的な都市研究が進展していない現実があるのも事実です。

そこで、第一回の研究会の成果を踏まえ、さらなる議論の発展を期すべく、下記の要領で第二回目の研究会を開催したいと思います。たくさん関係諸機関、個人のご参加がいただければ幸いです。

記

| | |
|-----|--|
| テーマ | 「震災資料保存の課題と方法」 |
| 日時 | 平成8年10月13日(日)午後1時30分～午後5時 |
| 場所 | 神戸大学 文学部 視聴覚教室 (阪急六甲駅、JR六甲道駅、阪神御影駅下車→バス36系統鶴甲団地行き 神大文理学部前下車→神大文理学部キャンパス内ロータリー奥つきあたりの建物1階) |
| 主催 | (財)21世紀ひようご創造協会 阪神大震災対策歴史学会連絡会（歴史資料ネットワーク） |
| 後援 | (財)あまがさき未来協会 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会 近畿部会 |

【報告】

- ・小森温児氏（大阪商業大学商経学部教授）
- ・岩崎信彦氏（神戸大学文学部教授）
- ・小田康徳氏（大阪電気通信大学教授）
- ・北岡孝統氏（(財)21世紀ひようご創造協会）
- ・中村義人氏（(財)あまがさき未来協会）

【ディスカッション】

- ・報告者ほかによるパネルディスカッション
司会－芝村篤樹氏（桃山学院大学教授） 奥村 弘氏（神戸大学文学部助教授）

第2回震災資料の保存と編さんに関する研究会

必要だと思われることが説明されました。その時にこういう議論をしていったような記憶があります。歴史学と社会学が一緒になって、さらに行政が一緒になってこういった早い時期に一緒にやっという議論を始めました。

人の雇用については、2月に研究会があって、4月に誰を雇おうかなという話が始まりました。その時に雇おうということになったのですが、私が実際に雇われたのは12月です。12月になったというのは、なかなか予算がつかなかったからです。話が進まないで、どうなったのかなと思っていたところに、10月の研究会を知りました。何をするのかわからないけど、一度顔を出してみようかなということで、この研究会に参加しました。これが、私が震災資料に出会った最初です。この後いろんな形で25年も関わることになりました。

震災資料収集保存事業は、ボランティアグループや図書館も行っていました。その中で震災文庫が一つの流れとして大きいですが、本当に様々な分野の人が行っていました。そういった中で、一次資料から集め、時代や地域をこえて震災を検証し、「教訓」を発信できるような資料保存をやっというのが兵庫県の行った震災資料収集保存事業でした。私は、なぜこの県の事業が続いたのかということがとても不思議に思っていました。というのは、先程から言っていますように、この話は何をやるかまずわからない。そして誰が続けていくのかわからないという状況で始まりました。誰にもよくわからない事業だったのです。

嘱託は3人雇用されたのですが、毎年やはり春になると次はどうなるのか、予算がつくのかどうかわかりませんというような状況でした。そして県の外郭団体である21世紀ひょうご創造協会から被災10市10町(当時)で作った阪神・淡路大震災記念協会にこの事業は移りました。後で見てみたら、それはその通りなのですが、中で働いている人間には、組織が移るらしいけど、この事業自体移るかどうかわからないというような話を聞いていました。一体どうしてこのような事業が続いたのだろう、こういう流れがどうしてできたのだろうかということはずっと不思議でした。創造協会の職員から、一緒に仕事をしていた人ですけれども、その人は10月に県が

この仕事を始める、震災の資料を集める担当として、異動してきた人です。最初は本を集める仕事、報告書を集める仕事だと思っていたのに、芝村先生の話の聞き取りする中で、一次資料が重要だ、それを集め、保存していく必要があると思うようになったという話を聞きました。一体何を集めるのだろうかと言いながら始まり、本を集めるはずが資料保存に繋がっていったところです。この流れに大きく関わったのが、史料ネット、歴史研究者の人達だと私は考えています。

1996年の嘱託採用の時に最初に指示されたのが、旧避難所のリストをもらって、震災に関するものを何でも収集してこいということでした。旧避難所のリストというのは、決まった形ではなくてバラバラのといいますが、表によって全く違う形式で、急遽埋めたような手書きのものを付け加えられたようなリストでした。そのとき上司の地域情報センター長(創造協会が震災関連事業を担当したのが地域情報センター)から言われてずっと心に残っていますのが、「行政批判の資料こそ必要だから、すぐに公開できないかもしれないが、そういったものを集めてきてください。そういうものこそ必要な資料です」という言葉です。創造協会は、県民会館に事務局がありました。そのころ、震災の影響で、まだ修理している最中で、最上階のいわゆる宴会場のような所に、宴会テーブルのような机が置いてあって、そこで皆さん仕事をしているという状況でした。その一角のテーブルで、最初に集まって、避難所リストをもらったという場面が、とても心に残っています。

その時に一緒に採用された嘱託ですが、社会学の人が2人、それから私でした。その時のメンバーは、「震災特例」ということで、試験も何にもありませんでした。社会学の先生の推薦でまちづくり協議会の調査をしていた大学院生、避難所連絡会で一緒に活動していた大学院生、この人は連絡会からの推薦という形です。私は歴史学出身。この時に本を集める仕事から、いやいや一次資料が大事だということになり、現在震災資料保存活用事業につながっている。歴史研究者が、行政に声をかけて入り込んでいったということが一番最初になっているのかなと思います。そして兵庫県の災害公文書、神戸市の震災行政文書の整理にも繋がっていくということです

から、この時の最初の出会いが、やはりこの震災資料の25年を非常に大きく左右していったのかなと思います。

これが当時のチラシです。このチラシだけ持って何でもいいから集めてこいというのが最初です。先ほどのスライドで、メンバーの担当地区として、灘区、阪神地区だとか書いていましたけれども、自分達の活動の中で、ある意味3人で勝手に決めた地区割りです。12月の会議で初めて会ったメンバーで、「どうしようか」と話し合いました。「じゃあ地区割でしようか」ということになりました。一人社会学の人は、灘区、東灘区で調査をやっていたから、そこが強そうだからそこを担当に。中央区の避難所で活動していたから中央区、兵庫区を中心に動いてもらおうともう一人の社会学の人。私は実際に暮らしていたのが芦屋だったので芦屋担当というように、勝手に地区割りを決めました。だれからも指示がない。1週間に1回くらい、事務局に成果を持ち寄りました。何でもいからというのが良かったのかなと後から思います。何もわからない時に、何でもいから行って来い。時々報告をするという形だけで、何を集めるのかからものすごく自分達で考えなければならない。また、震災資料の範囲をせばめることなく、幅広く考えるようになったのかと思います。また、それぞれの専門分野が異なっていることから、何を大切にしたいと思うのかも少しずつ広がったのも良かったと思います。

今回、このような話をするのに、少し手持ちの資料を見直しました。すると、1996年5月付けの震災資料の収集マニュアルという芝村先生の名前の2枚のレジュメが出てきました。どこで配られたのか全然覚えていません。そこには、収集対象となるのは今回の地震の実態、被害の実態、地震への対応の実態、被災者の生活の実態、実行計画事業の経過と書いてあります。私は、早い時期に、この資料保存では、被災者の生活の実態を明記されているのに、非常に感銘を受けました。生活実態となると、本当に幅広いものになる。これまで地震の資料となると、地震の規模や、震度、被害だけに焦点をあてがちになるのが、それだけではなく、災害によって変わっていく生活実態にまで目を注ごうということになったのです。これを知って、私自身がこの被災者の中で生活していたので、身の回りのものは何でも関係すると気づきま

兵庫県からのお願い

阪神・淡路大震災に関する資料・記録を生かしましょう！

震災・復興に関する資料・記録の価値って何？

阪神・淡路大震災とその復興に関する資料・記録は日本の歴史に初めての大都市直下型地震の経験をするものであり、震災から学んだ貴重な教訓として地域や時代を超えて後世に残していかなければならない私たちの財産です。

震災・復興に関する資料・記録ってどんなもの？

本やパンフレットに限らず、個人のメモ類や体験記、身近で撮られたビラやチラシ類、避難所での壁新聞やノート、町の集会所を記録したノートやメモ類などといった、通常はあまりにも身近にありすぎて「資料・記録」とは思わないようなものも「震災・復興資料・記録」です。

これらのものは被災した人々の生活や、当時の状況をしるす貴重な「生の情報」として後世に残していく価値を持っています。

震災・復興に関する資料・記録を集めています！

兵庫県では財21世紀ひょうご創造協会に委託して、これら資料・記録の散逸を防ぎ総合的に永久保存するとともに、震災の記憶を風化させず、兵庫県、被災市町、県民ごぞつての創造的復興の糧となる「開かれたデータベース」として幅広く活用できる仕組み作りを進めています。

このため、市町、大学、企業のほか各種団体やボランティアグループ等へ資料提供を依頼するとともに、広く一般県民に広報し、資料・記録等の提供を呼びかけています。

財21世紀ひょうご創造協会って何？

財21世紀ひょうご創造協会とは、兵庫県が「あすの兵庫をひらく新しい地域社会づくりの推進」を基本方針として産・官・学の協調による地域レベルのシンクタンクとして昭和47年に創設した財団法人です。

県、大学、企業、団体等と連携して様々な調査研究を実施したり、地域づくりに関する情報提供を行っています。

このたび、阪神・淡路大震災とその復興に関する資料・記録の収集・保存に関する業務を兵庫県から委託を受けています。

兵庫県事業チラシ

した。子供がもらってくるような学校の連絡チラシ。これは、地域や学校によって、本当にそれぞれ学校の実情に応じて、いろんな学校運営をしているので、災害時に必要な学校対応の資料になります。被災程度がひどくなくても、震災に関連する資料があることに気づかせてくれました。

また、実際に訪問しての資料との出会いについてですが、避難所リストをもらっていますので、「資料はありませんか」と飛び込みで訪ねました。断られることが多いのですが、まず「資料、そんなのない」と言われました。そのうち「じゃあ、その日のお話だけでも聞かせてください」と話を進めてみると、皆さん案外話をして下さる。そしてその時に「ちょっと待って。あの話2月やったかな、3月やったかな」という形で、何か出してこられるようなことがありました。そういう時に、「あ、そういうものを私達は集めているんですよ」というような話をすることができました。

この時の経験が、後に続く大規模な調査事業の時に生かされました。その時には収集事業とせず、調査事業

にしました。同時代、同じ現代の資料を集めるには、まず名付けることがスタートで、名付けたことによってそれが資料ということに意識してもらう必要がある。だからまず調査からやって、次いで収集につなげていく。始めから収集を目的にしては集まらないということがわかってきたからです。

何回か史料ネットの方や創造協会の担当者と一緒に、研究会を開いていた記憶があります。そういった中で、活動報告を行い、「ああ、自分達がやっていることは、間違っていないようだ。いやそれでいいんだな」と確認にもなりました。またいろいろ新しい示唆をいただきました。一緒に相談が出来る伴走者がついていたということが、私はこの事業の大きな支えになっていたと思います。1998年4月に阪神・淡路大震災記念協会に移った時に、約1年の伴走者の経験が正式な委員会に格上げされました。「震災資料の分類・公開の基準研究会」と

名付けられた委員会に、芝村先生が副委員長として入られました。その作業部会という形で、奥村先生などの、若い先生方に実質的なサポートに入っていただきました。この作業部会は、また、2000年から行った厚生労働省緊急地域特別交付金を活用した、兵庫県の緊急雇用就業機会創出事業で、1回雇用期間6か月で100人の調査員によって2年間調査を行う大規模調査の相談役をやっていただきました。本当に小さな種が芽を出すまでに少し伴走車というか、一緒に育ててくれる人がいて、そして正式な委員会になって育っていったと思っています。県というか自治体関係では、そういった正式な委員会になっていったのは非常に意味が大きかったし、その前に兵庫県が1995年5月の復興計画の中に、この記録保存を置き、そこに史料ネットの先生方が関わったというのが、継続の基本になっています。以上です。

第3セッション 3  田中 洋史

新潟県中越地震が発生した2004年10月23日から15年が経過しました。当時の私は、長岡市立中央図書館文書資料室（以下、文書資料室）に嘱託員として勤務していました。ちょ

うど長岡市制施行100年を迎える年で、その記念誌の編集業務を担当していました。発生当日も編集会議の資料づくりのため職場に残っていたことを覚えています。

文書資料室の取り組みは、地震発生当初から「歴史的資料の救済」と「震災関連資料の収集」を二本柱に掲げていました。ただ、実際には前者の「歴史的資料の救済」（いわゆる資料レスキュー）の緊急性がどうしても高く、最初の3年間はそちらに忙殺されました。

ところが、中越地震からある程度の時間が経過してくると、まず報道機関からの問い合わせが大きく変わってきました。当初は、資料レスキューに対する関心が高く、「何が見つかりましたか?」、「何を救出しましたか?」という取材が多かったのですが、3年目あたりから「震災の風化」という言葉が聞かれるようになり、「震災関連資料の収集」に関する問い合わせが増えてきました。そうした状況の変化にも後押しされて、「震災関連資料の収集」に本格的に取り組んでいったというのが実情です。

中越地震から7年が経過した2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。新潟県は福島県と隣接していることもあり、原発事故のために多くの方々が避難されてきました。長岡市内にも東日本大震災時に23ヶ所の避難所が設けられました。当然そこには避難所資料が発生します。中越地震の時も本館である長岡市立中央図書館が避難所になり、避難所資料をごく一部ですが保存しました。その経験を活かして市内に開設された東日本大震災の避難所資料を収集しました。

そして、2014年の中越地震から10年目の節目に、長岡市全体で全国の皆さんにこれまでの支援への感謝を示そうということで、「復興10年 フェニックスプロ

ジェクト」を展開しました。文書資料室もリレー講演会「災害史に学ぶ」、企画展「災害と復興をかたりつぐ」を開催し、二本柱の資料保存活動の成果として集積した所蔵資料群を「長岡市災害復興文庫」として市民に向けて紹介しました。

以上が文書資料室の災害対応のこれまでの流れですが、第3セッションのテーマである震災資料について、もう少し詳しくお話をさせていただきます。

先ほどもふれましたが、長岡市立中央図書館が避難所になりました。避難所になった図書館内に貼られた掲示物を保存したのが、文書資料室における震災資料の取り組みのスタートです。なぜ取り組みを始めることができたかといいますと、歴史資料ネットワークも関わっておられた報告書『阪神・淡路大震災にかかわる史料保存活動の記録』（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会、1997年発行）を、たまたま私が持っていたことがきっかけでした。このなかに体験談として、避難所資料をもっと集めておくべきだったという反省の言葉が書いてありました。この体験談は中越地震においても活かされるべきだろうと考え、本館の職員に電話をして、阪神・淡路大震災の事例を紹介しながら資料収集への協力を依頼しました。この時に2箱分くらい、セロハンテープが付いたままの避難所資料を集めたのが始まりです。この報告書からは、依頼文や呼びかけチラシのつくりかたなど、本当に様々なことを学ばせていただきました。

次に東日本大震災における文書資料室の活動を紹介します。震災発生後の2011年4月から6月にかけて、長岡市内に開設された避難所をまわって約50箱分の避難所資料を保存しました。避難所の掲示物、配布物、運営事務文書などです。数箱程度だった中越地震の時よりも量が大変多くなりました。とても文書資料室の人員のみでは整理が追いつかないので、ボランティアの皆さんのお力を借りることにしました。長岡市資料整理ボランティア（事務局：文書資料室）と新潟歴史資料救済ネットワーク（事務局：新潟大学人文学部）です。二つのボ

ランティアの皆さんとは、被災歴史資料の整理作業での連携実績がありました。整理のスピードが速まったことはもちろんですが、資料整理の方法論や避難所資料の内容論も作業のなかで考えることができ、大きな成果がありました。

そうした取り組みを15年間実践しながら、もう一つ意識したことは、自分たちの活動を活性化して刊行する、さらに展示会として発信することです。この点に気づかされたのも、先にふれさせていただいた阪神・淡路大震災の報告書です。

長岡市史双書No.48『新潟県中越大震災と史料保存(1) 長岡市立中央図書館文書資料室の試み』(2009年発行)は、それまで古文書を翻刻した歴史資料集であった双書の形態を変更して、取り組み事例集として刊行しました。中越地震以降に作成したチラシ・依頼文や広報活動の掲載事例など、文書資料室の4年間の取り組みを発信するものにしました。

矢田俊文・文書資料室編『震災避難所の史料 新潟県中越地震・東日本大震災』(2012年発行)は、中越地震と東日本大震災の避難所資料の図録です。2012年の段階では、東日本大震災の避難所資料を図録として紹介

するには早いかとも思ったのですが、新潟大学の矢田俊文先生から、「長岡市がどのような避難所運営を行ったのかがわかる事例集であれば、この後続くかもしれない災害対応の参考資料になるからいち早く情報発信すべきだ」とご助言をいただき、避難所資料そのものを図録化して掲載しました。熊本地震の応援に行った長岡市の職員が避難所運営の参考に被災地へ持参するなど大きな反響がありました。

展示という手法でも、人と防災未来センターなど、やはり阪神・淡路大震災を参考にして行っています。2016年には福島県の南相馬市立中央図書館との連携展示「南相馬と長岡 絆の記憶と記録」を南相馬市と長岡市で開催することができました。文書資料室の東日本大震災避難所資料は、福島県の皆さんに活用していただきたい記録資料だと思っていました。このように考えていたところ、ご縁をいただきまして震災から5年目に被災地で展示会を開催することができました。

ボランティアや関係機関・団体など、震災資料から生まれた様々なネットワークに支えられながら、文書資料室は15年間の取り組みを継続しています。

第3セッション 4  跡部 史浩



歴史資料ネットワーク事務局員を務めております跡部と申します。よろしくお願いいたします。

川内さんが述べられたような、今回の企画の主担当というわけではないのですが、初めに自己紹介も兼ねまして、神戸大学で行われている震災資料の活用の様子をご覧いただければと思います。そのうえで今回ご報告をお聞きし、ご質問したいと思いましたが私から質問させていただいて、フロアの皆さまや、パネラーの皆さまから最後に討議をいただくというような形をとらせていただければと思います。

喜田さんにもお話をいただきましたが、私は1994年12月に宮城県で生まれまして、大崎市の南に位置している大衡村というところの出身です。仙台市内の高校に在学している時に東日本大震災が発生いたしました。その時点で歴史学の勉強をしたいとは思っていたのですが、歴史の勉強をしながら震災後の社会について考え、あるいは具体的な関わりをもちうることはないかと考えた時、阪神・淡路大震災以来レスキューや、震災資料の活用をおこなっている歴史資料ネットワークの活動を知り、まもなく阪神・淡路大震災から20年を迎えるタイミングでもありましたので、神戸ではどのような取り組みをさ



写真1 震災・まちのアーカイブにおける調査の様子

れているのだろうと関心を持ちまして、神戸大学を受験いたしました。

神戸大学では2019年後期、吉川圭太先生が震災資料を用いた演習を開講されました。演習にあたっては、神戸大学の佐々木先生や、長田区で震災資料の保全活動をされている「震災・まちのアーカイブ」の季村さんをはじめ、当時の様子を知る方々からもご助言をいただくことが出来ました(写真1)。

今回の展示は、現在休憩室に展示されている大木本美通さんの写真を用いた展示に加え、被災地で様々な活動をされたボランティア団体が発行したミニコミ誌から、震災当時の社会を理解するという趣旨で行われました。演習は学生自身が課題を設定して資料調査を行うという、歴史学の演習と変わらない形で行われ、私は阪神・淡路大震災以来、現在も活動している神戸大学学生震災救援隊に資料調査をお願いいたしました(写真2)。残念ながら本集会前に会期が終わってしまいましたが、神戸大学附属社会系図書館で開催されました。

阪神・淡路大震災から25年を経て、神戸市民の方でもすでに4割の方が震災を知らない世代になったと言



写真2 神戸大学学生震災救援隊で保存されている震災当時の展示パネル

われています。私自身も、震災発生の直前に生まれており、震災を全く知らない世代ということになります。こうした中で、大学での活動に加えて、史料ネットを通じて阪神・淡路大震災の資料に触れる機会に恵まれました。こちらは次のセッションで登壇される真田さんのご家族が、発災間もなく撮影された写真の一部になります(写真3)。一番右奥に松の木が並んでいるのが見えるかと思いますが、こちらが石屋川沿いに並んでいる松の木で、その奥に会場になっている御影公会堂が位置しています。非常に小さな関わりではありますが、現在神戸でおこなわれている震災資料の活用的一端をご紹介させていただきました。

ここからは各報告への質問ないしコメントということですが、まず始めに喜田さんのご報告については、台風19号に関する第1セッションとも関連したご報告としてお願いさせていただきました。喜田さんが震災関連文書の保存にご関心をもたれたことも、阪神・淡路大震災の経験が伝わるのがなければ、そもそも震災資料に意義があるということが伝わっていなければありえなかった取材活動なのではないかと思います。その中で、特に行政批判が台風19号の被災地では非常に多いということでしたけれども、佐々木さんのご報告の中で、阪神・淡路大震災当時、行政批判をも含めた幅広い資料の収集活動がなされたというお話があったかと思います。佐々木さんのご報告をお聞きになり、喜田さんがお考えになったことを改めてコメントいただければと思います。また、佐々木さんからは行政批判を含めた資料の収集が、阪神・淡路大震災においてなぜ行政が主体となって可能



写真3 真田尚幸氏より提供された震災後の写真。灘区徳井町近辺か。

であったのか、改めて振り返っていただければと思います。

次に、田中さんのご報告についてですが、喜田さんからは一方で東日本大震災の被災地に阪神・淡路大震災の経験が必ずしも十分に伝わっていないというご指摘をいただきました。こうした中で、田中さんの文書資料室の活動は、阪神・淡路大震災の経験と反省が伝わり、中越地震の経験を経て、さらに東日本大震災の避難所資料の収集へと新たに展開していった、震災資料という考え方の広まり、さらなる新しい展開ということの事例であると考えております。なぜそのような活動を着想されたのか、改めて阪神・淡路大震災の経験が、田中さんが活動を始められるにあたって持った意義を振り返ってコメントをいただければと思います。

最後に、震災資料の活用や、保全、保存の担い手は誰になっていくのかということについて、ご質問出来ればと思います。自治体職員が持つ文書関係の権利が弱いという喜田さんの指摘がありましたが、一方でたとえば避難所運営に係る資料といってもその幅は広く、災害の現場ではいったい何が今後「震災資料」になりうるのかというのは、全く予想もつかないのではないかと思います。そうした中で幅広い資料を残し、さらにそれを活用して、震災を知らない世代も継続して災害の経験を考えていくような、機会や環境をどのようにつくっていくのか。東日本大震災の被災地では間もなく10年を迎えますし、新潟でも中越地震から15年、阪神・淡路大震災では25年という時間が経つ中で、若い世代を含めて今後どのような形での活動をお考えになっているのかを、3人のご登壇者の皆さまにお聞きできればと思います。非常に大掴みな質問になりますが、よろしく願いいたします。

質疑応答

川内淳史：ここから議論に進みたいのですが、まずは跡部さんから出されたご質問に対して、それぞれリプライをいただければと思います。

喜田浩一：最初の阪神・淡路大震災の経験とか教訓が東日本大震災の被災地によく伝わっていないのではないかとご指摘ですが、その通りだと思います。奥村さんや佐々木さんにお話を聞く中で思うのは、市民や研究者の方が阪神・淡路大震災の後に、自分が今何を使命としているのかという事をすぐに考えて行動されたという話を聞きますが、一方の東北地方は、やはりお役所任せといいますか、誰かに頼っているというところが大きいと私は思っております。その結果、東日本大震災の後、避難所はどんどん閉鎖されていくので、初期の段階から動かなくなっちゃいけなかったと思いますが、そういうところに気づく人があの時期ほとんどいなかったのではないかと思います。かなり違いを感じています。

佐々木和子：ご質問の内容に関して、1回目の研究会に関する資料では、センター長がこのような発言をしています。つまり、「この震災はまちづくりの住民参加、行政も関わり方、外国人とのコミュニティの在り方といった今後の日本の社会にとって重要な先例になる災害だ。」と。高度経済成長以降、初めて受けた都市型の災害にみんなが驚くとともに、そこで起こっているものごとを何とか残していけないといけないうという考えが、その地域にすごく広まったとも言われています。だから行政の人は行政の立場で本当に批判されました。私もその現場にいましたからよく知っています。後で冷静になって考えたら、それなりにやっておられたという気もしますが、やはり皆さんそれぞれが今起こっていることを何とか残しておかないとだめだなということの一つの表れが、その当時のセンター長の行政批判も含めて残さないとわからないというような発想につながったかなと思います。これは震災本部の方々が図書

館の本だけじゃなくて、ピラやチラシも含めて残さないと今回の災害の実態が分からなくなるという発想にもつながります。私がよく思った言葉に「見たことを見なかったことにはできないから、いろいろ思うことはあるけれども、見たものを見たことをそのまま残す必要がある」というようなことを多くの人の共感の中で始まった事業なのかなというふうに思います。

田中洋史：阪神・淡路大震災の経験がどうして長岡で活かされたのか。端的に言うと、一つ前を走っている方がいて、それにどうやって追いつくか。もう少し言うと、追いつくというよりどうやって真似をするかということに力を割くことができたためです。『阪神・淡路大震災にかかわる史料保存活動の記録—その時何を考え、行動したのか—』（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会、1997年）、稲葉洋子『阪神淡路大震災と図書館活動—神戸大学「震災文庫」の挑戦—』（人と情報を結ぶWEプロデュース、2005年）、この2冊を常に傍らに置いて取り組みを進めました。被災経験のある方はおわかりになると思いますが、災害直後というのは何か新しいことを創造するとか生み出すという力はすごく減退します。私自身も何とか日々を過ごすことで精一杯でした。先行事例があればその真似をして、アレンジしていくことができます。その先行事例が阪神・淡路大震災における取り組みの数々だったのです。

それからもう1点、長岡市は戊辰戦争に敗れ、そして、昭和20年8月1日の長岡空襲でまた町が焼かれるという歴史を経験しています。市民はもちろん、行政組織の内部にも、戊辰戦争や長岡空襲の経験から、歴史的な事象を記録資料として後世へ伝えていくことに対して、「それはそうだよな」とすぐに頷いてくれるような雰囲気があります。中越地震についても同様で、さらに阪神・淡路大震災の取り組みを先行事例として示すこ

とで、文書資料室の取り組みに対して様々な理解・協力を得ていくことができたのです。

板垣貴志



山陰史料ネットの板垣です。震災資料の今後の行方について議論されてきましたが、すでに私たちの社会には、危機に直面している資料群があって、それは75年前の戦争とか戦災体験記録類です。これら75年前の経験に関する資料群の行方と25年前の震災資料の今後の行方は深く連動していると思うんです。たとえば神戸空襲を記録する会とか、そういう資料収集の経験があるんですよ。戦争・戦災体験記録類すらその必要性が認識されずに保存されないのであれば、震災資料も危ういと思います。両者の研究の対話が今後必要なんじゃないかなと個人的には思っています。

青柳周一



喜田さんのお話を伺っていて感じたことですが、神戸市での震災関連、公文書に関してはどうなっているのでしょうか。調べてみますと、神戸市では神戸都市問題研究所で公文書整理を担当して、その整理が2018年3月末で終了になっているようです。都市問題研究所自体が同時期に解散し、現在は別の部局に事業が引き継がれたというような流れになっ

ているようですが、この辺りで公文書の扱いだとか震災に関する今後の調査研究について、どう市として取り組んでいるのか、ご存知の方にお伺いしたいと思います。

白井哲哉



茨城史料ネットの白井と申します。佐々木さんにいろいろ教えを受けながら、主として阿部さんと福島県の原子力災害被災地における震災資料の問題をやっています。

福島の被災地は1Fの事故で全町避難をしている地域においては民間の震災資料の収集はほとんどできていないと申し上げたほうがいいでしょう。その理由について、住民が全国に散在しているということが一つ大きな問題としてあります。それで何をやっているのかということと喜田さんのお話に出てくる震災公文書の保全ということでもあります。これが出来た理由は復興が遅れているから出来ているということです。いよいよ町役場の機能が町内に戻り始めていますが、そこでその間にできた公文書の廃棄年限、保存期間が完了したものをどうするかという議論にたまたま介入的に関わり始めることができたので何とかその保全に手を打っているということです。

一つ申し上げたいのは、資料としての保管をやはり考えをちゃんとしなければいけないと思います。喜田さんのお話にありました通り、内閣府が震災関係の公文書は保存年限にかかわらず保存すべきという通達を全国の市町村に出して、それは一程度浸透はしているんですが、何が震災公文書なのかというのがわからない。一つ事例として大熊町での経験でいうと、役所に勤めたことのある人は旅行命令簿というのをご存知だと思います。一般的には1年の保存期間が設定されていて、1年後に廃棄されます。これを震災資料として評価する必要があります。なぜならば大熊町は役場を福島県会

津若松市に移していました。従いまして、大熊町の職員が浜通りの大熊町役場出張するという旅行命令が記録されていました。通常では想像もできなかったことです。そのように震災、災害という観点から公文書評価を別にしなければなりません。これは大きく言えば公文書というものの歴史的な性格を吟味する、調査分析することが求められている。現代資料としての震災公文書の調査研究が必要ということです。もっと大きく言えば、歴史学の問題としては20世紀後半どころか21世紀における現代資料論というものをどう考えるかということ、実は震災の現場で我々は直面しているところがある。被災地で資料保全にかかわる人材は、やはり考古学や史学の関係者が多いと思いますが、史学科だけでなく、アーカイブ学科の人間に、その他諸々の人達に協力を得た資料論、資料研究というものを持ち上げていく必要があるだろうと思っています。以上です。

佐々木: まずは板垣さんの話に簡単に答えたいと思います。戦争体験の経験についてということですが、私はピースおおさかや神戸空襲を記憶する会にも関わってきました。これを例にすると今も困難性が見えてきているということだけをお伝えしたいと思います。民間でそういう事をやってきて、今、各記録する会の活動が終わりに向かっています。ここで収集した、資料等についての行き場がないというのが現状です。多分東京にある民間の戦災・空襲資料センターは可能かもしれないが、やれる範囲は決まっている。神戸の話となると非常に難しい時期です。神戸市にもお願いしましたが、じゃあそれがどうなっていくのかわかりません。実際のところはなかなか難しい状況があるというのが一点です。

それから震災公文書の話ができました。これは2010年の記事ですが、整わずと書かれています。県は残したいのですが、なかなかその後になると資料を整理して、デジタル化して目録の整理も年限が経つとうまくいっていないという記事です。

神戸市の場合、こういう形で8年間かけて、始めは3年だったのですが、8年間かけて震災公文書の整理をいたしま

した。今は神戸市のホームページから文書目録というのが検索できるようになっています。こういった形でファイルの名前を付け替えて、検索がしやすいようなタイトルを付け直した形で整理をされています。神戸市役所の情報公開のところの一角にこういう文書が置いてあります。そこで目録を検索して請求をする。この仕組みは情報公開請求の仕組みに則ってやるという形で公開しています。ですから都市問題研究所が無くなった後も神戸市が情報公開の制度を使い、公開か不可かは神戸市の判断でということを利用してできるようになっています。ただ、今6,400箱の半分くらいまで残っているのですが、その内容についてはどうなのかということまでについてはなかなか整理ができていないので、これについては機会があったら検討してみたいと思っています。

奥村弘: 全体の議論を踏まえ、最後にコメントしたいと思います。災害資料が私達に投げかける問題の基礎には、きちんと私達が未来に、私達の社会の有り様をちゃんと伝えられるかどうかということにあると思います。その力がどこまで強いかがということが実際には記憶が歴史として伝わっていく力になるので、その意味では災害資料だけが残るわけではない。被災した歴史資料もそうですけれども、全体としてそれが引き継がれていることが大事だということをおそらく歴史文化全体の力量の問題であると考えます。災害資料や被災歴史資料が残っていないというのは、歴史関係者が社会の中でどこまで力量があったのかというのを、私は示すものだと思っています。まだまだやるべき事は多いですけども、しかし課題がはっきり見えていることも確かなので、この課題を一つ一つどういうふうにならしていくかということを考えていくことも、こういう研究交流集会の議論の場の醍醐味だと思っていますので今後もよろしくお願いいたします。

第4セッション

資料保全の担い手の広がりと未来

登壇者

泉田 邦彦
(石巻市教育委員会)

小野塚 航一・真田 尚幸
(歴史資料ネットワーク)

下玉利 紀子
(長岡市立中央図書館文書資料室)

水末 啓太
(愛媛資料ネット)

司会

大国 正美・河野 未央
(歴史資料ネットワーク)

大国正美：歴史資料ネットワークは、資料を救済する歴史学者の集まりとしてスタートしましたが、近年では様々な分野や人びとへの広がりを見せております。本セッションでは、様々な可能性が広がるなかで関わってきた人たちと意見交換をしたいという目的で、本セッションを企画しました。昨日のセッションでは、歴史学会のなかでこうした行動を評価されてきましたが、その一方で、資料ネットのような活動が市民社会とどのように繋がっていくべきかということも重要なテーマかと思えます。



河野未央：本セッションのテーマは「未来」です。ここでは登壇者の皆さまからのお話をもとに、会場の皆さまと考えることができればと思っております。



まず、登壇者のご紹介をします。最初が泉田邦彦さんです。現在石巻市教育委員会にお勤めですが、本日は東日本大震災における茨城史料ネットを起点として現在に至る取り組みについてお話いただきます。泉田さんは福島県双葉町のご出身で、自宅が原発事故に伴う警戒区域内にあります。本日は、ご自宅に残された古文書のレスキューも含めお話いただけるかと思えます。

次に、神戸史料ネットの運営委員である小野塚航一さんです。神戸の史料ネットで被災資料保全活動について2016年から大船渡被災資料のクリーニング活動などのボランティアサイドの取りまとめをやっておられます。今日はそのお隣の真田尚幸さん。神戸史料ネットボランティアでご参加いただいているんですけれども、一般の市民ボランティアの方です。神戸大学のまちづくり地域歴史学講座の受講をきっかけに史料ネットボランティアの常連さんになりました。元々は技術屋さんとして、新幹線などの設計をされている方で、歴史畑じゃないということで、なぜ資料ネットがというところを併せてお話いただけたと思いますし、そうしたボランティアさんの取りまとめをされている小野塚さんの話をお聞きいただければと思います。

こちら側の机ですね、下玉利紀子さんです。長岡市立中央図書館文書資料室にお勤めです。中越地震や東日本大震災の震災資料の整理作業について本日はお話いただきます。こちらボランティアの方々の作業の取りまとめをされているということで、お手元の資料のほうに長岡市図書館の長岡市災害復興文庫というパンフレットが入っているかと思いますが、こちらの作業に関して詳しくお話をいただけたと思います。

一番右端になりますが、水松啓太さんです。愛媛資料ネットからのご参加ということで、西日本豪雨の時の資料ネットの活動についてお話いただきます。愛媛大学の学生さんで、西日本豪雨被災資料の乾燥・クリーニング作業で学生ボランティアとして継続的に参加されているということで、本日このあたりのお話を伺いたいと思います。

それでは早速なんですけれども、自己紹介を含めて活動の自らの紹介と取り組みなどを泉田さんから順にお話いただければと思います。泉田さん、よろしく願いいたします。

第4セッション 1  泉田 邦彦

まず、私の活動について紹介いたします。詳細は自己紹介覧を御覧いただければと思いますが、2011年から2014年にかけて茨城大学に学部・修士と在籍し、茨城史料ネット事務局と

して活動しました。その後、2014年4月からは東北大学の博士過程に進学しまして、宮城資料ネットの会員として、活動に参加してまいりました。一方で、私の生まれは福島県双葉町という、福島第一原子力発電所の5号機・6号機が立地している自治体です。原発事故を受け、私の実家も震災直後は警戒区域となり、現在も居住が認められていません。ふるさとの歴史を残したいという思いから、実家周辺の資料保全活動に取り組んでいます。現在新しい取り組みとしては、今年蕃山房から『大字誌両竹』という冊子を刊行いたしました。

なぜ私が資料ネットの活動に関わるようになったのかについて、最初にお話したいと思います。2011年3月11日、私はたまたま実家の隣町にある大熊町で高校生に弓道を教えており、そこで地震に遭いました。その後、原発事故もあって2週間ほど福島県内を中心に転々として避難生活を送っておりました。実家は地震による大規模半壊とともに、沿岸から800mの場所でしたので津波による浸水被害を受け、さらには原発事故により立ち入ることすらできなくなりました。

そうしたことを経験したこともあり、私が資料ネットの活動に関わるようになった理由としては、震災時の体験が大きいです。一つは、避難所を転々とするなかで受けた多くの支援でした。避難したそれぞれの場所で、おにぎりを握ってもらいそれを食べた時、あまりにも嬉しくて美味しく、なにも言葉がでなくてただただ泣きながら食べるという経験をしました。それ以降、何か大変な時には自分も何かしら返していかなきゃいけないという思いが芽生えたことは背景としてあったと思います。また、今回あらためて振り返って思ったのですが、小・

中学校が一緒だった地元の友達が、原発事故当時も福島第二原発に勤めており、私が避難している時も原発の中で作業にあたっていました。そうした同級生がいる一方で、何もできなかった自分に対する歯がゆさが当時はかなりありました。このような震災時の体験をしたことによって、震災に対して何かしら自分にできることをやる必要があるのではないかと考えたことが、資料ネットに関わることになった要因の一つだと思います。

震災当時、茨城大学に在籍していましたので、茨城史料ネットに参加していくのですが、当初はまだ資料ネットが立ち上がっていませんでした。私の専門は日本中世史で、指導教官が高橋修先生でした。高橋ゼミでは、茨城大学中世史研究会を母体として、震災直後から茨城県沿岸部、特に鹿嶋市などで被災状況調査を行っており、その過程で高橋先生から声を掛けていただき、その活動に参加しました。その後、2011年7月に茨城史料ネットが準備会として発足し、その流れで資料ネットの活動に関わるようになりました。

このように話していくと、当初から明確な問題意識をもって資料ネットに参加したようにも聞こえますが、実際はそのようなことは全くありませんで、最初はゼミ活動の一環だと思い込んで参加していました。先生と先輩に声をかけてもらったこともあり、中世史研究会の活動に参加しているという認識で、あまり深く考えていませんでした。学部の4年生になって部活を引退し、時間的に余裕があったこと、なによりもみんなと活動するのが楽しかったというのがこの活動に参加した直接的な動機でした。

活動の意義について理解するようになったのは、大学院に進学してからでした。2012年6月頃、神奈川資料ネットから茨城史料ネットの話をしてほしいと事務局に依頼があり、私が担当することになりました。その時に先輩達を書いた論文などを読みながら、資料ネットの役割について認識することができました。それまでは、資料ネットへの参加は、どちらかというと受け身の立場で

関わっていたのですが、自身が事務局として活動をコーディネートする役割となったことで主体的なものへと変化していきました。活動を続けていく中で、資料レスキューのノウハウなどを身につけることができ、そうした先に今度は当時警戒区域内で立ち入りが制限されていた実家の資料レスキューを始めてみることになりました。

私の実家は相馬中村藩領でして、先祖は中村藩の在郷給人でした。初代から数えて私がちょうど10代目にな

ります。約200年続く家で、家の蔵に古文書や甲冑、相馬野馬追で使っていた陣羽織などがあり、放射線量を計測して安全を確認した上で茨城大学へ運び出しました。さらに、茨城史料ネットの定例資料整理の場で、ボランティアの方や西村慎太郎さんが代表を務めているNPO法人歴史資料継承機構じゃんぴんが古文書整理などをお手伝いしてくれました。これまでの私が経験してきた活動としてはこのようなかたちになります。

歴史資料ネットワーク

第4セッション 2 小野塚航一



歴史資料ネットワークの小野塚と申します。よろしく申し上げます。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は現在、神戸の史料ネットの活動に携わっていま

すが、修士課程までは金沢大学に在籍していました。2007年の能登半島地震の際には、石川県羽咋郡志賀町にある浄土真宗大谷派の常德寺の経蔵が大きな被害を受けたのですが、指導教員に連れられてそこで初めて史料レスキューを経験しました。この時、「地震が起きてすぐに神戸の史料ネットから連絡があったよ」という話を聞いたのを覚えています。その後、研究を続けるため神

戸大学の大学院に進学しました。進学後しばらくは、ボランティアの立場で史料ネットの活動に参加しましたが、2013年から委員を務めています。委員になってからは、2014年8月豪雨、常総水害、西日本豪雨、そして昨年の台風19号と被災地の史料レスキューに従事してきました。その一方で、市民ボランティアとの史料整理作業にも力を入れています。私が担当しているのは、東日本大震災で被災した岩手県大船渡市の個人宅所蔵の史料群です。宮城資料ネットよりお預かりして、2016年3月から始めました。本セッションでは、この市民ボランティアとの史料整理作業での経験をもとに議論に参加したいと思います。

歴史資料ネットワーク

第4セッション 3 真田 尚幸



神戸の史料ネットに一般ボランティアとして参加している真田と申します。

最初のご紹介にもありましたが私は元々学生の時に自然科学の世界に入り卒業後は製造業で

仕事をするというその方面での一般的な人生を歩んできました。おそらくここにいらっしゃる多くの方とは全く別のフィールドで暮らしていました。そのため今日の話は資料保全の基本の“き”もわからないままですが、逆にフィールドの外から少し中に入ってみたらどんな景色だったかというようなところをお話できればいいかなと

思っています。

昨日、御影公会堂の紹介のお話がありましたが、御影公会堂とは少しご縁があります。小さくて見えないかもしれませんがこちらの古い写真は一般的な結婚式での親族の集合写真です。実は裏に年月が記載されており昭和44年3月17日大公会堂挙式場ということで51年前に私の両親がここで結婚式を挙げた時のものです。このような場所でお話させていただくのも何かのご縁かと思えます。

私が史料ネットと知り合ったきっかけというのは、災害資料を頑張っって何とかしようということではありませんでした。2年少し前の2017年10月に神戸大学の公開講座を知り何となく参加してみたところ各地の資料保存活動についての紹介があり、そこには一般の人も参加していますというお話を聞く機会がありました。講師の先生に聞いてみたところ「大船渡の資料整理を神戸大でやっていますよ」と教えていただき史料ネットのホームページを見たところ次の日に作業が予定されていたので、すぐに電話すると偶然吉原事務局長に電話にでいただき参加してみようということになったのがはじまりでまさに偶発的な出会いによるものでした。その後2年間いろいろな作業に参加させていただいているのですが、特に災害資料を救出するという使命感というよりは、少し変な例えになりますがたまたま入った路地裏の居酒屋がなんだか居心地がよかったみたいなそんなノリで2年経ちました。最初に参加した時には小野塚さんがお話

されていた大船渡から救出されてきた資料の作業が行われていたのですが、すでにドライクリーニング作業が全て終わり写真撮影のステージに移っていたタイミングが初めて参加した時の状況でした。写真撮影の作業もさることながら、資料そのものが固着していてカチカチになっているという状態も初めてだったのですが、実はさきほどお話した経歴の通り、そもそも古文書に触ったことがなかったのでわたしが人生で初めて触れた古文書はカチカチに固着していたもので、それがノーマルな古文書という状況がスタートでした。ただ何回か参加していると現状はどういう状況なのだろうという興味が出てきて、次に元はどういう状態だったのだろうかと考えるようになりました。そのような中、一昨年12月に事務局長の吉原さんから突然電話がかかってきて広島で水損した資料の作業の手伝いをできないかというお話をいただき、本当に興味本位というか好奇心の一点でやってみたくらいと思い広島のほうにお邪魔しました。私にとってノーマルな固着した資料が冷凍して解凍された状態ではどういものだったのか初めて見ることができ、なるほど水損した当初はこのような状態で処理をされていたのだというプロセスをその場で初めて体験し、お手伝いをさせていただくことができました。わずか2日間でしたが、現場の皆さんは本当に大変だったと思うのですが、個人的にはいろいろ初めてなことばかりで楽しみながら作業をさせていただきました。このようなことが今に至る経緯になります。

長岡市立中央図書館文書資料室

第4セッション 4 下玉利紀子



私は転勤族の妻として縁もゆかりもない長岡市に移り住みました。そこで図書館でのアルバイト募集と勘違いして文書資料室の職員採用試験に応募したのが発端でして、現在に至っております。

現在55名程が在籍している市民ボランティア

「長岡市資料整理ボランティア」の運営を担当し、月1回程度の活動を行っております。

私の業務として取り組んできたことは、一つはボランティアを増員すること、もう一つがマスコミ報道をしてもらうための広報活動です。後者は、具体的には市広報課を通して報道機関に取材依頼をする、いわゆる「投げ込み」という活動です。私の前任者は専門知識がとて

豊富な方でしたので、その方に代わって私ができるとすれば、こうした内容ではないかと考えたことが要因です。それまで文書資料室では、広報活動があまり活発ではありませんでしたので、少しもったいないと思っていました。その結果、メンバーはかなり増え、私が採用

された7年の間に専門知識のある職員も2名増員されました。被災経験の全くない私でも、なんとか次の方にバトンをつなぐことができたのではないかと感じています。

愛媛資料ネット

第4セッション 5 水松 啓太



まず、一昨年、西日本豪雨では、皆さまから多大なご支援を賜り、本当にありがとうございました。今後もどうぞよろしくお願い致します。

愛媛資料ネットに参加するものとして、愛媛大学の日本史研究室で現在行っている活動を紹介したいと思います。現在、大学で保全作業を行っている資料は、宇和島市吉田町の立間公民館に保管されていた資料です。これらは、公民館の近くを流れる本村川の氾濫により、4,000点から5,000点、段ボールや

桐箱200箱以上が被災しました。その内、水損した106箱を救出後、冷凍作業を行いまして、現在では愛媛大学日本史研究室にて吸水、乾燥して目録化の作業を行い、元あった公民館へ返却しております。

西日本豪雨の時には、私は2回生でまだ何もわからず、泉田さんと同じようにゼミの活動の一環として、先生や先輩からの指示を受けて淡々と作業を行うような状況でした。今年度からは学生のとりまとめ役を担当することになり、毎週、他の学生と共に精力的に活動に参加しています。

パネルディスカッション

河野未央: 皆さまの紹介が終わりました。それぞれのお話をお聞きしながら気づかれた点などについてお話いただければと思います。皆さんのお話を通して共通の部分を見出せたらなと思っております。

泉田邦彦: 昨日も茨城史料ネットの学生が主体となった活動について話題になり、外から見た時にはそう見えているのかなと思います。私が在籍していた当時は、学生主体であるが故の課題はかなりありました。1つは専門性の乏しさです。なかなか自分達だけではどう整理していいのかわからない。目録を作成しても解読不能な箇所ばかりでした。外部からボランティアで来てくださった方に資料整理のやり方やノウハウを教えていただき、徐々に専門性を身につけながらどうにか活動していたと

というのが実態でした。

学生が事務局を担っていたことの課題としては、あまり自分の研究に没頭できなかったという部分はありました。2011年度、私は学部4年でしたが、歴史の研究よりも預かってきた被災資料の整理をよくしておりました。その後修士課程に進んだ後も、修士2年の9月頃まではずっと学生に指示を出しながら、資料整理のコーディネーターやデータ管理ばかりをやっていました。

恐らく皆さんご経験があると思いますが、資料を返却するまでにはすごく時間がかかりますよね。そのため、私たちのような震災直後の世代では完結しないことがほとんどで、引き受けてきた資料を次の世代、後輩たちに引き継ぐこととなります。一緒にやってきた仲間なので

安心してお願いしてきましたが、自分達が預かってきた資料なのに後輩に託して行って彼等の研究時間をつぶしてしまっていることは課題として感じており、今思うともう少し何かできたのではないかと感じているところです。

ただプラスな面で言いますと、資料レスキューに携わったことが地域や歴史を考える上で、非常に大きかったなと思います。何も分からなかった学生が、自分ができるところから、例えば、ドライクリーニングや写真撮影をするといったところから関わって行って、目録作成の方法も少しずつ身につけていきました。何より被災した蔵に入って行って、土蔵から資料を発見して、それを現状記録して運び出してくる。それを大学に持ち帰ってきた後にドライクリーニングをし、封筒詰めをしながら、目録を作成する。最終的に調査研究を行い、資料返却時にはその成果報告をして地元に戻元するという、発見から公表までの一連のプロセスを体感できました。その結果、地域において資料がどのような環境で残ってきたのか、資料群として扱うことがどれだけ重要なのか、個人の家に残された資料が単なる家の歴史にとどまらず、地域社会にとってもどれだけ重要なのかを知ることができ、資料レスキューを通して体感できたことが非常にプラスだったかなと思っています。活字の史料集からはわからない、生活につながる歴史を実感できたとも思います。

小野塚航一：神戸や兵庫県内といった近隣の地域ではなく、岩手県大船渡市という遠方の地域の被災史料を受け入れて市民ボランティアと整理作業を行う取り組みは、実は史料ネットの歴史で初めての試みでした。当然、参照すべき前例がないわけです。ですから、当初は運営の仕方で色々悩みました。最初の頃は、「所蔵者に一刻も早く返却しなければならぬ」という意思が前面に出てしまい、ボランティアの方々に対しては作業に従事してもらうだけの環境しか用意できませんでした。静まり返った中で、淡々とドライクリーニングや写真撮影をしてもらう。しかし、これは先程の真田さんの言葉を借りれば、決して「居心地のよい」環境ではなかったと思います。そのことに気づき、環境を変えるため試行錯誤しました。例えば整理作業とは別に、一緒に整理している被災史料を読んでみる。あるいは、修復家の尾立和則さ

んに協力してもらい剥離や錯簡のある史料を修復・復元するワークショップを開催する。主として参加者が交流できるような環境作りですね。こういった試みを通じて、史料整理作業の現場が「居心地のよい」環境になるよう努めてきました。こうした環境改善の取り組みは、これまでの史料ネットの活動と重なる部分があると考えています。史料ネットが直面してきた問題の多くは、解きほぐしてみると「論理」と「心理」のぶつかり合いや、その噛み合わなさだと私は考えます。「論理」とは、史料整理作業で言えば、スキルがない。ボランティアが集まらない。こういったどうしようもない現実のことです。では、「心理」とは何か。史料整理作業で言えば、楽しくやりたい。たくさんの人に集まってほしい。実現はしていないけれども、これが最善だと我々が考えるものです。現実の社会において、両者の関係は往々にして「論理」が「心理」を抑圧する、あるいは屈服させる構造にあります。ただ、うまく表現できているか分かりませんが、史料ネットの活動の特徴は、「論理」と「心理」の噛み合わなさやギャップをそのまま受け止めるのではなく、発想のモチーフに変えてきたことにあるのではないのでしょうか。阪神・淡路大震災後の初めての史料レスキュー。2004年から始まる水害対応。そして私が担当している市民ボランティアとの史料整理作業。いずれも、どこかの場面で何かしらの「論理」と「心理」の競合・葛藤があったはずですが、しかし、そこで足を止めず、むしろそれを発想のモチーフにして活動を展開してきた。史料ネットは今年で創立25年目になるわけですが、自分自身の経験から活動を振り返ってみると、以上のようにまとめることができるのではないかなと感じています。

真田尚幸：はい、今小野塚さんのお話にありましたが私は小野塚さんが悩まれて実践されてきたことを受けてきた側で、居心地がよかったと感じたというのは今のお話を聞いて改めてタイミングが良かったのだなと思いました。みなさんが試行錯誤をされた後の状態で私は入ったので、作業している時もいろいろ話を聞かせていただいたり、私が初めて参加した時には作業の最後に古文書を読むということもあったので、私にはそれが当たり前の空間になっていました。特に私のように基礎知識がゼロのところから始まっていると、見るもの、やる事全部が

新鮮ですので作業中も会話をするような空間を作っていたか、と聞いていたおかげで作業しながら「これは何ですか」ということも遠慮なく聞いていました。当時参加されていた皆さんはボランティアの先輩方も含めて、親切にその都度教えていただけていましたので、本当にいい空間ができたところに飛び込んだということを、今改めて感じました。

課題というか一方的にこちらからの感想ですけれども、やはりちょっと運営側とボランティアの間に垣根があるのかなと思っています。垣根というのは別に悪い意味ではなくて、いろいろと試行錯誤していただいていることがボランティアに気を遣ってもらっていることになっているのかなと思っています。何かの時に「ボランティアさんにそこまでやってもらったら悪いので」というようなことをおっしゃられたことがあったのですが、そこはちょっと違うのかなと思っています。写真撮影ならカメラのシャッターを切るためだけに参加しているわけではなくて、そもそも我々からすると使っている道具なども珍しいですから、準備とか片付けなども楽しくできる場所の範囲であると思います。逆に私からすると目的がぶれなければ、目的というのは一つでも二つでも資料の処理ができるという目的がぶれなければそれにつながる作業は全部頼っていただければいいのかなと思っています。もう一つは一緒に作業するというので、我々から見ると専門家の皆さんとお話をしながら作業をするというのが楽しいのであって、目的がぶれない、一緒にやる、ということさえ外れなければ作業は全部楽しいものだと思います。逆にどんどん頼って欲しいというか、そもそもボランティアに来ている人は頼りたいという潜在意識がどこかにあるのではないのかなと思いますので、もっともっと頼っていただければいいのかなというのがボランティア側からの感想です。

下玉利紀子:私の気づきとしましては、小野塚さんがおっしゃっていたことに近いのかもしれませんが、行政機関の予算と歴史学の観点からの保存と整理、資料の保存や整理というには常に相反する関係にあるように気づきまして、上の図書館長や長岡市の方針が変わるとその時々でやってほしい仕事の優先順位が変わってしまうので、時々すごく頑張ってきたことが、無になったような気持

ちになったりして、ちょっと悲しくなるようなそういうこともありました。あと文書資料室のこれからの課題としましては、長岡市資料整理ボランティアの課題、ボランティアメンバーがすごく増えて、整理してきたものが結構溜まってきたので、専門職、知識のある職員さんが配置になったところでこれからまた整理を進めて、内容を積極的に紹介する段階に入ってきたんじゃないかなと思っています。

水松啓太:資料保全に関わる文献には、理想的な保全方法が載っています。例えば、水損した文書に対して、キッチンペーパーを使う吸水方法などですが、我々は新聞紙を使って吸水しています。真空冷凍というお話が昨日もあったと思いますが、そのような機械は愛媛大学にはありません。しかしながら、愛媛大学には国内外の沿岸環境を調べるための生物試料を冷凍している es-BANK という研究所があります。1階と2階が全て冷凍庫という大きな施設での冷凍保管をお願いし、一時保管をさせていただいています。理想的な方法を知った上で、現状で出来る方法によって、とにかく資料を保全する活動を行っています。理想と現実の間で、学生と先生、その他の団体の方たちと相談をして、方法を探しながら、実践的に、実験的に取り組んでいます。個人的には今年度、長野県栄村の資料調査に参加させていただいて、楽しい環境を整備するという事を学び、ユニークな調査環境に驚きながら活動しました。我々の大学の作業では黙々と活動しているというところがありまして、今後、地域の方々も含めて、活動に参加しやすい環境づくりに取り組んでいきたいと思っています。

河野:愛媛資料ネットについては、神戸の史料ネットのとある方が見に行った時に統率がとれていてとても良かったという評価があるので、いろいろカラーがあっていいと思いました。

1点だけ下玉利さんにお伺いします。もし差し支えない範囲で構いませんので、方針が変わるといのは例えばどういう事ですか？

下玉利:長岡市災害復興文庫の構築に関する活動を積極的に推進するという方針から、震災から15年経ってひと段落したのだから被災歴史資料以外の地域資料の整理に重きを置くようにと、予算面も含めて方針が変わって

しまうことです。

河野:理想と現実という話、あとボランティアで参加される側と受け入れ側と2つの立場の話が出てきたかなと思います。神戸でも、長岡でも、それぞれの立場から、担い手の裾野を広げるためにはどうしたらいいか、いろいろ取り組んでこられたことがわかります。

では次に、どういう形で担い手の裾野を今後切り拓いていけばいいのか、未来に向かってのアイデアをお聞かせ願えますか。現実的でなくてもいいと思います。「こんなだったらいいなあ」という希望でも構わないです。

引き続き水松さんからお願いします。現在愛媛では、毎週2回、水曜日と木曜日、9時から5時という長時間、活動されていることをtwitterで拝見しました。今後こういうふうにしていきたいなという展望がありましたら、お願いします。

水松:我々は学生主体で活動しています。資料保全の活動に若い世代が携わっていることは今後の担い手を考える点でとても重要なことであると思います。ただ、我々は学部生ですので将来の方向性も異なりますし、卒業後に直接、資料ネットに関わる人は少ないと思います。しかしながら、進路は違えども、地域の歴史資料を守り伝えていくという経験をした人達が一人でも多く社会に出ていくということは災害時には大きな助けになると思います。災害が起きた時には災害ゴミが大量に出て、そこに民間資料がたくさん放棄されるような事態が、毎回どこでも起きていると思います。非常時の資料廃棄を未然に防ぐような役割を、保全活動に関わっている若い世代が今後担っていくものと思います。また、地域内での資料保存の担い手についても心配です。現在、我々が保全活動を行っている資料のなかには、愛媛ミカン発祥の地としての歴史を記したものもあります。今後、地元の方々によって保存されていくためには、自分たちが保存している資料がどのようなものなのかを理解した上で活動を展開しないと継続的な活動は難しいと思います。大学での保全活動は来年度には完了する予定です。その後の活動として、地元の方々との交流の中で、保全した資料を積極的に活用し、地域の歴史を知る活動を展開していくことができればと思っています。そして、何よりもその活動を通じて地元の人達に保全活動の輪を広めていけ

たらいいのかなと思います。

下玉利:裾野を広げるという意味では、絶対数が大いに越したことはないと思います。始めから選抜メンバーにすると小さくまとまってしまう。7年間勤めていても、古文書に全く興味を持ってなかった私が言うのも何ですが、たくさん入ったボランティアメンバーの方からは、本当に古文書に興味を持って、ガラッと化ける人が出てきたりするので、絶対数は多いほうが裾野を広げるためにはいいと思いました。

真田:裾野という意味では市民参加という言葉がいろいろなところに出てくるので、私のような人間が増えるようなことを想定されているのかなと思うのですが、今までの経験では神戸の史料ネットに最初に参加した時の印象もそうでしたが何か歴史のフィールドにいる人ばかりが参加しているなど感じていました。例えばそんなにど真ん中ではなくても、何かしら歴史学を学んでいたとか、歴史学の神戸にいる学生さんであるとか、という印象です。確かに歴史学には切り口はいろいろあると思いますが、広い意味で歴史に興味のある人は世の中にたくさんいるにも関わらずあまりマッチングできてないのかなあという印象はあります。実際に道を歩けば歴史好きという人はいっぱいいると思います。逆に私がいた世界でいうと量子力学の発展のためにボランティアしたいという人はいないのではないかなと思いますので、それに比べるとこの分野で何かやりたいという人はたくさんいると思いますがなかなかマッチングができていないなという気がします。私は神戸の史料ネットの中でも最初「なぜこの人来たのだろう」と思われていたかもしれないのですが、いろいろな場に参加させていただいて神戸の史料ネット以外の方とお話をした時にも「そのような経歴の人が神戸の資料ネットにいるのですね」と言われたことがあります。一回ではなく何回もいわれました。そもそも作業ボランティアとして来ているだけなのに、歴史学以外の世界から参加していると珍しがられていること自体が皆さんの意識の中で潜在的にフィールドの範囲を決めておられるような風土があるのではないのかなということ逆いろいろな人とお話させていただくことで感じたりしています。そもそも担い手としての市民というものを皆さんがどういうところに想定されているのかな

と思ったりするところですが、その辺は「いや、そんなことないよ」というご意見もあると思いますので、一市民の感想ということでしょうかいただければと思います。

小野塚: 担い手の裾野を広げることは大事ですが同時にとても難しい問題でもあります。史料ネットの史料整理作業は、高校生を始めさまざまな方に参加いただいています。しかし、1回だけ参加してその後は参加しなくなってしまふ方が少なからずいるんですね。それは何故か。先程の真田さんのご発言とも関連しますが、歴史資料のためだとか、地域社会のためだとか、そういった崇高な使命感をもって参加するボランティアの方はいません。参加動機は「歴史に興味がある」「史料に興味がある」「別の参加者に誘われて」、あるいは「旅行のついでに」みたいなものもありましたが、とにかくさまざまです。とはいえ、そこには使命感とは無縁の一種の「気軽さ」が通底しているといえるでしょう。ここで注意したいのは、こうした「気軽さ」に基づく行動選択は、複数の選択肢からあくまでも一時的に選ばれたものであるということです。ボランティアの方はその時間に他のことをする選択も本来はあったわけですから。そうすると、ボランティアへの参加という選択は相対性の中で価値づけられていることになる。つまり選び直すことができるわけです。すなわち「次回は行かない」選択肢が潜在的に含まれている。この「次回は行かない」選択をいかに回避してもらうか。一つの方策は、さきほどから話題に出ている「居心地のよい」空間の創出にあると思います。それからもう一つは、ちょっとうまく表現できているか分かりませんが、頭に浮かぶ行動選択の一つではなく、自分の足元にある問題として史料整理作業ボランティアを考えてもらえるような仕掛け作りです。作業の意義を参加者自身が自発的に考えるようになるきっかけ作りと言い換えてもよいでしょう。具体的な方法はまだ模索中ですが、担い手の裾野を広げるにあたっては、必然的にリピーターを増やす問題が出てくるはずで、これについては引き続き考えていきたいと思っています。

泉田: 小野塚さんは難しく考えすぎじゃないかなと思いました。私の立場は先ほど話しましたが、まず福島では自分の実家に古文書がある所蔵者であり、被災者である

立場。次に茨城では資料ネットに学生ボランティアとして携わった学生の立場。そして宮城では石巻市教育委員会に勤めている行政の立場。以上の3県でそれぞれ異なった立場で経験を積んできました。その上で、まず茨城史料ネットの時の経験を踏まえて、資料ネットの裾野を広げるのにはどうすればいいかということについて述べてみます。あまり難しいことは言うつもりはないのですが、多分皆さんは難しく考えすぎているなあ、組織論に走りがちというところがあるのかなと思います。現在私は各資料ネットの会員になっていますけれども、特定の資料ネットで運営委員をやっているわけでもありません。組織というより、志の同じ人と一緒につながることで実家周辺の資料保全に取り組んでいます。その立場からいいますと、ただ単純に楽しいから人は入ってくるんだと思うんですよね。特に先程真田さんのほうからありましたけれども、たまたま入った路地裏の居酒屋の居心地がよかったというのは真理だなと思うんですよね。そういうところじゃないとみんな入ってこないと思うんですよ。どうすれば組織がうまくまわっていくかという難しいことを考えるのももちろん大事なことなのですが、これって恐らく私の感覚だと居酒屋の三次会四次会くらいで残ったコアなメンバーで、まずは語り合えばいいような話であると思うんです。それよりむしろ、資料整理の中でこういうことがわかったとか、この人とこの人が実はこういう関係だったとか、あれはこういうふうに書いてあるよとか、毎回資料の目録を作っていく中で出てくるネタを共有することが大事だと思います。茨城の活動では、一回資料整理が終わるごとにホワイトボードに情報をまとめて共有していました。資料整理後は居酒屋に行き、「あの時のあれはこうだったよね。」と、わーわーやりながら、資料を通じて楽しく語り合っただけで話題と時間を共有するという関係と、一方で資料とは全然関係ないんだけど、このメンバーといるとぶっちゃけた話ができるみたいな関係をお酒を飲みながらやっていく。そうすることで、変な話、非常に居心地のいい居酒屋になっていくのかなということを思います。やはり資料ネットというのは、ひとつのボランティア組織でありますから、資料保全をやることは大事な目的ですが、それだけじゃなくて人と人との関係があって人が集

まってくるようなところを私は大事にしていきたいと思っています。茨城史料ネットの場合では、毎週資料整理後に飲み会があったり、あとは高橋修先生が「よし、今日はホーリーホックの試合があるから、資料整理が終わったらサッカー一見に行こう」と発案してみんなでサッカーを見に行ったりとか、そういった何というか、かちっとかたまらないで、楽しいことをしていいんだという雰囲気がありました。もちろん専門的な議論もしますし、それを学部生も交えてすることもありましたが、ストイックに歴史学をやりたい人が本当に少ないなかで、特に学部生ってちょっと難しい話を院生がすると引いちゃうことがありますから、そうじゃなくってみんなが入ってきていいんだよというところを上立場の人が意識していく、入りやすい雰囲気を作っていくということが大事なんじゃないかなということを思います。

あともう一つだけ、福島のほうの立場からも述べておきます。自分の活動の宣伝になるんですが、NPO 法人歴史資料継承機構の西村慎太郎さんにクラウドファンディングをやっていただいて、今10年計画で『大字誌両竹』という本を編纂しており、その第1号を2019年12月に出しました。私の実家がある双葉町両竹地区は、原発事故被災地になっていて、避難指示解除準備区域なので一応数年後に解除されるというようなことになっているんですが、津波で全戸被災していて、かなりの家が解体除染されました。泉田家もそうですが、家が残っているお宅さんでも別の地域の家を建てて生活しています。なかなか戻るに戻れない状況で、でもやっぱり両竹は大事だよねという想いを、皆さんの持っている記憶とかを拾っていききたいなということを考えています。

私や西村慎太郎さんの場合は、専門が歴史学で古文書が読める。そういった中で古文書を読み解いて、両竹の面白さを伝えていくところが我々の役目だと思っています。ただ、それだけじゃなくて、この地域に住んでいたからこそのわかる、例えば地名の伝承とか、地域で起こった戦争体験とか、お祭りのこととか、そういう情報も含めて大字両竹の歴史はこういう成り立ちだったんだよというところを残す試みが重要だと思います。まだ不十分ではあるのですが、『大字誌』にはできるだけ多くの人を取り込んでいきたい。本当に地域に愛着をもち続けて

いくのは、恐らく研究者ではなくてこの地域に住んでいる（住んでいた）人だと思うんですよ。その人達をいかに取り込んでいくか、それが地域コミュニティの存続や、今後地域社会に資料を残し歴史文化を伝えていくことの大事なところなんじゃないかなと思っております。宣伝になりますけれども、『大字誌両竹』は蕃山房という仙台の出版社から出しております。今日、私は10部、西村さんが8部手元にあるということで、会場に18部あるわけなんですけど、もし無くなった場合は後ろのテーブルに「よみがえるふるさとの歴史」という蕃山房から出している本の注文票があるので、その裏側に『大字誌両竹』と書いてfaxすると注文ができます。是非手に取っていただきたいなと思います。

長くなって申し訳ないんですが、第1号は我々研究者が書いた文章のほか、私の父親に1本論文を書いてもらいました。何を書いたかというところと泉田家は、人が住めなくなって動物がいっぱい出てくるんですよ。そこにトレイルカメラを4か所ほど仕掛けて2018年1月から1年間動物がどういふのが出現するのかを記録した動物観察記を書いてもらったんです。これが抜群に面白い。何がいたかというところと、タヌキ、キツネ、イノシシ、野ウサギ、キツネ、テン、ハクビシン、アナグマ、アライグマ、キジ、あとはリスですね。11種類観察ができています。これを一個人が、研究者ではない一般市民が自分の関心で記録しており、それをちゃんと文章にまとめたということ、しかも原発事故被災地でやっているということが面白い取り組みだと思うんですね。是非皆さん、『大字誌両竹』は蕃山房から創刊号を12月に刊行しましたので、私か西村さんか蕃山房の只野さんにお声がけください。よろしく願いいたします。

河野：一日目のセッションとは議論が逆方向のように見えますね。一日目は「歴史学で…」という話だったんですけども。今日はいったん、その「歴史学」というフィルターを外すようなお話しをしていただけたと思います。裾野を広げるうえで、活動するまさに私達自身が、かけていたかもしれないフィルターを外すことは、どこかで必要なことだと思います。実際の活動と照らし合したときに、下玉利さんの「絶対数を増やす」というお話は重要です。また水松さんの「資料ネット活動を経験した人

が社会に出ていくこと」の意義お話をしていただきました。神戸のネットは活動を通じての、「気づき」の話でした。泉田さんのお話しは付け加えることなく、パーフェクトです。まとめることは致しませんけれども、それぞれの活動の実態とそれぞれの思いを、知っていただきたい

だったので第4セッションを設けました。ちょっと時間が超過しているんですけども、10分までは時間超過は構わないということなので、13時10分までがっちりとりたいと思います。もしよろしければフロアの方からのご発言を。

第4セッション 質疑応答

齋藤善之



宮城歴史資料保全ネットワークで理事長をしております齋藤と申します。

2日間参加させていただきまして、非常に意義のあるシンポジウムになったというふうに私は感じました。神戸に生まれた資料ネットが、この25年間どのような活動をしてきたのかという自己検証をしてくださったんですけども、こういう機会は意外と初めてだったのではないのでしょうか。私達も資料ネット活動に携わっていますが、先輩である神戸がこういう活動をしてきたことを総括的に教えていただき、本当にいい機会になりました。

宮城資料ネットも2003年から活動を始めましてもう17年になるわけですけども、運営委員会の中で自分達の活動がそろそろ自己検証する段階に来ているのではないかと議論しています。そういう活動の一つとして、次の世代に継承するという含めて、これまでのレスキュー現場を訪ねる旅を、若い人達や市民ボランティアさんなどと一緒に訪れ、我々の記憶を共有する取り組みを今年から試行的に始めました。日々クリーニングしている資料の救済経緯などを知ってもらうという機会になったのかなと思っています。

最後に来年のお知らせをしたいと思います。第7回全国史料ネット研究交流集会については、来年2月に宮城県仙台市で開催させていただきたいと考えております。宮城だけではなく、福島、茨城、山形、岩手といった隣接する東日本でやってみたいと考えています。これからこういったネットワークの方々少し連絡とりながら、運営、企画を考えていきたいと思っています。

来年は東日本大震災から10年目にあたります。10年目という節目にあたり、今回の集会の成果を踏まえながら、皆さんと情報を共通していきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

多和田雅保



神奈川資料保全ネットの多和田です。横浜国立大学の教員でもあるので、そういう立場で若干話をします。私の所属している学部は文学部ではなく教育学部です。今日話をいただいた方々が文学部であるとか、法文学部であるとかというところでゼミの延長のような形であるとか、研究会のようなことで活動ができるという話を聞いて、正直とっても羨ましいと思いました。今教育学部はカリキュラムががんじがらめでそんな時間は到底とれない課程であります。という状況を前からずっと常に痛感していて、神

奈川資料ネットで学生を巻き込むということができていなくて、当然人数も全然足りないわけです。前からずっとよその、例えば茨城の話であるとか神戸の話を聞いて「そういうところは羨ましいな。どうせ自分のところはできないもんね」みたいな感じで考えていましたが、真田さんや下玉利さんの話を聞いて、やはりそれではいけないんだなというふうに思いました。私の勤務校のように文学部のない大学でそれを今からつくる、歴史の講座をつくるというのは到底無理な話ですが、居心地のよい居酒屋っぽいような空間だったら大学の中になんか、それは紛い物かもしれないけれども、できるかもしれない。それは歴史をやっている人間に限らずそういう場面を作っていくことは非常に大事なのかなというふうに考えました。実は文学部のない県というのは結構あって、そういった県でも資料ネットを当然つくっていかねばいけないわけで、でもそういうところでもそれなりの工夫をして資料ネット活動をしているところもあるというふうに思っていますので、これは感想なんですけれども、今日のお話をヒントにもうちょっと自分でも何ができるかということを考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

井上瑠菜



宮城資料ネットの井上です。第4セッションのテーマは大変興味深いと思いました。登壇された皆さんの話も大変貴重ですし、真田さんのお話が特に印象的でした。私達は歴史や資料保全などの専門的キーワードだけで関わっていると思いがちですが、改めて考えてみると、このボランティア活動は人と人との関わりや人の営みという、もっと身近なもので繋がっていたんだなぁと感じました。フィルターを外したボランティアのあり方を教えていただいたような気がしました。私も宮城学院女子大学の学生時代に資料ネットのボランティアに参加させていただいて、なんとなくそこに住み着いて、ボランティアのおじさま、おばさま方に御指導いただきながら楽しく活動してきたのをふと思い出しました。歴史の研究、勉強のためという言い方だけでなく、新しいボランティアのあり方や人の新たなつながりを探していけたらなぁと思い、「来年度から井上動きます」という強い気持ちで新しい取り組みを考えていきたいと思いました。ありがとうございました。

河野:ありがとうございました。第4セッション、非常に時間が超過してしまい大変申し訳ございませんでした。これで終了したいと思います。どうぞ皆さま、「居酒屋」というキーワードだけ覚えるのではなく、議論の内容全体を、お持ち帰りいただけるようお願い致します。ありがとうございました。



会場風景 3



会場風景 4

閉会挨拶

歴史資料ネットワーク代表

奥村 弘



二日間どうもありがとうございました。

もうすでにいろんな方からまとめをいただいているので、ここでは新たにまとめることは致しません。まずは何よりも今回いろんな形でご協力いただきました各地の資料ネットワークの方々にお礼を申し上げたいと思います。また、共催をさせていただきました人間文化研究機構のほうにもお礼を申し上げます。今日の最後のセッションの中にも出てきておりますが、被災地にお伺いして、いろんな方とお話している時に、人と人とのつながりがとても大事だということ、いろんな形で本日出席された皆さまとご協力しながら、ひとつでも前に進めていけたらなあと考えていますので、是非ともよろしく願います。

今回の試みは歴史資料ネットワークの若い委員の方を中心にかなり議論をしながら進めさせていただきました。このセッションの持ち方や議論の仕方も大丈夫だろうかと私自身はすこし心配していたのですが、吉原事務局長をはじめ、新しいやり方ということで今回新たな形でやらせていただきました。いろいろと大変だった面もございましたけれども、こういうやり方も、今後皆さんの活動の中で活用をしていってもらえればと考えているところでございます。

先程も宮城資料ネットのほうからありましたけれども、来年は東日本大震災から10年ということで、東北のほうで研究交流集会を開いてみたいというふうにお伺いしております。来年度は2月頃に行いたいとの予定を考えられています。場所として仙台なのかどうかは決定していないようですが、どこかでお会いすることを楽しみにしております。

25年間資料ネットワークを進めてきましたけれども、歴史資料ネットワークの活動や組織のあり方は最初から予定されてこんな形になったわけでは全くございませんでした。やはりその時その時の大変な状況に対応しながら励まし合いながら進めていった結果としてこういう状況になったと思っております。

このところほぼ毎年夏に水害が起り、歴史資料も被害を受けるようになって

まいりました。また今年の夏も大変なことにならねばいいのではと考えております。全国でいろんな形で大変なことが起こるかもしれませんが、力を合わせて頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。ご参加ありがとうございました。

オプション企画「被災歴史資料保全ワークショップの考え方」

各地の資料ネットにおいては、独自のワークショップ等を通じて、被災歴史資料保全の担い手を広げるための活動を続けています。このオプション企画では、そうした取り組みの基礎にある考え方について、宮崎と神戸の資料ネットが取り組んできたワークショップの実例に即して紹介しました。

宮崎歴史資料ネットワークの山内利秋・松山真弓両氏からは、実際に災害が発生したときのことを想定して行う災害時図上訓練（DIG）の方法について、歴史資料保全の観点から説明しました。

また、歴史資料ネットワークの松下正和・河野未央両氏からは、神戸史料ネットが2006年から続けている被災資料応急処置ワークショップの方法について、最近の応急処置方法も紹介しながら説明しました。

いずれにおいても、「ワークショップを企画する側」が、どのような視点と方法をもって進めるかにポイントを置いたものでした。ワークショップの参加者が、それぞれの現場において、被災資料保全の担い手をこれからさらに広げることが期待されます。

災害時図上訓練





報告者 プロフィール

※所属等は 2020 年 2 月時点のもの

第 1 日 2 月 8 日

原田 和彦（はらだ かずひこ） 長野市立博物館学芸員。1963 年長野市生まれ。國學院大學大学院博士課程（前期）修了。善光寺地震、真田家文書を中心に勉強しています。2014 年長野県北部地震では、長野市、白馬・小谷村での文化財レスキュー活動にかかわりました。昨年 10 月に発生した長野市の水害では多くの皆様にご支援、ご協力をいただきました。本当にありがとうございます。今後ともどうかよろしくごお願い申し上げます。

蝦名 裕一（えびな ゆういち） 東北大学災害科学国際研究所准教授（災害文化研究分野）／NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局。1975 年青森県青森市生まれ。専門は日本近世史。主著は『慶長奥州地震津波と復興』（2014 年、蕃山房）。

東日本大震災の経験を活かして、地域の資料保全と歴史災害の研究に取り組んでいます。最近は文化財マップを作成するとともに、これを活用した災害前の資料保全活動の構築を目指しています。

阿部 浩一（あべ こういち） ふくしま歴史資料保存ネットワーク代表／福島大学行政政策学類教授 専門は日本中世史。最近の共著に『歴史を未来につなぐ「3・11 からの歴史学」の射程』（東京大学出版会、2019 年）など。

2011 年の東日本大震災を機に、福島県での歴史資料保全活動に取り組んできましたが、2019 年は台風 19 号による広域的な被災への対応に追われています。今回の集会では、なかなか発信できずにいる福島県内の台風被害と資料保全活動の状況についてお伝えできればと思っています。よろしくごお願いいたします。

有馬 花苗（ありま かなえ） 茨城大学大学院人文社会科学研究科 修士 2 年

茨城大学で日本近世史を研究しております。大学 2 年生のころから茨城県内を中心とした史料整理にかかわっており、2015 年の関東・東北豪雨や 2019 年の台風 19 号において史料レスキュー・修復に参加してまいりました。より多くのことを学びたいと考えております。よろしくごお願いいたします。

佐藤 和明（さとう かずあき） 茨城大学大学院人文社会科学研究科 / 茨城史料ネット事務局員

茨城大学大学院で近世史の研究をしております。学部 2 年時に関東・東北豪雨を経験し、その際に救出された資料の洗浄・修復を行ってきました。昨年 10 月の台風 19 号の際には、被災した地域に赴き資料の救出等を行いました。今回はそこの活動について報告させていただきます。よろしくごお願いいたします。

奥村 弘（おくむら ひろし） 歴史資料ネットワーク代表委員／神戸大学大学院人文学研究科教授。専門は日本近代史・歴史資料学。阪神・淡路大震災後の歴史資料ネットワーク設立から現在に至るまで活動を続けている。

大国 正美（おおくに まさみ） 歴史資料ネットワーク運営委員／神戸深江生活文化史料館長。専門は日本近世史。阪神・淡路大震災後の歴史資料ネットワーク設立から現在に至るまで活動を続けている。また、神戸を中心とした兵庫県の郷土研究誌『歴史と神戸』を発行する神戸史学会でも活動している。

松下 正和（まつした まさかず） 歴史資料ネットワーク副代表／神戸大学地域連携推進室特命准教授 1971 年大

阪府生まれ。本来の専門は日本古代史。近年は被災資料の応急処置方法の開発、自治体や住民団体との地域連携事業、災害記念碑を活用した自主防災組織の活動支援に取り組む。『水損史料を救う一風水害からの歴史資料保全』(岩田書院、2009年)。2019年12月末段階の在庫は213冊とのこと(同HP)。

板垣 貴志(いたがき たかし) 山陰歴史資料ネットワーク/島根大学法文学部准教授 1978年、島根県出雲市生まれ。専門は日本近現代史。神戸の史料ネット活動に参加して学び培ったものを、山陰で応用しています。最近は、地域に残されてきた民間所在の近現代資料の調査・研究を住民参加で取り組んでいます。遊び心のある資料保存活動を目指しています。

中野 賢治(なかの けんじ) 山梨県立博物館学芸員 1979年長野県塩尻市生まれ。専門は日本中世・近世史。島根県古代文化センター研究員・島根県立古代出雲歴史博物館学芸員を経て2014年から現職。近年の主要な論文は、「元亀年間の西念寺」(『富士山 山梨県総合学術調査報告書2』、2016年)や「甲府藩の藩領分布とその藩政」(『山梨県立博物館研究紀要 第12集』)など。

川内 淳史(かわうち あつし) 東北大学災害科学国際研究所准教授 1980年青森市生まれ。専門は日本近現代史資料保全論。資料ネット活動への関わりは、2007年に歴史資料ネットワーク運営委員となり、2011年同事務局長(5代目)、同副代表(3人目)を経て、現在、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク事務局(ヒラ)。

第2日 2月9日

喜田 浩一(きだ ひろかず) 河北新報社大崎総局長。1965年生まれ。東北大学法学部卒。88年入社。青森総局、報道部、白石支局、横手支局、生活文化部などを経て2019年、宮城県北の大崎市に転勤。台風19号の豪雨によって国管理の吉田川が決壊し、被災地の取材に当たりました。歴史公文書の保存や地方公文書館に関心があり、細々と取材しています。

田中 洋史(たなか ひろし) 長岡市立中央図書館文書資料室室長

1972年、新潟県長岡市出身。新潟大学教育学部・同大学院教育学研究科にて日本中世史を専攻。高等学校の非常勤講師、長岡市立中央図書館・同文書資料室の嘱託員を経て、2009年4月に歴史的な文書(郷土史)専門職員として長岡市採用。2015年4月より現職。郷土の歴史資料の保存・活用に関する業務に取り組んでいます。

跡部 史浩(あとべ ふみひろ) 神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程/歴史資料ネットワーク事務局員

1994年、宮城県生まれ。日本近現代史専攻。神戸大学附属図書館企画展「記憶から歴史へ」(2015年)、「阪神・淡路大震災と地域の復興」(2018年)の企画・展示作成、『阪神・淡路大震災を撮る』(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、2019年)の作成に参加。

佐々木 和子(ささき かずこ) 神戸大学地域連携推進室特命准教授。主な著書に『阪神・淡路大震災 伊丹からの発信』(共著、伊丹市立博物館、2012年)、『本庄村史 神戸市東灘区深江・青木・西青木のあゆみ』(共著、本庄村史編纂委員会、2008年)など。

小野塚 航一(おのづか こういち) 歴史資料ネットワーク運営委員・事務局員/神戸大学大学院人文学研究科研究員。1985年生まれ。茨城県つくば市出身。専門は日本中世史。普段は市民ボランティアとの史料整理作業の運営や事務局

の雑務を担当しています。昨年は被災地での史料レスキューにも参加しました。

真田 尚幸（さなだ なおゆき） 歴史資料ネットワークボランティア／神戸市灘区出身／1995年1月神戸市灘区内で阪神・淡路大震災を経験／2017年10月よりボランティア作業に参加。東日本大震災被災資料の資料保全活動に参加して以降大阪北部地震、西日本豪雨の被災資料の保全活動に参加。部分的な作業を経験する中で保全活動の全体像にも興味があります。

下玉利 紀子（しもたまり のりこ） 長岡市立中央図書館文書資料室非常勤嘱託員

1972年生まれ。2013年から長岡市立中央図書館文書資料室に勤務し、長岡市資料整理ボランティアの皆さんとともに活動しています。

泉田 邦彦（いずみた くにひこ） 石巻市教育委員会複合文化施設開設準備室主事／東北大学大学院文学研究科博士後期課程

1989年福島県双葉町出身。専門は日本中世史。2011年～2014年3月（茨城大の学部・修士）、茨城史料ネット事務局として資料保全活動に参加、東北大進学後は宮城資料ネットの会員となる。東日本大震災から現在に至るまで、福島原発事故被災地となった実家周辺の資料保全活動を実施し、浪江町請戸や双葉町両竹の大字誌編纂に取り組む。2019年12月、西村慎太郎氏と共編で『大字誌両竹』創刊号を蕃山房から刊行。

水松 啓太（みずまつ けいた） 愛媛資料ネット／愛媛大学法文学部3回生。1998年岡山県倉敷市生まれ。日本近世史専攻。

西日本豪雨で被災した史料の修復活動に参加しています。本年度各地で被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

山内 利秋（やまうち としあき） 宮崎歴史資料ネットワーク

その土地その土地の条件に見合った資料ネットの活動というものを考えてきました。ゆるく、長く続けて次の人たちに継承できるような活動というのは、案外地方社会の伝統文化などにヒントがあるのかもな、と思っています。今回、オプション企画では宮崎と鹿児島で実践している災害を想定したシミュレーションをご紹介しますが、これもそうした長く続けていくための活動であると考えております。

ポスター発表者

天野 真志（あまの まさし） 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／国立歴史民俗博物館特任准教授

1981年生まれ。島根県浜田市出身。日本近世・近代史、資料保存。

地域の実情に応じた資料保存の考え方など考えています。

伊藤 実（いとう みのる） 比治山大学非常勤講師（博物館資料保存論）／（公財）広島県教育事業団埋蔵文化財調査室主任専門員（再任用）1957年福岡県飯塚市生まれ。専門は考古学。以前勤めていた広島県立歴史博物館や歴史民俗資料館で保存担当学芸員を兼ねていた関係で、文化財の災害レスキューや保存処理に興味をもつ。文化財保存修復学会、日本文化財科学会所属。

井上 瑠菜（いのうえ るな） 宮城歴史資料保全ネットワーク運営委員／東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門学術研究員／日本美術史

2016年から宮城歴史資料保全ネットワークの活動に参加しております。被災地からレスキューされた歴史資料や美術作品は、地域とどのようにつながり、どのように語り継がれていくのか。地域に根差した活動を続けていくことで、これらの問いの答えを見つけていきたいと思っています。

今村 直樹（いまむら なおき） 熊本被災史料レスキューネットワーク事務局次長／熊本大学永青文庫研究センター准教授

1979年生まれ。日本近世史・近代史。

『日本近世の領国地域社会』（共編、吉川弘文館、2015年）、「廃藩置県後の細川家当主所用甲冑と旧家臣」（『永青文庫研究』創刊号、2018年）。

熊本地震後の被災資料レスキュー活動の成果と課題を、全国の皆さんと共有していきたいと思っています。

上村 和史（うえむら かずふみ） 岡山史料ネット事務局長 / 岡山県立倉敷鷺羽高校非常勤講師 1991年、岡山県生まれ。

日本近世史専攻。西日本豪雨被災資料の救出保全に際して、みなさまには大変お世話になりました。現在、月1回の修復・洗浄作業や目録作成を行っており、その成果が少しずつ形になりつつあります。

宇野 淳子（うの じゅんこ） 神奈川地域資料保全ネットワーク事務局長

横浜市出身。2019年9月以降の大雨や台風による神奈川県内の被災に際し、全国の資料ネットワークの皆様からお見舞いやお力添えをいただきました。心より御礼申し上げます。県内の団体や災害ボランティア等と連携し、県内で初めて被災対応をしたのは大都市圏の形成によりできた地で水損した企業資料でした。その概要等を報告します。

小田 真裕（おだ まさひろ） 千葉歴史・自然資料救済ネットワーク運営委員／船橋市教育委員会生涯学習部郷土資料館主任主事（学芸員）1980年生まれ。

専攻は日本近世史。「資料ネットだからできること」「行政だからできること」「市民だからできること」って何だろう？と日々考えています。2日目のみの参加ですが、皆様との意見・情報交換を楽しみにしています。

白木 ひかる（しらき ひかる） 独立行政法人国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進室・アソシエイトフェロー
日本の近代建築に興味をもち、大学・大学院では建築史を学ぶ。2018年4月より現職。日々学ばせていただくことばかりですが、お力になれるように精進してまいります。

高野 宏峰（たかの ひろみね） 地域史料保全有志の会／中央大学大学院博士後期課程、栄村史編纂調査執筆員、立川市地域文化課市史編さん担当嘱託ほか

1970年、東京都生まれ。日本近世史・近代史。2011年の長野県北部地震の翌年から栄村での文化財保全活動に参加しました。当時は東村山ふるさと歴史館に勤めていましたが、現場におけるレスキュー活動を通じて地域資料保存の大切さを改めて痛感しました。持続的な資料の保全について取り組み続けていきたいと思っています。

武子 裕美（たけし ひろみ） NPO法人歴史資料継承機構じゃんぴん理事兼事務局長／茨城県立歴史館副主任学芸員

じゃんぴんでは楽しく資料の保全を、をモットーに作業をしています。今回はじゃんぴんのメンバーで楽しく壁新聞を作らせていただきました。地域の方々と共に楽しく資料を遺していければと考えております。

塚田 楓菜（つかだ ふうな） 新潟歴史資料救済ネットワーク／新潟大学大学院現代社会文化研究科博士前期課程
1996年生まれ。日本近現代史専攻。新潟資料ネットで被災資料の整理・保全活動に携わっています。

丹羽 謙治（にわ けんじ） 鹿児島大学学術研究院 法文教育学域 法文学系 教授 1962年愛知県生まれ。専門は日本近世文学、日本近世文化史。薩摩藩の出版文化や薩摩藩士の研究を通じて、歴史資料の公開、保存・継承などの問題について関心を持つようになり、現在は鹿児島大学の同僚や宮崎歴史資料ネットワークと協力して、「史料保存と活用」の取り組みを行っている。

橋本 唯子（はしもと ゆいこ） 和歌山大学教養協働教育部門 准教授／兵庫県・滋賀県などで博物館・自治体史編さん事業関係機関・文書館に勤務、2013年から現職。図書館における貴重資料の保存および活用・地域連携事業や自然災害時の資料保存・学芸員養成課程などに携わる。『世界史とつながる日本史：紀伊半島からの視座』（ミネルヴァ書房、2018）など。

町田 哲（まちだ てつ） 歴史資料保全ネットワーク・徳島／鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 准教授
1971年長野県須坂市生まれ。『近世和泉の地域社会構造』（山川出版社、2004年）、「近世の焼畑と村落構造」（『歴史評論』825、2019年1月）、「地域史の実践と市民社会の形成―書評・奥村弘『大震災と歴史資料保存―阪神・淡路大震災から東日本大震災へ―』―」（『歴史科学』215、2014年3月）など。「微力だけど無力じゃない」という言葉に励まされながら、何とか活動を続けています。どうぞよろしくお願いします。

松山 真弓（まつやま まゆみ） みやざきアートセンター 学芸課長 多くの方に日常的に文化・芸術に親しんでいただけるよう、さまざまなジャンルの展覧会やイベントを担当しています。2015年から宮崎歴史資料ネットワークの活動に参加しています。できる時にできることをモットーに細く長くの活動をしていきたいと思っています。

胡 光（えべす ひかる） 愛媛資料ネット代表／愛媛大学法文学部教授／四国遍路・世界の巡礼研究センター長／日本近世史
2018年西日本豪雨から救出した文書の修復・調査をボランティアや学生の皆さんとともに継続しています。ネットオークションに出された地域資料の救出についても対応を考えています。

第6回全国史料ネット研究交流集会 in 神戸 報告書



発行日：2021年2月1日

編集：歴史資料ネットワーク

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内

人間文化研究機構「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117 国立歴史民俗博物館

発行者：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

協力：科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を基軸とした災害列島における
地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）研究グループ

製作：蕃山房